

え？何さ、……大丈夫だよ、心得てらあね。早くおし、急いでさ。——さ、入らつしやい。」  
「故と御辭退申しますまい。……唯今女中へのお言葉では、檀那がお留守らしいから。」  
「知りませんよ。」

「しばらく……」

「あれ、吃驚した、……こんな處を、鷗が飛ぶかと思つたら。」

薄汚れた鼠色の中古帽が、くしゃくしゃと羽を擴げたやうに、風に從つて舞上つたのである。

「すつとこを遣らないと、凄味がないからと思つてね。帽子の鉢巻と蝙蝠傘のしめ緒を結へつけて置いた奴さ。待つて下さい——下駄も穿きます。」

里吉は褌を取りながら、すかすやうに其の砂土手の松蔭を。

「こゝに野宿をして居たの——道理こそ、さつき通る時、血が痒いやうに、こぼれ松葉が、裾から太脛を擦つたんだよ。」

「私の鼻毛がつゝいたのさ……其の白やかな處をね。」

「まあ、何うしよう私。」

六

築地何丁目かの(水仙)とか言ふ、支那料理を出た二人連がある。——道を歌舞伎座前、電車通の方へ取らないで、ぶら／＼歩行で河岸へ出たのは、一杯機嫌を夕風に吹かれる氣らしいが、風は些ともない。

「大分蒸しますな。」

「然れば。」

前のは、五十三四のでつぷりした金持風で、無地縞の單衣に、鑄鐵縫紋の同じ羽織、セルの袴を裾擴がりにふはりと捌いた、象の足に草履穿、紺足袋で。ちと反身に、太腹をうんと張り、胸を引込めるやうにして、はた／＼と扇子使で行く。水際に並んだ後のは、扇子を左腰へちよんとさし、織ものの帯をきちんとしめ、萬條の結城を着た、小柄で瘦せたお爺さん。——茶無地の薄羽織を袖疊みにしたのを、紙入と一所に、懷中ばかりつつしりと大いが、日和下駄で、ひよこりで行く。やゝ、いかつい肩つき、乾からびた手首に、世に事古りたる更紗染、媼どのの手縫と覺しき信玄袋、緒のしめ方が粗雑ゆゑ、袂落しの煙管筒が、あはれ本願寺が近いから、其の媼どののお土産の線香のやうに端が覗く。……かてて加へて手拭までがはみ出たのを、ぶらりと下げ、縹子張の太い逞しい蝙蝠傘の、老ゆるの杖と見られるを心外とか、つかずに、張肱で突張つて居さつしやる。年紀は連の漢の上を、もう十ばかり。帽子だけは見事にして、眞新しいパナマだが、



寸法がたるんで、耳の根まですつぽりと嵌つたさへあるに、すり下るのを頤で掬ひ据ゑるやうにして、用心の護謨紐を、きちやうめんに結んだ體は、陣笠に似て宛然たる雑兵首。しかりと雖も、かぶさつた廂の底から、遠く想ひ、遙に望む、細くて薄睡つたやうな皆に威があつて、への字を逆にした唇がキリ、と緊る……此奴が、ともすると小鼻の皺を貫いて、左の方へぐいと釣上ると、些と事が面倒で、あたり近所へむづかしい。これぞ當流の能樂界、宿將の第一人、六方惣三郎、行年つもつて六十四歳、あだな豆腐老人である。

どの字書を翻しても(豆腐)——と言ふ、こんな字は見當らない。……案ずるに、此の小父さん、一歳一門の若手を引率して、甲府へ興行に赴いた時、舞臺を濟して休息の旅館へ引揚げると、聞えた大酒豪が酔に乗じて、周囲の警告をもの數とせせず、土地の藝妓を總上にすると言つて奮み出した。時世に疎かつたのである。たかく、田舎の新地である。笹蕎麥か、針箱どころで、片手で持てるものと思つたのであつた。お弟子の算盤の達者なのが、給仕の姐さんに、「串戲だがね」と逃を張つた上で、當つて見ると、其の旅館の居まはりだけでも、お酌まじりに三百何人と言ふのを、もれ聞いて舞臺に釣鐘が落ちたほどに仰天し、豫ての我慢が此の時ばかりは尻餅をついた。が、一旦總あげと言ひ出したものを、おめくと引込んで、中興彌次郎兵衛の名をねにやる。はて、何をがな總揚の廉を立てずんば、と其處で思ひついたのが大すきの豆腐であつた。

朝から三度づ、幾日でも飽きないほどだから、此に限ると、一旦敗亡して床の間を落ちたのが、その表座敷大廣間の縁側へ踏留まり、欄干に肱を張つて、町通を睨廻した。——山々もみぢの夕暮を、熱爛で氣鏡ひつつ下を通る豆腐屋を、片つ端から呼込ませて、焼も、あげも、がんもどきも、荷にあるだけは空にさせた。しぐれの頃とて豆腐は賣れる季らしい。やがて、小父御の年の數ほど賣子を數へたさうである。

以來、蔭で豆腐翁、豆腐老人などと言ふのを竊に知つて、苦笑ひして居たが、やがて自ら表徳としたものだと言ふ。……が、わがものに腐の字は可厭だ、場所は甲府だ——其處で豆腐と稱したのである。いま連れの漢は其の時の興行に別に關はりはないのだけれど、同じ甲州郡内の山持で、東京に大肥料會社を經營する、——棚澤十内。——此が里吉の……旦那々々。

七

「これは一雨來ませうぜ。」

と、十内が寛げた白襟を煽ぎながら言ふと、

「然れば……」

と、もう一息目を細くして、夕暮の空模様を仰いだ、豆腐老の目は、とろりとして居る。



「日和癖だてね。さしたる事もありませんまいが、大分空が暗くなりました。尤も、もう日の暮だ。ほう、其の癖、此の邊の森は伐拂つて明く成つた。いや、三方堀のやうな川で、樹木森々としたもので、夜分はもの凄いい處でね、此處等、諸侯方の別荘地だ。河童の本場さ、近い頃でも、よく人が魅されましたよ。」

と言ふうちに、瘦脛を片足擡げて、單衣の尻をぐいと端折る。

「大先生、大丈夫、まだ電燈が入つたばかりです、燈が白いくらるですわい。お身構には及びません。」

「は、いや、此は。」

と、はじめて氣の付いた様子で、洒落れた稗詩でない、此のあたりのものは見知るまい、案山子のやうなおのが形を、あはれむが如く撃み視て、

「魅す奴より、化ける奴だ。此の方が先へ尻尾を顯しました。習は性とか聞きますが、さて、可恐いものだてね。最早や久しい以前には成るが、此方人等づれ世に詰つて、駿府——静岡だね——駿府へ落ちて、お城のまはりの夜番を勤めた覚えがあります。」

「ほう。」と、又一つ大きい襟許を煽いで言ふ。

「御維新あとききの、あの騒ぎだ。——見殺しも不便とあつて、ぼつちり餌は下されたが、駿府

で謹み中の將軍家だ。八百萬石の身上も、其の日暮しと成つては、能どころの沙汰ではありません。まして駈出しの此方人等如きが、扇を開いて立上つた處で、厩の蠅も追へない次第さ。さりとて、一椀に預る冥利、唯遊びでは勿體ねえから、其處で火の番の夜廻りさね。駿府城の濠のへんを、毎夜、夜陰に及んで。」

と采女橋を渡りかける。

「は、あ、——(明治三十五年成)——か。」

屈み腰に透し讀して、

「三十五年と……采女にしては年を取つたが、——橋にしてはまだ新娘だ、此の方の好む處」と、蝙蝠傘を橋板へトンと支く。

「御道理で。」

「いや、御貴殿とて、嫌ではおあんなさるまい。」

「は、、、飛んだ御申戲。……しかし、火の番の夜廻りとは、大先生、浮世ぢやなあ、でございませなあ。」

湯 朝

「今以て浮世さね。——處でだて。……かの夜廻りの棒突が、裾の切れた鬘斗目もぞろつかせては居られませんから、足輕端折にぐいと端折つて、それ六尺棒をストン／＼。……と此處だてね。」



餘程身に沁みたものと見えて、まさか、川端では然もありませんが、城構の水を見ると、ついつかりと尻を端折る。は、はけ次手だ。暑い時は此も宜しい。些と此のまゝで御免を蒙る。……しかし話さねー、話と言へば、右の夜番が何よりも弱つたのは、五位鷺、蒼鷺の輩でありましたよ。城の森は彼奴等が巢で居る。處で、寂れはてて、草は茫々たり、水は陰々たりだから、晝でさへ人間を憚りません。況して夜陰の横着さと言つてはないので。眞暗な足許から、ぼつと凄じい音をたてて、天狗飛びに飛切るです。又かと、後では思ふものの、其の度ごとにぎよつとして、引息に、はアと尻餅を搗くやつだ。別して梅雨時の暗夜は弱りました。中には、光る奴がある。人魂の鬼火のやうに、然る場合は、思はず念佛を稱へました。いまだに怨恨骨髓に徹るてね。あの、先刻の、(らうちう)とか言ふ酒に酔つて言ふではないが、支那料理に、燕の巢があるものを、鷺の羽のおひたしは出来ぬえかね。……此の方、五皿ぐらゐる退治たいて、無念ばらしに。……

「危い……先生。」

衝と五六臺、出場は香雪軒か、瓢亭あたりの、藝妓を乗せた幌俵が、羅の黄昏を、斜に雨緋のやうに駈通つた。

道は廣し、油断で歩いた豆腐老。ひよろ／＼と成りながら、蝙蝠傘をストンと支いて、目を据ゑて、

「やあ、鷺の奴等。しかし、いづれも白鷺だね。中には光つたのがある。は、は、は、恐しい。」

八

十内は、袴のひだを踏開いて、早や采女橋の上を抜ける、其の俵を見返つた。

「大先生——五六羽生捉りませうですわい、……御無念ばらしに。」

「御意だが。」

と俯向いて、こん度は足許を至極丁寧、端へ寄つて歩行きながら、

「益ざらん事だてね、ひたしものには成るまいから。」

「さあ、ひたしものは如何ですか。しかし、」

と鼻の前で扇子を疊んで、其の手で袴の太股を鷹揚に敲いて言つた。

「なまで食はせる處はありますすな。」

「あの、白鷺を。」

「勿論で……白鷺でも、五位鷺でも、生身ならおこのみに應じられようと思ひますな。」

「何、白鷺を、なまで食ふ。……無慙だね、聞いても虎狼の餌食のやうだ。」



と、ぶる／＼とパナマ帽を横に掉るのが、老の身なれば、もの寂しく、蚊遣りにそよぐ蓮の葉に見える。

十内は、再びさらりと扇を開き、腹に當てつつ、

「虎、狼と申せば——話は些と別ですが、お能の獅子に、連獅子と言ふがありますな。」

「然れば。」

「まだ、大先生にお弟子入をしません前に、根が執心なものですから、他流のを見物しました、

——あれは、何と言ふ謠にありませうかな。」

「はあ、何と言ふ謠とは。」

「たとへば、熊野とか、松風とか、内外何番とか申しますな……其の事で。」

「あ、いや、連獅子と言ふ謠ものは別になるので……石橋とおなじさね、——普通は獅子一頭の處を、赤頭を連れて白で立ちます。其を連獅子と言ふんだが、石橋はその許御存じだ——あの（大きなりきんの獅子頭）とある處を、（大きなりきんの連獅子）と謠ふ、たゞそれだけが違ふんだね。」

「此は……いや、此は何うも。」

と、十内は叩頭をしないばかりに胸を扇で敲き／＼、

「飛んでもない素人でしたなあ。……社中また倶楽部などで、風説をしますにも、一度は、舞臺で、大先生の、」

こゝは格別大先生で。

「連獅子を拜見したいが、なか／＼容易には、番組にお載せに成らないと、いつも一統が言ふものです。成程、一大事の御祕曲で、謠も別にある事と存じました。——先生の御直門で居ながら、此は何うも恥入りましたな。」

「少しもお恥ぢなざるところはない。——當り前だ——懃か知つたかぶりをされては、其こそ恥辱に。……御存じない方が結構だ。」

と、つけ／＼と遣つてのけた。これで通つた苦盡であるから、十内は氣にもしないで、

「御尤もです。世間一同……社中は勿論、一度是非とも拜見をいたしたいと望んで居るのですが、……何しろ一大事のものと思えますな。」

「何。」

と、少し聲が沈んで、

朝 湯 「一大事……ほどの事でもないの、尤も大温習としてあります。が、それとてまだ、形をお見せ申すには仔細ない。お素人方の目には、手足が揃つて動きさへすれば綺麗事に見えて喝采だが、



氣組の合ふ對手がむづかしい。さりとて……稽古を積みめばその氣組も合ひます、たゞ連獅子は、友だちが誘ひ合つたのでなし、角兵衛が連立つたのでなし、俳優が揃つたのでなし、藝妓が對に踊るのでない——それは親子だ。——義理人情に搦んだ人間の親子の情は見せ易いが、獅子王の親と子の情合を舞臺へ出すのはむづかしい。悪く兩方で、紅白の頭を颯と振ると、軍鶏の蹴合と間違ひます。拙でも實の親子だと、此が行りいゝ。形は不狀でも情愛が出るのだが……」

と理につんだやうに、偶と黙つた。しばらく肩で息をしたが、忽ち酔の發した面を上げて、

「や、あれへ石橋が顯れたね。——山河震動、あめつちこれを揺かす騒ぎだ。」

空も雲もパツと輝く、銀座の宵の十字街を、怯えたやうに、爪立つて打臨んで、

「むゝ、人間の牡丹が亂れ咲いたわ。夕陽の雨の後に虹をなせる姿とは此れだね。其の面わづかに尺よりは狭うして苔はなはだ滑なるよりも尙ほ危ねえ。——足すさまじく、肝が消える……神變佛力にあらずば、誰か此の橋を渡るべきだね。はゝゝゝ。」

九

「今日は、どちらさ。」

「本所の方だよ。」

「おや、本所かえ……銚さん。」

と浴衣の意氣づくり、湯上りの薄化粧、小濱の蹴出しもくの字形で黒檀の小形の卓子臺に、夕顔のほのめくやうな里吉に不思議はないが——此の洒落は不思議である。

もの干のついた窓下に、風を吸つて對向つたのは——まだ故と窓の岐阜提灯にも灯を入れない黄昏とて、ぎやまんの鉢に裝つた粒々紅の苺の方が、人類よりも色に出るくらだから、面はおなじくほのかであるが、顛に水なき片瀬の河童、あの頬被りを取つた兄哥に相違ない。成程、此の兄哥だと、然うした洒落も聞かされかねまい。脱いだまゝで差置いた薄羽織も、着て居る紺の薩摩紺も、何處か、芝邊の裏町に、當時二階借のまかなひ萬端、すべて里吉の仕送りださうであるから。

時に、婦が、銚さんと言つた。いまは最う打明けて居るらしい。即ち六方老人の渠は甥である。男の子のない名家に養はれて、其の後嗣に擬せられながら、仔細あつて、一昨年、叔父の家から逐電した。……目下行方知れずであるべき筈。技倆のほどは幽にも片瀬の砂丘の薄月の影に俣ばれる。舞臺に立つては、優美より、暢達より、其の人がらに似ず、たゞ凄いと云はれた。——姓はなほ實家のまゝなる、笈銚之助は渠である。

湯 朝  
兄哥は偏にがつくり叩頭をした。



「あやまつた〜。」

「可厭だ、誰も叱言なんか言やあしなないぢやないかね。」

「御意だがね。」

こゝらは叔父的の口癖で、

「其の洒落だか、地口だかにさ、……本所にあやまつた。」

「あひ子だ、澤山。」

と團扇の柄で、軽く食卓を一つ打つて、

「此の暑いのに、本所くんだり、何をしに行つたんだね。」

「……貸本には讀飽きるね。欠仲は出るし、涙は流れる、情婦は來ず。退屈で爲やうがねえから、例の又道場あらしさ、他流仕合。——去年かけて奥州めぐりで、寒いのは震へたけれど、其かはり暑さには怯げません。但しあぶれたね。工場ばかり、ぐわら〜して居て、蚊の鳴くほどの騒の聲も聞えない。——尤も本所で騒を捜すのは木に魚を求めると類で端から間違つて居るんだが、悪く山の手なんぞまごつくと、知つた顔にぶつかりかねないから、止むことを得ませんのでね。」

「だから私が、そんな事——一體、貴方。」

と居すまひを直しつゝ、

「そんな事をして歩いて、お前さん、もしか騒の稽古をして居る人に逢つたら、矢張り、あの片瀬のやうな事を遣る氣なの。」

銑之助は掌を煽つて見せて、

「れ、こかい。」

「後生、もう、怪我にもそんな眞似をしちやあ——眞個に申戯ぢやありません。」

と言も、鬢もうつとりと、

「また本所ではないけれど、そんな事をするのが度かさなると、洒落ではなくなりすよ。……腹を立つちやあ可厭ですがね、……勿體ない、お前さん大切な身體を臺なしにして何うします。」

——私ねえ、何にも言はない。何うかね、片瀬のあの晩ね、……一寸お泊め申す寸法に成つたわね。……お伊能が……」

内箱が臺所をがたつかせて、下に居るから、其の名を言つて聲を密めた。斷るまでもないが、これは里吉の住居である。三野家とかいて、そして(みのや)と呼ぶ。

「……そちこちして、座敷へ床を取つたわね。——床の間の傍へ、恚うならべて、」

と、身動した、何かの隈でよく見えない。

銑之助の方は、あけ放した、もの干の薄あかりに様子が見える。掌を額に當てて、うなづくや



うに一つ敵いた。

「御意の通り。」

「まあさ、お聞なさいよ——それで以て、枕を二つ。」

「いや隠でねえ。」と胸をひく。

「あれさ、意見をして居る處ぢやないかね。」

十

里吉の、爪楊枝に苺をさして、口に含んだのが、目の紅なる白い蝶が覗くやうに、暗い天井に面影して、

「おあがんな。おいしい事よ。」

「如才なく荒くはするが、藝妓屋の二階へ忍んだ奴が、苺を突くのは可訝いぜ。」

「だから一銚子つけようつて言ふのに、銚さんが。」

「此處ぢやあ御免だ。——食客しみるもの。何、お前さんに遠慮はしないが、（おい、お銚子のおかはりだ。）何うもお伊乃さんや何かに言悪い、——ひがみはしないし、ひがませもしないけれども、自然と気がひけるのは人情だよ。あとが、どんくつて来ないと飲んだ氣はしないから。」

「——分りましたよ、御催促なくとも。いつもの家へ行くけれどね……彼處はまだ今頃は……」  
たして居て、箱部屋なんか、出たり、入つたり、つい顔を合せると、なかまの口が煩いから。」

「御尤もで。」

「異う言ふね。」

と團扇の風が邪慳らしく兄哥に當つて、

「すぐに檀那に、いッつけ口をされるつてんぢやあないけれどさ。片瀬から歸つてから、なまけ

次手に、よくくでないと、まだお座敷を受けないんだもの、圓鬘なんか結つて納まつてる處

だから、何の彼のつて面倒さ。——やぼの引込む時間に成るまで、もう些とお待ちなさい。」

「悪く、何いそぎとかをするやうに言ふもんだな。さきへ行つて待つてるよ。私一人なら構やし

ない。それとも銀座をふらついて窓飾でも覗いて居ようか。」

「およしよ。ハイカラ染るから。」

「それぢや、講釋でも聞くとするかな。」

「可厭だ、餘り宿六じみる。」

「矢張り下宿へ歸れだらう。……よく出来て居やがら。」

「誰が歸れと言ひました。——何故またお前さんは此處に居るのが不可いんだい……一生でも居



て欲しい、お里の宅ぢやありませんか。」

「御意だけれども、危ないよ——それ檀那がね——枕が二つは難有えが、私は首が一つきやあねえ。」

「しと、大袈裟な事をお言ひなさいな。……い、えさ、其の枕だがね、——大丈夫よ。……何さ、あれ、面當がましく其處等を、きよろしく見てさ、憎らしい。——はい、御覽なさい、此處は八疊一間きりでございます。生憎縁側つきの方は、すぐ下が新道通りで、世間が煩いものでございますから、裏の方でございます——あの、ずつと、あの葎簀戸は、手前どもで調べましたもので、建具について居たのではありません。床の傍の影法師は、あれは金屏風でございます、違棚の本箱には謡曲の本が入つて居ります。また、貴方が悪口をおつしやいませう。御道理でございますまして。……あひ濟みません——が、此の頃の里吉は、短い夜の寢覺にも、うと／＼晝のうた、ねにも、あの中の竹生島を枕にするとか申します。——おや、又……枕が出た事ね。貴方がお氣になさいませ、其の暗い處は階子段——黒い頭がたませうとも、それは女中たちか、猫のほかにほごさいません。何とぞ御安心遊ばされ、御自分の住居と思召し、お落着き下さいませうなれば、恐悦に存じ奉る。」

と三指を行儀について、艶々とした圓鬘を下げて、白い頸を見せたのが、恭しく顔を上げると、

おや／＼、いつの間にか、銚兄弟は棒立ちに突立つて、薄暗がりをおさぐり／＼ぬき足で座敷の中を廻つて居る。

「まあ。」

「至極氣に入つた住居だが、お屋賃の處で折合ひますまい。第一、借家の氣ぢやあ些と癩だ。」とのそりと又廻る。

里吉は、つき膝でうつかりと視て居たが、

「一寸……申戯ぢやあない。」

と蝶の影がさすやうに、ひらく／＼と起つて、肩を抱く時、頬邊を一寸吸つて、もとの處へ抱きこかして、

「人が折角……あ、然う言へば、あの時そんな風をして突立つて歩いたわね。」

「所作のない役者だよ。一寸々々遣るがね。特に、あの時とおつしやると?……」

「其の枕——銚さん、並べた枕の私の方が床の上座だつたら——貴方怒つて突ツ立つたでせう。——江の島で。」

と兄弟の膝を手さきで壓へた。……



「……然う言つちやあ何だけれど、食べるものも食べないで、野宿をしようと言つた人が、御給仕つきで御馳走に成つて——今だから言ひますがね——胡瓜の新漬がおいしいと言つて、お香々のおかはりまでしたでせう。夜ふけだのに旅館へいひつけてさ。……さて、氏素性も知れない人を泊めると成つて、寢床を女中と入交らせるか、次の室へ寢かしでもしやあせず。座敷へ二つ並べたんですよ。大概のものなら、其のまゝ寝るにしても、頭だけは横へ引いて、私の寢床と、丁字形にでも成らうツて處を、つか／＼と蒲團へ胡坐で、お先煙草を喫かしながら、じろ／＼視てさ。しかも其がだわね。——枕ばかりぢやあなかつたんだ。私の間に私が居てさ。間を離れて居たんぢやあない。氣障に聞えちや可厭だけれど、一人前には、どうにか通用もしさうな藝妓が、少々迷はせて遣らうか何かで、故と寢衣を……尤も濱の汐風に、しとつちやあ居たけれど、すきな長襦袢に着換へてさ、色氣を見せて、嬌態をしてふ、ふ、ふ。……一寸、どんな顔をして居るの？」

「煙草を吸つて居るであります。」

「そして？」

「頻にむせて居るであります。」

「むせる煙草なら、およこしなさい。」

と、吸さしを引たくる。

「何をするんだい。」

「煙草を吸つて居るであります。」

「そして？」

「頻になめて居るであります。」

「なめる煙草なら……おつと……爰は我慢しよう、肝心な辛抱處だ。」

「よく辛抱をおしだつたよ——其の私を、目と鼻の處へ置いて……銑さん、すつくり立つたわね。(歸る。)と言ふから呆れて聞くと、(客を何だと思つて居るんだ、女主人の下座へ寢かして)嬉しかつたよ、覺えて居るよ、立つて御覽よ、留めるから。……もし、」

と氣の籠つた細い聲して、

「待たしやんせ、若旦那。」

「う、あやまる。こゝは東京の玄關前だ。」

湯 朝 「そのかはり、まだ燈を點けません。——外へ出れば砂丘の窪つたまりで寝る人が、瘦我慢にも、



あゝは言へない。——私は眞個に、しみんと。

「何、もう食つてる鯨だもの、水際で氣を抜いたつて落つこはねえんだから、幕切の引張りの見  
得だけさ。可厭に氣取つたんだ。氣障な野郎さ。」

「銑さん。」

「いま更めて、めされたは。」

「鯨だよ。」

「え。」

「私は鯨かい。」

「う、む、鯨だ。」

「大きな聲で……吃驚するわね——鯨かい。」

「いや鯛だ、鯛だ、鯛だ。」

「黒鯛さ、甘鯛さ、いぼ鯛さ。」

「う、いや、櫻鯛、かゞみ鯛と、魴、さより、鱈だ、鯛だ——白魚だよ。」

と、その指を握つてひくと、指環の玉が、眞蒼に閃然とする。もの干かけて衝と青い、

「や、電光……」

「電車ですよ。——弱蟲。——あゝ、お前さんは、雷様が可恐いんだつけね。」

「眞個だ。」

と聲も滅入つて、

「世にも可恐いのは、雷と叔父的だよ。」

「目の中へ入れたいほど、可愛がんなすつたと言ふ、風説ぢやあない事。」

「それがね、可愛がるだけ、稽古が凄いや。煙管の雁首で、耳朶をコッソと來るのはのべつだか

らね、面を着けた足が怯えて、舞臺の端をうろついて、土間へ蹴込まれた事も五六度ある。——

尤も稽古の時だけど——あれはいざ立つ時、見物の眞中へ頭の上へ飛び出すほど生命かけの覺悟

でさへ、舞臺の端から三尺ぐらゐるは、足が引込んで居るんだからね。」

「銑さん。」といたはるやうに、近々と顔を視て、

「その御修業が積んだから（歸る。）と言つて、枕を蹴つて立てるんですよ。」

十二

湯 朝 「お讚めに預つて恐悦だが、何に、その（歸る）あの（歸る）は、そんな修業で出來たんぢやない。  
——やすものの、おいらん買で、工夫を凝した體術なんだよ。——格言にもありますが、（煙草は



なくなる、火は消える。)と言ふ斷末魔には、(歸る)と突ツ立つのが奥の手さね。をばさんの義務として、餘所で寝て居る女を起す。……眠い目をこすつて出て来て、こんな客は留めるほどの世辭も要らない、すぐに追出すまでも、とに角あひ方の顔は見られる。いさゝか、手ぐらるは握るのさ。」

「下等だねえ。」

「へ、世界の遠つたあなた方は御存じはあるまいが、宵にちらりと見たばかりで寄附かないのはまだしもだ。居ふりと稱へて、身體を横に一所に居て、お腹が痛いよと言ふのがあるよ。残念此の上なし。勿論買ふ方もよくないが、賣る奴も悪ですぜ。なまゝとした膚身を、切一重に包んで投出して置いてあるのを、食はんと欲すれば火が然える。餓鬼道の苦痛さ。燃え立つ緋縮緬とか云ふのは此かと思はれます。だもの、お前さんと枕を並べて(歸る)なんぞ譯なした。——それが、もしか氣に入つたら、お前さん、後に子供を持つたら、學問で修業させるよりか、おいらん買で仕込むんだ。……立派な人間。」

「馬鹿もやすみ〜お云ひなさい。」

と優睨を行つたのが聲の影に籠つて見えて、

「そんな事ばかり言つて、門附の眞似なんか、いつまでもして居ると、眞個よ、申戲のけて、せつかくの銚さんがたまなしに成つ了ふ。何とかして叔父さんのお手許へ歸つて、それこそ立派な人間に成つて下さい。……色戀に慾はありません。私としては、貴方が貴方で澤山だけれど、それぢや餘り勿體ないもの。」

「御意見は尤もです。」

と聲も、やゝしめやかに、

「處がね、其の叔父的へ歸參と云ふのが。……」

「さ、私もね、貴方の事があるもんだから、頃日も日本橋の方で御連中にお目に掛つた時——大丈夫、貴方が芝に居る事なんか、おくびにも出しはしないけれどよ。——それとなく聞いて見ると、誰方も酒に紛らかして、委しい話をしないんだよ。何だかね、お流儀の恥とでも云つたやうな事らしい。……私の口から恚う言つたつて、銚さん怒つては不可ません。——でもね、つい、一寸々々と猪口が逆つて、齒のすいた處では、——お前さん、叔父さんのお愛しなざる、年紀の若い御婦人を。」

「おや〜おや、露顯かい。」

「露顯かいぢやありませんよ。のんきらしい。……」

「いや、一言もないがね、事實其奴が原因なんだよ。」



「一寸、お妾……」

と又摺寄つて、聲を潜める。

「お愛しなさる御婦人と云つて置いて、其の上聞くには及ばなからう。勿論それさ。——たゞし叔父的は、口ぢやあ——帷子から緋縮緬のすくのが居なくつちやあ涼しくねえの、乳のついた眞白な行火でないと寒さが凌げねえのと——大口を利くけれど、其の實淡泊して居るんだからね、實際お部屋にして居たか、何うか、其處は餘り確でない。」

「そんな事は申譯に成りません。」

「はい、申譯はいたしません。」

「呆れ返るね、酒亞々々して。」

「いや、餘り呆れ返る風でもおいでなさるまい、と思ふがね。」

「あやまつた、帳消し〜。そのかはり、謹んで聞いて上げるわ、何と云ふの、其の御婦人？」

「名かい。」

「お言ひよ、お言ひなね、言はないと抓るから。」

「痛え！お舟でござい。」

と額を敲く。

「安ッほいよ、此の人は——」

「勿論、這つて出来たなかだもの。」

「勝手におしよ。——それを誰かに見附かつたの。あ、裏町の二階に誰か、人が。」

と、窓へ衝と出て腰を掛けて、屋根向うの影法師から、兄哥を庇ふやうにして、團扇を使つて涼しい顔。

十三

「それがね、見附かるにも事を缺いて。」

婦が敷居へ掛けた時、ごろんと横に寝轉んで、

「直に叔父的に見附れたんだよ。見附かりやうにもよりけりで、ふみを拾はれたとか、黒板塀へ月がさしたとか言ふんだと、もう少し色氣はあるんだけど、負ぶをして這出す處を。」

「蚤が押入から出たやうだね。」

「似て居るね。」

と頬杖で、自若として、

「雌があれほど大柄ではないけれど、ぼつちやりはして居たよ、色白で。」



「あゝ、堪らない、裾がむすくするからさ。」  
はら／＼と團扇で煽ぐ。

「蚤が集つたのさ。いや、妙な事を發明した。」

と、銚は一寸寝返りながら、

「高い處に婦人居ると、下から口説き可いものだね。お舟の時が然うなんだ。——よく、この高臺で日中靜に仕事をして居たつけ——高臺と言つて、お分りには成るまいが、お前さんも此の頃は、見物に行くと言ふ。……霞町の舞臺の平土間をすらりと見渡す正面に、一疊の疊を縦に十五六疊敷込んだ高い棧敷があるだらう。——彼處はお歴々が買切りなんだが、其處で裁縫さ。……叔父の住居は、邸町の母屋と、眞中へ舞臺を挟んで、樂屋裏の空地に、二階一室附下が二座敷と言ふ、何處か、もの好が建てた數寄屋づくりを古で引いた離座敷に、靜に一人住んで居る。母屋の方は叔父の娘、——私より年紀上だが、此即ち従姉だ。」

「これ、即ち許嫁だ。」

「黙つてお聞き——之が女中を使つて、内弟子などの世話をして居る。——叔母が亡くなつてからは、元氣でも老人だ。夜中なんぞ、どんな事で、痰がつかへないとは限らない、離に一人ぢやあ心許ないと言つて、忠臣、孝子が集つて世話をした其のお舟さんさ。——叔父は出稽古が忙しくつて、晝間は滅多に内には居ない。それ、高臺でつ、ましく針仕事です。——もの柔かで、おとなしくつて、」

「あゝ、肩が張る／＼。」と團扇で斜に敲いて居る。

「弟子たちの騒は強いが、お舟の下へ(方)の字が附かうと言ふ、大先生の持ものとあつて、うかつには近づきませんな。其處へ掛けると、金がないから外廻り通力は利かないけれど、家の内だけは出没自在な若旦那だ。——出入の俵屋へ届けてよこす、女郎のあやしげなふみ藪などを、袂の中で捻くつて、臺所の菰かぶりから、キウを極めの、渡廊下をぶらり／＼……がらんとした、土間棧敷は、幻影の五百羅漢を見るやうに、女郎の顔で充満だが、懷中は空だらう。遊びたくつて、錢のねえのは、お前さんの前だけれど、花やもみぢの眞盛りを山奥に踏迷つたとおなじ氣持だ。心は時めくが寂しさに涙が出る。道をとぼつくやうに、板を渡つて、それ高臺を覗く奴さ。紅い針さしでぼつと上氣をしたやうに、針を運んで居るのはいゝ。もう此の方にも借りられるだけには借りてあるから、其の無心は利かないけれどね。お精が出ますね、とか言つて、ぬうと顔を出すと、それ、丁ど鼻のさきに、お舟のふつくりした膝がある。此を上から押伏せるんだと、天狗が引攪むやうだけれど、目のさきに浮いて、そこへ、手の届く花の枝さ、蝶々がとまるやうに、容子よく、つい、それ。」



「あれ、馬鹿々々しい。」

「彼奴は然うは申しませなんだ。」

とくすく笑つて、

「行暮れたる旅の修行者、一夜の御無心申したいな、か何かで、案外手軽にまとまつて、一所に丸木橋を渡つたがね、——何うも恚う、まことに彼は工合が可いね。」

「然うですかよ。……暑いこと。」

「否さ、高い處に居る奴を、下から恚う引張るのは、鯉の瀧登りを、ひよいと抱くやうなあんばいだね。」

「此の人は……箸にも棒にもかゝらないわね。」

「そのかはり、片瀬でお目にかゝりました。」

十四

「あゝ、渡つたり。」

と叔父さんは、尻端折のまゝ、谿川の急流を踏むが如く、危く電車を突切つた。向う横町——たしか銀座三丁目の自動電話のある角を入つた處で——吻として、息を吐いた。——

「いや、此の思ひをするにつけても、足腰の利くうちに、赤頭と連舞に石橋を踏んで見たくないこともありません。」

「其處です……先生、唯今も申しましたな、皆が寄ると觸ると、強つて望んで居りますのでして。」

「だがね、今も言ふ通り、獅子の親と子の情合がむづかしい。」

「歴乎としたお弟子たちがおありなさるではありませんか、あの通り——」

「然れば……相當に動けるものはあるんだがね。」

「それを、いま一息お氣に濟むまでお仕込みなされたら如何なもので。」

「それがし未熟にして、まだ渠等に子の情は持たせ得ませぬ。」

「すると、實の親子でなくては、舞臺へのせられないのですかな。」

「むかしは全く然やうでありました。……いや、電車通りでひやついて、些と酔がさめて来た——

——現に、私が以前勤めた時は、親父が六十一歳の、此の方が二十七歳——此でも少い時があつた

ね。唯一度だ。一生に唯一度か、二度の能だから大事を取ります——先づ、眞實の親子でないと、

舞臺へは出さなかつたものだが、——今の時節だ、弟子でも、甥でも、

湯 朝  
と言ひかけて、言葉が途絶えた。乾びた咳して、



「いや他人でも仔細ない。——稽古さへ積みめばと思ふが、出過ぎたやうだが、此の方は屹と親の愛を移して見せる。對手に子の情が出ねえてね。稽古を厳しくすれば堅くばかり成りたがる、甘くすればだらけて了ふ。どつちも役に立たねえんだ。」

「ですが、他は知らず、お流儀のお弟子たちは、随分皆眞面目ではないですか。」

「其の眞面目が、慾から起る眞面目だから不可え。——たとへば親の敵討だ。外聞半分、敵を討つことばかり考へて、寝ても忘れぬは然る事だが、其の間に親のなつかしさ、戀しさを忘れて居ては何にも成らねえ。——は、あ、此の道を曲るかね。拙者の言ふ事だつて曲つて居るが。」

と、ひとりで苦笑して、

「道は甚だ意氣になつたが、言ふことは太く野暮だ。」

出雲町か、鍋町あたり、銀座うらを行くのである。

「恰もいゝ話がある……榮作と言つた狂言師だが、將軍家御覽の新春お能はじめの翁——能役者の方でも、別火だ。潔齋だと今でも言ふ……何せ、生命がけた。其の翁に、三番叟を勤めて、手練を視せた……尤も若人の名人だつたが——秘曲をこゝぞと舞つたはいゝが、何處を何う取亂したか、禪をぶら下げた。」

「おゝ、禪を、……それは大變。」

と言つて、十内の方が四邊を見廻す、ゆききはすれ違つて通るのである。

「彼の六尺の白い奴が、袴をたれて、月の都の御殿かと思ふ、塵一つない舞臺を曳摺り、足拍子に連れて、ひらりと踊る。古今の珍事だ。さすがに、お目觸りとあつて、あとでお係りから尋ねがあつた。其の方は舞臺を何と心得る。……榮作は最早や一命はないものと心得ながら、ハツ戰場と心得ます。意氣な將軍で、そのため鞘をはづしたか、褒美を取らさう——落し話だ。が、生死のうちに、此の禪の紐のたるみのある處が嬉しい。此だと獅子の兒にも成れます。私が緊乎と胸へ抱ける。——子が親に對する情は、決して眞面目ばかりなものではない。だらけて甘えて、馬鹿々々しく、禪が解けてる筈だね。私が可愛く胸へ抱ける。」

と信玄袋も、懷中も、いつか意氣地なく、するけて下つて、蝙蝠傘を引摺つて、戸惑ひした田舎の爺様のやうに成つて、

「緊乎抱きてえが、居りません、其奴が、その居ねえてね。」

十五

朝

「……處で、叔父的に、忍術見顯されの一件だが。」

と兄哥は、腕をだらりとした匍匐で、いや何うも、箸にも棒にもどころか、もの干棹にも引掛



けられない容體である。

「誰へ遠慮だか、先祖へ言譯だか知らないけれど、離座敷ぢやあ、下階へ叔父が一人で寝て二階へお舟を寝かして置きます——此奴が反對だと、開いた口へ牡丹餅だが、玉が二階だけに爪立つて棚から膳を下さなけりやなりません。箱庭のやうな狭い造作で、階子段が急だから、上り下りが危いので、下階へ寝て居るんだらうけれど——些と事が億劫です。其のかはりお前さんなんざあ、エレベエターで押上つて露臺で嬉曳しようとも、一寸氣のつかない色氣のあるのは、お商賣から鼓の緒の紅い調で、階子に欄干が縫つてある。控の綱だよ——如何です。」

「如何ですか、唯今轉寢をして居ります。」と里吉はのつべらぼう顔に團扇をびたりと當る。

「處が——よく寐て居ても叔父は目ざとい。——頭の上の二階ぢやあ、内證で口も利けないから、お舟を夜中に連出すんだが……婦がまた何を何う精進する氣だが、向うからは決して私の方へ出て來ない。——勢ひそれ連出すんだが、こゝが大事だ。いくら密としても、(寢音が二つに響く)と言つて婦が可恐がる。……其處で負ぶして、右の控綱を力に、婦の足を宙に浮せながら、戀の重荷を、みしりく、鼯鼠の化けた桂川さ。階子を下りて……はるく土間棧敷を抜けて、件の高臺まで背負出すんだ。——一晚真夜中に、例によつて、首尾よく階子段の切處を抜けて、くらやみを廊下へ出た處で、(お舟か。)と叔父に抜討に浴びせられた、(はい。)と震へ聲で漸と言つた

のが、野郎の脊中のろくろ首さ。天井の下に鬚がある。——其ツ切で、叔父の聲はしなかつたけれど、(寢音が大きくつてよ、大きくつてよ。)と脊中で氣を揉む、八もん半と約十もんだ。剩へお尻の重量のかつた處へ、いまの(お舟か。)で、ぐわちく震へが來たから堪りません。」

「度胸はないのね。」

「まつたくだよ……自慢ぢやないがね。氣を揉めば氣を揉むほど、あの土間棧敷八百人詰へ一齊に寢音が響くやうに思はれるものだから、お舟を負つたまゝ、假花道と言つた形の歩行板へ四に這つた、這出した。甲賀流か伊賀流か知らないが、要するに畜類變の一術さね。天なるかな。お幕のむかうの、かゞみの間で、パツとスキツチを捻られたと思ひ給へ。舞臺一面、海のやうになつて輝いたらう。夢中でお舟をもぎ落して、遁げるトタンに、ひよいと見ると、叔父的が、はさみ帯の寢着姿で、その、かゞみの間に立つて居る。お舟は、はずみで仰向けに轉がつた身體が土間のしきりへ挟つて、手足を白く擽いて居る。——母屋の屋根廊下の出かゝりには、従姉が朦朧として悄乎立つて居ようぢやないか。——叔父が一世一代で演ると言ふ、連獅子の赤頭を仕込まれて、蹴飛ばされて居る最中だもの。獅子の兒どころか、千仞の絶壁へ鼠が轉げ落ちたやうな形で、土間も棧敷もくるくると舞ひながら、高臺を飛んで、中庭から堀越に路地を抜けたツ切り。……つい、今度まで東京の臺所にもものぞけなかつたよ。あッ。」



と言つて半ば急に起きた。

「あ、吃驚した、切火の響が胸を切つた。」

里吉も、兄哥の動き方の激しさに、目覺めたやうに團扇を落した。

「縁起棚へ、お燈明をあげたんだよ。」

「胸が痛いやうだよ、ひやりとした。——遅いね、今時分……」

「少女がお湯から歸つたらしい、……道草をしたんだらう。内ぢや、お伊乃だと、踏臺が要るもんだから、私でないと少女の方が、のつぽで脊が届くからね——歸つて来て點けたんだわね。」

「成程、いはれを聞けばだが、神棚へお燈明が點いたと成ると、……これ二階は、些と魑魅魍魎の形と成つたね。」

「可厭だよ、薄氣味の悪い。」

と、すり下るやうに窓から這つて、ぴつたり寄添ふ。

十六

「抱くのはまだしも、親子の情がうつし易い。兒獅子を谷へ蹴落す氣構で、（くはうきんのする）顯れたる、牡丹の花に頭を當てる。」

と、うつかりして、……ひたりと帽子に鍔手を當てると、眞白に颯と白毛の亂る、ばかり、六

方惣三郎の老の姿は、新橋の裏道に獅子を放つた風情がある。

「ハタと、その、兒獅子を睨む處があるてね。」

其の氣構が、不意に鋭かつたので、十内は吃驚したが、ひよいと傍へ袴をひらいた。打水を踏

んだ形がある。

此に氣の着いたらしい豆腐老人は、肩も腰も、又とぼくとした親仁に成つて、

「何、まあ雑と然う云つたやうなもので、舐めるとか、抱くとか……」

と其でも聲が大きいから、恰も擦違つた雛妓の、水菓子屋の燈に薄彩色ながら燦爛として顯れ

たのが、唐突に、鼻に鳴かれたやうに、横手の黒堀へすくんで行く。

振返つて、十内の大きな鼻がひくくと動いた。

「……それ、愛着の形を見せる處だと仔細ないが、右の兒獅子を蹴飛ばす、——俗に（谷落し）と

言ふんだね。勇氣を驗すために——處で、蹴飛ばす方は兒の方、親の氣は心得たが、蹴飛ばされ

る方が、蹴飛ばされながらも兒の情合を含むと云ふのが難儀で、……こゝは、眞個の親子だと、

少々未熟でも、おのづと恩愛の氣があらはれます。尤も一例で、何も蹴飛ばすのが連獅子の趣意



ではないが、——いや、場所柄だから可いが、此が淺草の田圃に近いと親子で馬肉屋を捜すやうだ。……ふと御貴殿、御人體に觸つては相成らん、餘り蹴飛ばしますまい。」

と獨りでパナマ帽を、ふか／＼と揺つて苦笑した。

「しかし、ずらりと兩側に灯の入つた處は、むかうの土手が見えるやうだね。は、はてな新橋の御神燈が、吉原土手に見えるやうでは、狐に化かされた形がある……先刻鱧の鰭を食つた祟かも知れません。いや、獅子が鱧を食つて、狐に魅まれては穩でねえ。取留めのない三題噺だ。些とまだ酔つて居ます。」

と蝙蝠傘をストンと支いて、肩へ少し力味をくれる。此の時、横路地で、十内が肥つた身體を尻から揉込みさうに向直つて、

「先生、一寸お立寄を。」

「はてね。」

「粗茶を一杯獻じませう。」

「結構——だが、これは怪しい路地だね。」

「いえ、ほんのお少憩で。……いづれ、其の土手近なり、橋際なりお座敷を更めますが、とに角一寸何うぞ。」

と、あとしざりに、溢出すばかり、狭い處に入つて行く。

叔父御は、頗で差覗く状しつ後續いて、

「御芳志は過分ですが、お手柔かに願ひたい。……些と他流仕合の氣味があります。」

と御神燈を透して言つた。此の燈が拭込んだ里吉の家を照して、格子先だ。

何と思つたか、信玄袋を柄に絡めて、蝙蝠傘を羽目板に立掛けると、叔父御は懐中にした其の無地縮の羽織を、ぞろりと摺み出して、奴唄で手を通す。

十内が慌てたやうに、扇子を突出し、

「先生、先生……決して其には及びませぬ。ほんの唯お腰掛で。」

「いや、拙者は道場と心得ます——小敵と見て侮るべからず。」

「飛んでもない、妾宅なんぞ。」

と十内は、いまの「小敵」を聞違へた。

「恐縮のいたり——御申戲——」

と悪く句讀を刻みながら、あぶら切つた頬に、其の恐縮と、御申戲を頬張つた、忍みわれさうな顔色で、妙に草履の足をうかせて、セルをふはりと格子に立寄る。——

「さて……時に——何が何だつけ。」



と、此の奥二階の薄暗がりには、唯た今、縁起棚の切火の音に、一刀切られた管の銚之助が、依然としてだらけた言、手負らしくもない調子で、

「お里の方……もし、お部屋様。」

「氣障だよ。」

眉がほんのりと鼻筋が白い、里吉が額で睨んだやうである。

十七

「私はね、いま偶と巧い事を考へた。寝て居て金が儲かる以上の事だぜ。」

「澤山。」

「い、え、肝心な事です。これはお燈明の光の裡から荒神様の御託宣を蒙つたくらるの名案だかね。」

「勿體ないぢやあないの、——申戯に、そんなお前さん。」

「處が眞面目だから可愛いぢやないか。」

「ぢやあ、何さ……其の名案と言ふのは——じれつたい。」

「然う乗掛つちやあ名案が潰れツ了ふよ。何ね、今度から此家へ忍ぶ時は、聴診器を袂へ心得て來ようと思ふが、何うだい。」

「何を言つてるのさ、藪から棒に。」

「藪から棒なもんですか、耳から管さ、あの護謨の……要するに、ドクトル算だ。これだつて、端然として納まれば一寸代脈ぐらるには見えるだらう。ね、巧い事を考へた——當時はアルコオルにガアゼと言ふのを診察後の消毒に、醫師方は喜ぶつて話だけれど、そんなぢやあ店が引立たない。精々眞鍮の金盞に、手拭を折つて添へてさ、石鹼函を並べて置きます。然うさへすりや、臺所のガタンだの、格子戸のガラリなんかには、はかりながら怯氣ともしないね。それ（旦那が）眞個に不意に飛込んで來た處で、寛ドクトル、えへん！でせう。」

聲をひそめて囁くやうに、

「伊達巻一つだつて診察中だぜ。其の階子段の上口へ、天井へ問へるばかり、旦那が仁王立に突立つた處で、此方は又エヘンだ。（いや、御心配はありません。）さ、何うだね。」

「はッ。」とこみ上げる可笑さを、胸で堪へて、瘡を壓すやうな切ない笑で、

「銚さん、眞面目に言つてるの。」

「大眞面目さ、蓋し名案ぢやあないか。但し或は窮したかね。」

「だつて、旦那が可恐いと成ると、……まあ假にですよ。……何時遣つて來ようとも分りますま



い。

「勿論です。だからぢやあないか。」

「然うすると、聴診器の方は何時なんどきでも袂にあるとして……だわね。」

「然うだ〜。」

と急に意氣込み、

「今ツからでも心得て居る方が可い。すぐに一具買ひに遣りたいくらゐだね。……資生堂なんか直き其處だ。」

「慌てものだよ。まあ、お待ちなさいよ。處でだわね、其の金盥の方は、慥うやつて逢つて居る時は、いつでも傍へ置く氣なの。」

と姉さんもだらしはない。

「そりや、……そりや何だ、旦那が飛込んでからでも構はない。お伊乃どんが大急ぎで水を張つて持つて来ればだ——しかし、其だと、旦那が何だか小火のやうだな。」

「まつたくね。」

「御挨拶だね、……勿論やるにはやけませう……が。」

「今度は此方が御挨拶だわ。」

「まあ、お聞き。——矢張り金盥の出で居る方が、道具つきは可いね、あらかじめ。」

「何が(あらかじめ)よ。……孩子在湧くわね、此の温氣ぢやあ、眞個に。」

「孩子在言へば、不絶は金魚を泳がせとかう。用のない時は、はらんばひになつて、苺を食べながら二人で見ようよ。」

「はッ。」

と又あの婀娜な、情のある忍笑ひをして、

「可愛い坊ぢやん。」

「およしよ、小兒科ぢやあない。苟くも婦人科だ。さあ、(一寸お横に——)ドクトルの假聲だぜ。」

——押入は其方ぢやないか、面倒だ——火入を抜いて、其の煙草盆を。」

「……熱いわ、髪が。」

「當前さ、熱のあるのは病人だもの。さあ、胸を開けて、——聴診器を當てるよ。」

「冷い、あれ。」

「あ、コップの底に雫があつたか。」

電が、そら解の帯を映して、颯と射すと、雪のやうな乳の間に、硝子杯を俯向けに伏せて居た。格子戸がガラリと開いた。



「姉さん！」

同時に、お伊乃の大きな身體がどだくと凄じい響を立てると、階子段の中途から、

「旦那が、旦那が。」

同時に電燈がサツと消えた。

ハツと息を引く隙もない。二階では地震以上の狼狽かたで、兄哥はくるくると這ひ廻ると、怪しからん事には、それでも、こんな時遁げるのに心得があつたと見える。傍の薄羽織を引攪つて、ひよいと小窓の敷居を跨いで、いきなり物干へ飛上つた。月も星も見えないのに、さながら宵闇の黒雲に、人間の團子を供へたやうである。

由來、卑俗な風俗史を案すると、此の場合は、押入へ這込むのが寸法らしい。が實地へ臨むと約束どほりには行かないで、臨機應變のものに見える。暑い時分だから此も可からう、涼しくつて……

が、旦那が面前へ遅しく出た時は、里吉はさすがに涼しい顔はして居なかつた。

「暗いぢやないか。あゝん、これ。」

「さながら此は夜討だね。」

里吉の耳には、かすれながら底力があつた、凄いほどに響く聲が、旦那の他にもう一人。

「は、はい、唯今……」

其處で、電燈のスイッチを捻つたのであるが、實際涼しい顔はして居なかつた。

「つい、うたゝ寝をして居たもんですから、いゝ心持に涼しいんで……」

と申すまでもないが、そはくして、些と大袈裟に言ふと、我身を引吊すやうに帯の端を引上げながら、押入をぴたりと閉めた。

「あゝ。」

と膝を支いて、襖を合せ、恚うした婦に珍しく、ぼつと臉邊を紅うして、

「おや、これは入らつしやい。……まあ、大先生。」

里吉は能舞臺で、豆腐老人を見知つて居る。

「何處か、涼しい處へお供しようと思ふのぢやがね、お前に相談をし、かたぐちや、お茶を獻じようと思つたもんでな。」

「まあ、それは可うこそ、茅屋へ。」

と、しめた押入をまた開けた。今度は水色の座蒲團を引出したので。……實は今慌てて片づけ



た組の二枚である。旦那の目にも、讀者方の前に、苺の皿だの、平野水の壘、コップだの、そんなものは何にもない。卓子臺の上は薩張して……それに食ひこぼしなどはしないから清潔に見える。が、火入と灰吹を別にして、横にひつくり返した黒檀の煙草盆は、此の片附いた座敷の中に怪しき黒猫の如く蟠つた。

「いや、其方は可かん、風が入らん、夏は體裁より風の事だ。——さあ、先生、失禮ですが。」と、どつかりと最上座に着くと、

「でも、此處は餘り。」と里吉は、其の煙草盆を袖で隠すやうにして言つた。段の入口に控へた叔父御が、

「然らば罷通りますかな——他流仕合の道場でも、不意を打つて、もの陰から、木劍で撲はすやうな事はあるまいね。」

と、無意味な事を言つた。が、然うでない。こゝで、二階と階下とを、斜に睨めた叔父御の目には、階子段の眞下へ、俄雨に取込んだ洗濯ものと言つた形に、内箱と下地娘が押束なつて、二階を窺ふのが殺氣立つて見えたからである。

「へーい。」

筒拔けた返事をする、叔父御が座敷へ入つたあとへ、むら／＼と湧いて来て、大汗の顔を出

したのはお伊乃である。

手を拍いたのは里吉で。

「お煙草盆を、きれいにしして、……お茶を——」

「いや、お銚子だ。」

「おビイルは角の伊勢屋が、よく冷えて居るんですが。」

「いや、先生はお銚子だ。」

「お銚子……大急ぎで、……ね、可いかい。」

「へーい。」

十九

もの干へ飛んだ銚子之助は、危く十内の影を見ないだけの餘裕があつて、欄干を跨いで瓦屋根へ出た。が、其のまゝ、其處へ蹲んだのでは、大な揺鉢が轉げたほどには、直ぐ座敷から見えさうなもので、……戸袋へびつたりと張着いて、震へる足をしめながら、とに角一息ついたのである。

湯朝 驚破や、旦那の聲がする。——暗いぢやないか。あゝん——と言ふ。無理はない。成程暗いに相違ない。



しかし電燈がぱつと點いて、光が屋根へ流れたのを、肩ですつと躲すやうに、戸袋を摺つて用心の身構をした時は、大長刀を翻然とはづして、五條の橋の欄干へ飛んだ意気があつた。気がつくくと引攪つて出た薄羽織を、いつの間にか頭にかぶつて居る。が、何う思つても猫に紙袋で、薄衣を被いた御曹子の装ひでないから、人知れず悄氣た顔をして、袖を通して、屋根の上で裏通りを見つつ紐を結んだ。

背水の陣の見得である。銚之助も、こゝらは一寸落着を見せたのである。が、續いて鼓膜を打つたのが容易でない。もの干竿で目を突いたやうに思はれた聲は、叔父の底力のある掠れた奴で、餘りと言へば、思ひ掛けないが、婦の旦那が、近來熱心な直弟子と聞いて居る身には、却つて疑ふ餘地もなかつたのである。

駈落前に、夜中の棧敷を逃廻つた時の、あの、叔父的の寢着姿が、それ其の窓にすつくりと立つやうに、銚之助は一縮みに成つて小さくすくんだ。

羽目を漏れて、芥とほつたのは、下の火鉢でくさやの乾ものを焼くのである。

此のほひが、むつと立ち、雲を招いて、空の色は濁りつつ、いよゝゝ暗い。

酒がはじまる、さあ、弱つた。――

「いや艶麗なお妾さん、お知己に一杯お酌を――」

あゝ、苦々しい、苦蟲が、あんな口を利きはじめた。

「……ほう、然らば御新造。――お、里吉さんか、其處で更めて姉さんと……さて、よく圓鬚が似合ひました。あゝ、薄化粧もお涼しい。……棚澤氏は果報ものだね――これは、お誂と言ふ處へくさやが出ました。此方人等には鱈の鱈より、結句此の方が性に合ひます。並んだ御兩人の相性のやうだてね。はゝゝ、器用に捲つて、熱湯を通して、むゝ、醫油と味醂を割つて掛けたね。……いや、姉さんのお仕込と見えて、女中が透かさず心得たよ。――難有い、これは飲める――いやゝゝ、飛んでもない。こゝへ洗なぞは、松江の鱈といへども眞平。……願ふ處は此の上は澤庵だ。支那料理のあとで一入憧れます。が残念ながら、もはや年をとりました。厚切は頂けねえ。細くはやして、冷く絞つて、水氣を切つて、生姜をちよきゝと、鯉節を氣取つて……何、いや、買ひにお出しなさる。それは不可え。此の温氣に戸外をぶら下げたんでは、御近所が迷惑だ。和睦を仕らう。胡瓜を薄く切つた處を願ふとして。――其の姉さんの白い手が、思ひ切つて、ぐいと二の腕まで入つた糠味噌と言ふのを是非ね。はてな、御自分ではお漬けなさらない。――すると、あの肥つた女中が赤い腕で搔き廻すんだね。いや其奴はあやまる。しかし、不心得だね。圓鬚に對してもあるまじき事だ。糠味噌を手掛けねえちやあ世帯持が覺束ねえ。むかしは、これ、女郎たりとも、間夫とひけすぎのお取膳には、お香々を切つたものさ。(夜半の茶漬)と稱へてね、



此奴が指を切る以上の心中としてあつた——餘り當には成りません。傳へ聞く所によるのだから——しかし眞個だよ。成程旦那がお嫌ひなさる、あの移香を。——茶鼓を燃して燻すと除けるが……ふん、如何にも、愛妾の手枕に、ぬか味噌が香つては、十内先生辟易か、御尤もだ。いや、しかし御挨拶だね。——時に手枕と言へば。」

と豆腐老人、大機嫌で一人で饒舌る。いや、一人だけが銚之助の耳を貫いて聞えるのである。此の間に、一枚々々、瓦に密と爪立つて、遁路を探して居た。

二十

「こゝに年明きの女郎の話があるがね。」

叔父御は泰然と胸を落して、猪口の脰を張りながら、十内と里吉を、等分に見較べて、

「尤も此處で女郎の噂をするのは、平家に對して、實盛が夜鷹の講義をするやうなものだが……實は、今入る時艶な枕を見ましたよ。煙草盆に一寸懷紙を當てた奴だ。……」

十内は一向に氣づかなかつたらしい。が此を聽いて、思はず膝を浮せて、一寸俯向いて其のまま取澄ました里吉の様子は、(ワキ)の僧がワキ座で思ひ入をした形がある。

「ために忽ち三四十年飛んで若返りました。酒がうまいね、何うも甚だしく旨い。」

「平時のか。」

と十内も、此の時酌をさせて得意である。

「は、」と唯言つたばかり。

「いや、だしぬけに起請の怨靈が化けて出たやうで、御婦人の前では恐入るが、棚澤さん、——先刻途中で、禪のぶら下つた、あの話だね。——征夷將軍が御覽の三番叟にヒユウ、ヒヤラリと、それ振つた奴さ。丁ど同流で、當時での狂言師、鐵平と言ふのを私ども若い時によく知つて居ました。名の如く藝も堅い。さして上手と言ふほどでもなかつたが、其の時分は、うまくないなりにも仕事は律儀だ。不斷から、すべて一生懸命で、寒暖の挨拶をするにも、此の……」

と凹んだ帯を皺手で敲いた。片手に猪口を持つたまゝ。

「下腹へ、うんと力を入れるから、今日よいお天気、快晴仕つたと言ふだけで、最う眞赤に成る。私ども父親の處で其の鐵平が歳暮に來た時の事なんど覚えて居ますが、袴へびたりと手を支くと、鹽鮭をかう頭を取つてぶら下げざまに、片脰眞直に突張つて、眞正面を切つて、挨拶をするんだね。(粗末ながら、お歳暮でござる。)とそれ、眞赤で陳べる。——佐渡國のお百姓が京へ上つてお地頭に口上を申す通り。で、其の鮭を突張つた手に震が來るんだ——酒を飲むのも其の通り。」

朝 湯







りに鳴る、日は蔭ると、寸法はよく成りましたな。——身だしなみは早いから、雑用を片づけたあとを、きれいに圓鬚へ櫛を入れて、ぼん／＼と刷毛で化粧を直して、浴衣を着換へて、あらためて、(もし、おあつい處を一杯)と成つた。つらく／＼を見ると、年増ざかり廿六七——いま此年では話が冴えねえ。が、拙者とても同年配さね。——昨夕買った、芳原のおいらんより此の方が餘程容子がいいてね。是で座蒲團を敷かせ、お膳に向はせ、手料理でのませて、酌をしてくれて、然も無錢だ。案ずるに堅氣は安直い。……本來は客と成つて、餘所様で馳走に預り、御内儀、娘御なぞのお酌を忝うする時は、夢ではないかと思つて可いのだ。誰も膝を抓つても見ないのは、人間馴つこに成ると圖々しいてね。」

「御挨拶に困りますな、先生。」

「先づ……話だが。……扱ひ、心持に酒が廻るうちに、ふと夕立雲がむく／＼と湧いて出た。——お、降つて來ましたか。」

「え、ほつり／＼大粒が。」

と里吉が窓に立つて空を覗いた。其の後姿は、一筋吹き込む風に裾まで靡いて、涼しいよりも、ぞつとしたやうに肩が顫へる。其の時である。銚之助の影が戸袋を蜘蛛の如く横に這つて羽目へ隠れた。

「い、鹽梅だ。」

と、危いこと、のしりと立つて、額に扇子を翳しながら、十内が押並んで、物干を透かしたので。引違へて、里吉は胸を一寸手さきで壓へながら、下階へ下りさうにした處へ、豆腐老の煙管が、灰吹へトンと當つた。話の切れめではないのに、十内は窓へ外れたし、二人ともはづしかねたか、其のまゝ、里吉はまた座に着く。

「……と言ふのはね……筑波の方から眞黒な雲を上げて來たものではありません。——鐵平が——根津で流連の退屈まぎれに、糞豆を入れて握飯を臺の物で算段して、藍染川で鮎を釣つたなどと、若旦那の前で風儀を濫す、怪しからん話をしながら、灰吹をトンと遣ると。……」

「やあ、えらく今の音は冴えましたな。」

と十内は窓に吹かれて居た。

「音ではないのさ。——其の時、妙に濃く……恁う、むら／＼と吸殻の煙が、一度、灰吹の中へ押伏せられたやうな形に成つて、むく／＼と勢よく。」

と徐に掌で空を煽いで、

湯 朝 「天井へ立つたのさね。——すると何うです。其の煙を熟と睨んだ鐵平の容體が尋常ごとでない。肩を怒らし兩脇を膝に張つて、うんと下腹に氣を入れると、例の鹽鮭を突出す形だ。唸るやうな



聲を出して（まだ明けやらぬ東雲の、小雨の煙る山間でござるから、それと旗の手は見えねども、關ヶ原、相川山、笹尾ヶ丘に、箕の手の陣は石田三成、島左近、伊藤盛景、織田信雄。小池村には島津の堅陣、續くは小西行長なり。松尾山には小早川、南宮山には毛利秀元。其の東には長會我部。岡ヶ鼻には長束正家。なにし大谷吉繼は、藤川の流を前にあて、鳴をしづめて控へたり。や、や、關ヶ原一面はなほ立渡る霧にいたして。……と途方もない事を饒舌り出した。煙草の煙を睨みく……ね。」

二十二

雨の音や、急にして、風も強く吹込むと、電燈の灯をフツと攫ふやうに見えた、が、燭は一呼吸光を増した。轉瞬の間の明滅に、豆腐老の、且つ酔へるしかみ面は、暗く成り、又……明るくなる。

處が希有だね。鐵平が（濛々たる、此の朝霧の深きため、兜の廂を打仰ぎ、小手を翳しつつ見渡せども。）ツて續いて言ふから、真似にも仕方話にも、恚う霧を透す心組で、顔を上げて望むべきだに——茶番の千崎彌五郎が、山崎街道で雨を凌ぐやうに、團扇で頭を伏せて、右の灰吹から立騰る煙を俯向けに睨んで居るのさ。——壺中に天地を何とか言ふが、其の容體だと、灰吹の中で關ヶ原の合戦がはじまつたんだて。……太く、ものに凝つて來ると此のお狂言方は、時々氣が變に成るて事を、仲間で風説をしたものだつげが、煙草の煙が霧に見えて、むら／＼と發つたんだ。——（五十間、七十間の先は、早や見え分かず。霧が動いて、雨をすくつて、風にあてれば、百間、百五間の前までちらつと見える。敵の旗の棚引くと見れば、其のま、又深く霧に包まれる。と、時はさていつなんめり……慶長五年九月十五日、卯の時ばかりの朝まだき。是より先に内府公——權現様の御陣でござる。）と言ふと、鐵平め、びたりと手をついて叩頭をします。と豆腐老は、口を些と歪めながら、寂しい薄笑をして言つた。

「へい、は、あ、其は。」

「まあ、何うも。」

と聞き人は二人、うつかりして、煙に巻れた形である。すぐに猪口を取つて一口して、

「親代々御扶持を頂いた事だから、成程、石田方は、鐵平に取つて敵だてね。（權現様の御陣でござる。席を更めまするでござる。）——上座御免の格です。へし曲つた袋戸棚に（嘯の面）と言ふ、お狂言では、江州守山に産する蚊相撲の蚊だの、蜻の幽霊。然うかと思ふと蟬の精魂などが被らうと言ふ、例の興がつた面と一所に飾つてあつた、太刀を一口、鐵平め、左膝に引きつけて、床

湯 朝



の間の正面へ、眞四角に構へると、しいしい……警蹕を掛けるんだ。弱つたね。此の方もぼんぼち米を頂戴の側だから、其處へ寝そべつても居られませんか。煙草盆を一具攫つて縁側へ出ると、(冷えます、)とか言つて、一度堅く搾つた雑巾を當てて、おいらんが、それ花莫蔭を敷いてくれます。小さな聲で、(困つた持病でござんす。)で暑さで些つと嵩じて居ると断りながら、端近で蚊が多いから、すぐに今戸の豚が来ました。(いで、權現に於かせられては、夜のまだ明切らぬうちよりいたして、赤坂表を御出發。此の時、野上、關ヶ原の間なる桃配山に本陣を据ゑさせらる。敵間およそ一里ばかり。福島正則左翼たり。此は専ら浮田に備へる。黒田長政右翼たり。此は即ち石田に備へる。……(よく覺えて居ませんが、何にしろ)……細川、加藤、井伊の勢は、中央に備を立てて、小西、島津と相對す。後陣には、生駒、金森、古田の人数。さて福島陣の背後を、斜に取つて控へしは、藤堂、京極、寺澤にて、大谷の隊は相抗ふ。……時にお旗本の御人数をば、鶴翼、魚鱗に御陣取。)と曇みかけた。

いま、私のやるやうなものぢやあないのさ。——鐵平は本職です。盛衰記も讀めば、奈須も語る。修業を積んで腹のある處へ、講釋口調で。剩へ魂を灰吹の中へ打込んで、霧の中へ自分で突立つて居る氣なんだから。——これから、旗色、紋じるし、鎧の緘を讀出すと、ちら／＼と動いて、槍かなものも、きら／＼する。目に見えるやうなんだ。が、此れを又ゆうべ氣の微酔の、内へ首尾の悪い錢なしが、うと／＼寝ながら夢のやうに聞くと言ふのが、御存じはあるまいが、講釋のき、人の腹藝さね。——御本陣を隔たること、疊三疊餘りだから、構はねえ。煙草盆をひつくりかへして、晝席なみに横に成ると、枕頭に、團扇使をして居たおいらんが、懷紙を當てる奴さね……いや、御兩人も其處へ寝なせえ、構はねえ。」と大な聲して呵々と笑つて、手酌でとくと傾ける。

二十三

「やあ、吶喊の聲が上つたな。」

其時、反身の膝に肱を張つて、目を空さまに頤で物干を覗きながら、豆腐老は氣を吸ふ如く、口許を耳の根へ捻曲げた。——

雷の音がしたのである。

「先陣は既に手合せだね。……雨も來た。あゝ、ばら／＼と矢玉の如し。……快い音だ。杯洗の水も急に冷く成つたやうで爽かだね——お一杯。」

と十内に衝とさすと、黙つて羽織の袖を捌いて、横に出す丸い腕に、細く酌をする里吉の白い手は、修羅場の中にも窈窕である。



雷が續いて鳴つた。

「これは、……今夜の方が餘つ程戦だ。——鐵平が關ヶ原を饒舌つた當日は、夕風と來て、眞に靜で、例の蚊遣の豚の口から噴出す煙が此の方の其の煙草盆を枕に寝轉んだ縁側を籠めて、鉢前へ充滿にスツと靡く。此を座敷の眞中から、鐵平が据眼で睨んだ奴さ。(また立籠める霧の間に、どどどどどと轟き渡つて、鐵砲の音おびたしく、續いて吶喊の聲、三度揚がる。家康公、御馬を立てられたる所の桃配山の本陣と、治部、攝津、備前中納言、大谷刑部の陣場とは、早や一歩は近う成る。驚破、鐵砲の音に連れて、御馬廻りの若ものども、我も我もと、一度に馬を乗廻す——天下分目の大事なれば場數巧者も、もの師どもも、さすがに心あせり、氣苛つて、備や、亂る、處に。)と兩手を振廻して鐵平が、其の手でどんくと下腹を敲く、胸を掴む。もの狂はしい體裁さ。(若旦那、あれなんでございますよ、お察し下さいまし。)と聲を密めて、内證だから、自からおいらんが、ほんのりと、蚊遣のなりに横顔を寄せるのを、恚う仰向けに見た處は、白粉の香が芬として、安い反魂香の裡にからくりの高尾を見る體さ。——怪しからん有様だ。考へると、年あきも浮氣ものだから、中年の親仁の狂人の狂言師より……此でもお能の若旦那の方が、一寸よかつたかも知れませんが、御兩人の前だがね。」

「先生、御馳走さま。」

里吉は、しかし此の場合、言はねばならないものやうに言つて、氣のなささうに一寸笑つた。「先づ話が……はて、此の方は、鼻のさきの顔に氣はなくても、ものがものだから、ついそれ、芳原のを思ひ出して、恍惚とする。言語道斷……鐵平は息をせいで、(其の時、お旗本の一人、野々村四郎右衛門と申すもの、あわてるまゝに過つて、家康公の御乗馬に、おのが馬をどうとはかり乗掛くる。權現、腹を立てさせられ。)と、ハツタと睨むと、——いつでも、こんな場合に、舞臺の狂言でするやうに、上下の片肌を脱ぐ處を、浴衣の袖を脱いだから、胸は發露つて居るし、鐵平のは半分裸體で、(忽ち御手の御刀を、ギリリとお抜きにあひ成り。……)と言ふが早いから、自分、引きつけて居た一刀の鞘を拂つて、すかりと抜いた。——晃然としたてね。

や、また光るぞ。」

と豆府老は、斜めに身をしめ、

「かつたるく、恚う、此方で、寝そべつて聞いて居た、私とおいらんとに、じり、と向いて(粹め、不埒だ。)と呼ばはつた、までは講釋だが(おのれ姦夫。)と躍り掛ると、振被りもせず、横なぎに、刀を、すばつと。」

豆府老は颯と肱で拂つて、忽ち指を我が額に返して言つた。

「ね、此の眞額へ斬りつけたんだて。」



「いやあ、光る。」

「ひえ、。」

と、雲を射る電光と、叔父の口の剣の光を、袈裟に浴びて、眞二つに裂かれたやうに、思はず引呼吸の聲を絞つたのは、屋根の上の兄哥である。

然も銑之助は、たゞ屋根の上とばかりで、屋根屋が夕立に逢つたやうな暢氣なものではない。この時しも、丁ど、廂合から高く大屋根を貫いて茂つた、青桐に攀上つて、手足を縮めて居たのであつた。

二十四

地藏様の縁日に買った鉢植を並べたのでなくつては、二階から縁は見られないと言ふ、……此のあたりには珍しい。界限では、何處の横町からも直ぐ目に着く、唯一本だが、大幹の青桐である。

青桐の樹が構うちにあると、家が榮えるとか、衰へるとか言つて、別して此の連中には事やかましいのであるが、とにかく、恚かる青葉の風情は得難い。それには地ぬしのものだし、勝手に

は切れない處で、また此の樹が、切詰めた隣家の塀と、里吉の三野家の塀との眞只中にあるのだから、どちらの構うちとも限らないので、いゝ事は取合ひっこ、わるい事は押つけっこにして、神経を休めて居る。——で、物干を横へ、戸袋を一廻りした押入の裏へ押被さつて居て、……いつか里吉が引越したてには、秋の末で、其の葉の、ばさ／＼と夜更に鳴るのが、馴れない女を驚かして、二階が震動するの、押入へ——鼠や猫の音でない——犬が産をしたの、盗賊が籠つたのと、一寸怪談じみるまで、履歴つきのものである。

つい近頃の一晩も「うちの露臺の見晴しを御覽なさい。」で、里吉が兄哥を物干へ連出して、空を燦と、さながら屋上の芍薬園に星を鏤めたやうな暗夜の一處を指して、「何處だか、あれを御存じ。」……と言ふから「馬鹿にしちやあ不可ねえ。」……と澄したものの、すぐには見當が付きかねる。「いやだ、浅草の十二階ぢやあないの、だから見晴しさ。」と投げて言ふので「然うだ十二階だ、いやよく見える。」と小手を翳すと、脇の下を一寸つ、いて「擦つたい。」と言はせたあとで「三越だよ。いやだ、だから田舎廻りはさせたくないのさ。」と異に笑はれたものだつて。其の電飾が花火のやうに、眞黒な大きな葉の重なつた中に流れて居たので、銑之助は其處の青桐を知つて居た。

湯 朝  
兄哥は、はじめ屋根を桐の葉かげへ廻つて、しばらく身を潜めて蹲んだが、叔父の聲も手に取



るやうに聞えると同時に、筒抜けに響きさうで、此方で幽な咳も出来かねる。

呼吸を詰めて居たはまだしも、雨がぱらついて来ると、時々誰かの顔が窓から出るので、隠場所の懐が浅いから、いまにも見附かりさうな不安に堪へない。

桐の葉に礫が飛ぶやうに降つて来た。

一度着た薄羽織を、紐を解いて又脱いで、袖だたみにして懐中へ押込んだ。

「はッ、年増に仕贈られる。……へッ御羽織だ。……恠う庇つたのが身上さ。」

と罰の當つた、……まだそんな氣で、裾の裾まないやうに尻を端折つた。讀まる、方にお忘れのない事を希ふ。此は屋根の上の舉動である。目當が出来た、兄哥は其の桐の樹を傳はつて、庇合の細路地へ下りて遁げようとしたのである。

勿論、一方は表二階の窓廂で、すぐに通道だし、一方は叔父たちが陣取つた真正面の屋根だし、遁路は此のほかになかつた事は言ふまでもない。

暗さは暗し、鳴つて来た。

二つばかり手探りで、密と桐の幹を探り當てて、トンと思ひ切つて足を離して抱着いた。あとで思ふと冷たい汗——軽く飛びつくくらゐの間があつた。

一尺ばかり、一度、屋根を上へ攀ちてから、廂下りにするくと下りかゝると、風のはやてに

似たのが大腕りを打つて颯と来た。

其の風さきへ、斧をひらめかすやうに、電光が乗つて黒雲をみしと噛んだ。

人も知つて……銃之助は非常に雷を怖れるのである。

絶る手も離れさうに、慌しく幹を下りに、ふと下を見ると、足に焼火箸を刺されたやうに、身を引癒つて、悚然とした。二軒兩方の堀の忍返し。念入りに引裂竹と八寸釘の、桐を挟んで嶮しく鋭くくひ違ひにすくくと尖つたのが剩へ續けざまの電光に、目を刺すばかり、然も陰々として青白い——貫かないでは藁をも通さぬ。

二十五

妙なもので、此の場合にも、銃之助は嘗て奥州路に漂泊うた折から——何處かの古沼で泳いだ小兒が、ふちを、すぼりと飛込んだはずみに、滯標に打つた杭の、水にかくれながら先の尖つたのが尻にさゝつて、腸を貫いた時、ニヤ／＼と笑つたと言ふのを、聞いた事を思ひ出した。無慙な串刺。……

朝 湯 として、彼はニヤ／＼と笑つた。

唯、其の笑顔が、衝と電光に射られて、ニヤ／＼としたまゝの顔が、目に曝される。







ぐしよ濡で、ぴたりと坐る……

「御免。」

と言つて、まうつむけに、疊に頭をすりつけた。片手で、するりと摺り落ちる懐の薄羽織を壓へながら、

「御免。」

と、もう一度、夢中で叩頭をするとともに、通魔の如くズツと立つて、立つと齊しく、抜けるばかりに階子段を下へ、どたくとどたくと。

いや、何とも、鳥か、獸か、人間に似た大きな蛙が、雨風に投飛ばされ、屋根から、もんどりを切つて飛込んで、座敷へ挫けて、階子へ流れた體であつた。……

二十六

其のはすみに、轉げさうな勢で框を飛ばける兄哥に先立つて、内箱のお伊乃が、土間へ駈下りて格子戸を開けて遣つた。

呆氣も通越した始末だが、一も二もありはしない。兄哥の身體が階下へ落ちれば、戸外へ遁出すには極まつて居るからお伊乃は逸早くサソクを遣つたが、これも唐突で面喰つて跣足で居て……

……いまを頂上に、雨は車軸を流すのに、傘とも言はず、口も利かない。

兄哥の方も、雨具處ではなかつたのである。

眞赤に成つて汗をかいたお伊乃の顔を、一目見たのが、此の世の別離のやうな、情ない顔色で、戸を潜らうとすると、あつと叫んだ。

もの凄まじく鳴つたのである。

音に怯えて、茶の間を棒の揺れるやうに、ひよろくと引返して、長火鉢の前を、ひよろりと

臺所の出入口で、

「はあ。」

と言つた。

電燈も、じいと薄く滅入つたが、まだ此の光は消えずに居る燈明のちらつく縁起棚の下に、目ばかり睜つて、きよとんとして立つた下地妓と、見當なしに、面をハタと打撞けたので、

「はあ。」と引息に成つたのだが。

「可恐！」

湯 朝  
と本能的である。嬰兒のやうに叫んだ下地妓は、奥の六疊へ遁込んだ。その理で、兄哥の身振も、眞蒼な顔も、幽靈の眞似をしておどかしたも同じであつた。



兄哥は勝手口へ飛びついた。水口から遁げようとしたのであつたが、トタンに光つた電光の激しさと言ふものは、すぐ其の横にある青桐の根を紫色に洗つて、梢まで幹に青い瀧を迸しらした。いや、束ねた藁の崩れた體で、手足を揉みくしゃに、男も杭も何もない。

「わつ。」

と一跳ねに跳戻つて、せめてもの隠場に、次の六疊へ駈込むと、「きやッ」と、その下地妓が悲鳴を揚げたのと、いま光で想つたより数十倍の大音響で、霹靂したのと同時であつた。

兄哥は、くるくると子子の影の伸びたやうに、一瞬時寂然とした。茶の間へ舞戻つてふらふらと廻つた。が、ある間もあらせず、息も吐かせず、偉大なる土蜘蛛の腹の裂けたる狀に、電光の巢から可恐い藍色の血を流した。

階子段を一もがきに縋り上ると、其の狼狽さも、恐怖のほども察しられる。叔父の傍へひしと寄りつき、取纏りたい手を縮めて、眞うつむけに領伏した。

「助けて下さい。」

疊についた手の指へ、額をつけて擦りつけて、あとへするくと退りながら、

「た、助けて下さい、叔父さん、お助けなすつて、お助けなすつて！」

此時、六方老人は、更めて見ようともせず、懷中を廣く、細の羽織をスツと脱ぐと、さらりと投げて、銚之助の背へ掛けた。

「助けて遣る。」

「へい、叔父さん。」

轟き渡る雷の中にして、

「突伏して居な、突伏して。」

「へーッ。」

と頭から羽織を被つて、葭簀の隅へ手足を縮めた。

「あ、お銚子が。」

里吉は漸と聲が出た。——いや此の婦はもとより、十内と雖も、殆ど口が利けないくらゐ、しばらくは餘りの雷の激しさに、唯瞬をするばかりであつた。

銚之助が屋根から飛込んで、階子段を轉がつて、下階中を跳廻つて、再びこゝに突伏して叔父の羽織に包まれたまで、實はもの十分の間もなかつたのである。

里吉は而してはじめて息が吐けた。生死はとに角、はじめて息が吐けたので。

湯朝  
で、銚子を取るのをきつかけにして立つのに、羅生門の腕が出て、襟髪を引摺まれる時よと覺悟したが、無事に弱腰が座を離れて、壇に立つた。



「あ、」  
吃驚した——階子段を下りて出會頭の茶の間を横に、お伊乃が高腰で這つて居るのに、ふた、び度肝が抜かれたのである。

「あ、驚いた。夜半にお社へ出る牛かと思つて。……大概怯えて居る處ぢやあないか。申戯ぢやあないよ。」

伊乃は這ひながら、目を働かして、しかつめらしく、

「で……ござんせう。それ、今——で、ござんせう。私、うっかり跣足だつた、ので、ござんせう。ですから、足を拭きませんと、何分にも。」

と言ひく、倒に湯具の搦んだ太いのが二本、臺所へぬつと入る。

里吉は長火鉢の猫板の傍へ、圓髻も、肩も、腰も、トンともう斜に支いて、

「あ、松ちやんは？……松ちやん——」

下地妓が大疊から……また此の顔が目一つでないのが見つけものくらるな陰氣さでちよろりと出た。

「可恐い……姉さん、私、どうしようかと、お、思つて、思つて、思つて。」

「い、から、其の湯呑へ冷いのを——お水ぢやあないよ。」

臺所で、とツくと酒を注ぐ音がする時、薄りとした電光が、やがて餘波に閃めくと、此の凄じかつた風も雨も、荒びる事に於て、飽悦、満腹した體で、遙か品川のはづれの方で、遠く雷様のおくびが、ぐうと響く。

里吉は、目をふさぐまで、酒をとくくと呷切つた。吻と息して、鬢のみだれを搔上げながら、  
「一寸、二つ三つ叩いておくれ。」

と、襟をうしろへ寛げ状に、白々と、頸を長くさしのべたが、臉の色は尙ほ、青く、首の座へ直つた風情があつた。

笛を吹くやうな電車の響、カラ／＼と間近に聞え、町を忙しき人の往きかひ、話す聲、笑ふ聲、八方に雨戸を繰る音。三味線の音メの、其處此處に冴えるのと、雨の歇んだ、涼しい雫と同時であつた。

三野屋は、上下しばらく沈黙に領された。

「先生。」

十内は、肩の幅も、膝の圍も、見る／＼一倍大きく成つたが、何とも形容の成りかねる面色で、



「これは先づ……一體何う言ふ事に成りますので。」  
「されば。」

叔父御は猪口の際を、靜に扇子づかひをして居た。

「御承知でもあらうし、申すまでもないがね。……いや、石田方大負けさ。それがしも、生命助かり、大島へ流されもせず、恚うして無事で居る處を見ると、先づ當合戦の島津だね。……兵庫頭義弘は、枚田川、多良から伊勢路、駒野峠を越えて、堺から船で九州へ落ちた。處を、此の方と來ては、鉢前から木戸を潛つて、掃溜を飛んで、路地から廣小路を逃げましたよ。」

いや、既での事、鐵平權現の一刀を眞額に浴びる處さ。今思つても身震ひが出ます。」

「お察し申し上げる、はい、全く身震をなさるでせうでな。」

と粟立つ膚を探るが如く、太い腕を擦りながら、十内は羽織にくるまつた銑之助を流眊に掛けた。目の色の赤味走つて、

「で、何う言ふ事に成りますので？先生。」

「されば。」

と、スツと片手を流して、六方惣三郎は徐ろに扇子を疊んで、

「(おいらんも無事だった)——と言ふのが……(がつき奴、遣るまいぞ。)で、鐵平は最う此處に

及ぶと、橋がかりを幕で追込むのが仕來りだから。——あとで聞いた話だが……おいらんは不斷無理心中の用心で氣轉が利くてね。帯、袖をつかまへられないやうに、いきなり裸體に成つて、座敷を水口に遁げたさうだし——鐵平は、その舞臺には目を掛けない、抜刀のまゝで木戸口を、揚幕の氣で摺足で追つて出たから……もう既においらん見物と、いまの講釋の高聲に、生垣から木戸口に一群をなした長屋近所のあまたの軍兵が、手もなく押へて鎮めたさうでね。——灰吹と蚊遣の煙が消えれば、何もない。鐵平の妄執の雲も晴れました。——其の晩は涼しくつて、い、月さね。」

と、濟して、煙管を脂下つた。

## 二十八

十内は苛ち氣味に、むすと居直り、

「で、一體何う言ふ事に。」

と、のし懸る。胸幅かけて袴の膝も、やがて釣鐘ほどに意氣込の重量いのを、睫毛で受けるやうに、軽く薄睡つて、

湯 朝 「……其がね、落着までに、最う一條ありましたよ。——後日、舞臺で催能のあつた時だて……」



樂屋に、親ども、私たちの控へた處へ、お囃子方の座の右へすつと出た、當日の狂言三番目に、(鎌腹)と言ふのシテに立つ鐵平が、丸棒に、布繩で鎌を結びつけた、お極りの持道具を眞直ぐに直して、(今日夕未熟ながら、一世二代の鎌腹を仕る。……太夫に於かせられても、若旦那も、おすき見が願ひたうござる。)と言ひます。凄じい意氣込で。……と、其の鎌が造りものでない。觸ると指が落ちさうに、ドギン磨上げた眞鐵の利鎌だ。——平生、おいらん上りが浮氣なために、又かと氣が狂つて、姦通呼はりをした申譯に、舞臺で眞個に切腹つける料簡なんだ。此は可恐しい。……掬として、能舞臺で、眞の切ものはつかはせません、と何は措いても樂屋中で堅く留めた。すると、鐵平も又さらさらとしたもので、(舞臺で切れない腹ならば、いつまでも切らずに活きて居ります——此で申譯は立つてござる。)と自分で極めて澄したもさ。……しかし、吸殻の煙の立ちやうで、(慶長の五年九月十五日の朝まだき、朝霧深く立籠めて。)と關ヶ原の軍が灰吹の中から、魔法のやうに、むくくと立騰る事はそれ以來癖に成つた。——いや、かはつた男さね。」

「先生、」

と言ふ、唾もねばつて、

「其の鐵平は鐵平で、鐵平ですがな。此の場合は、此は一體、何う成るのですかな。」

「然れば、……此の場合は一寸酒が切れましたな。」

十内は大根を揉潰すやうに腕を搦つて手を敲いた。

「……卑怯だわ——私が行かなくつては……まさか、赤間源左衛門——木更津の博徒でもあるまいよ。」

里吉が、今度は度胸も透通るばかり、浴衣を涼しくすつと上つた。

「お熱い處を——」

「受持ちませう。ぐいと引かけた處でだね、此の場合は、即ちこれなる。……」

と銚之助の頭のあたりを、引かぶつたまゝの羽織の上から押へて言つた。

「袋入の荷物をぶら下げて退散します。」

「成程、」

と故と落着いた體で、肱を撫でると、肱はぬツとして動かないが、持つた扇子がぐるぐるぶるぶると忙しく廻る。……

「袋入のお荷物は一應相分りました。が、其の、お荷物は何う成りますので。」

「然れば、」



「大方は、途中お打棄りに成りませうですな。」  
「いや、年を取ると慾が出ます。——棄てません。」

「はーん。」

「宅へ持歸つて役に立てます。」

「お役に——はーん……失禮ながら、其の汚れたものが……他は知らず、舞臺のお役に立ちますかな。」

「立ちます——一度、さつと朝湯に入れば。……別に仔細はありません。」

「いや、しかし、……たとへば大温習と承はります、先刻お話の連獅子の如き大切なものでも、ですな？」

「されば、却つて使ひごろだと思ひますよ。」

「朝湯に入れば、と言ふお言葉で。」

「御意の通り。」

「はーん、それは又存外手輕なものですな。——豫て承りましたが、……他流は勿論、お流儀はもとより、大切なお能には潔齋精進をするさうで。——また其處が貴い處だ——ものに依つては別火の謹慎さへなければ成らんものと存じて居る。が先生、事實然うなのではないですか。」

「何、別火……は、あ、事長じた殿様行事だ。町内安全で、邸が廣い行爲だね……こゝに、私に老女房があつて、もう疾に亡くなりましたが——此の甥の奴に、優しい嫁が出来て、そいつに觸らせまいと、嫉妬を妬く時など、得て、其の別火を用ゐるのさね。……町内安全、邸は廣いや——静岡へ落魄れて、尻端折で棒をついた時を御覽なさい。其の時舞臺と、聲が掛つて、ぼろを着たのが似合はなけりや、翁はもとより、天人でも、小町でも、此の方、素裸で舞つて見せる。」

二十九

惣三郎は扇子を膝に凜とした。

「……何々の能を勤めるために、潔齋中、(女は傍へ寄つても汚れる。)などと別火をする——勿體ねえ、結構な婦ぢやあねえか。お互に——婦が傍へもよつてくれないやうな藝で何うするんだ。——長屋ぢや出来ない事だね。坊主も金欄の袈裟を着ると、儀式張つて、表向き精進料理も誂へる。……破法衣に杖と笠で、ひだるい時は、秋刀魚の頭だつて舐らうぢやあねえか。……驚破夜討だと言ふ時に、生死の境でも、別火などとは言つちや居ません。禪一本で抜合はせる。いや言は變だ、は、は、は。」



と爽かな高笑ひで、

「太平で儀式張るより、舞臺を戰場と心得る。むかしはお狂言方の目にも灰吹から關ヶ原が顯れました。命がけに儀式は要らねえ。別火に籠つて生欠伸をするより、熱燭で鼻唄の方が勇氣が出来ます。軍に勝つ。舞臺に於ても同じ事だ。翌日、大切の勤めだと思ふ夜は、熱燭い處を煽りつけて、すきな女郎でも買ふのが祕事です——そのかはり朝湯だね。」

「はーん。」

と十内は嘲るやうに、

「變つたお流儀ですな。……尤も、貴方は、其處に袋を被つて居る誰かが、不義をして玩んだ婦人を、其のまゝ、今もつて傍に置いておいでなさると言ふ評判なご仁だ。——まさかとは思つたですが、只今のやうなお説では、失禮ながら、或は事實かも分らんですな。」

「大事實、はは、。」

と扇子の小間を半ば開いて、

「それとてもだ、後で湯に入つたから清潔なものです。一向、傍へ置いて臭氣がしません。賢女、貞婦だつた處で、不精で垢だらけなのは薄汚ねえ。……いたづらをしたあとで、身體を清めた妾の方が遙か増だ。——勿論、本妻は事も話も別だ——藝妓や、妾なぞは、世間、腕づく金づく

意地づくだ、どつちでも勝つた奴が引奪る……たとへば戰場の分捕品さね。」

「先生、」

「はあ……」

「私も思慮がございます——更めて御挨拶をいたすとして、とにかく、お言葉に任せます。一旦、其のお荷物ごと御引取を願ひませうかな。」

「いや、引取りますまい。」

「何ですと！」

「私は師匠だ。……苟くも師たるものが、弟子のために、引取らされると言ふ道理はないてね。」  
「貴方も御年配だ。お考へなさつて宜しい。……唯今のやうな暴言を放つ師匠は、師匠とは思ひません。最早や弟子ではありませんぞ。」

「御勝手だ。が、しばらく。……憚りながら當流に於ては、一旦師弟の契約をした上は、弟子の妾宅の二階に於て、その弟子に勘當をされると言ふ例は斷じてない。——破門を望みとあらば、神佛の前で更めて仕らう。未だその儀に及ばぬうちは、確に弟子だ。——師匠が申渡す、此處を速にお引取りなさるが可い。」

と苦い顔して又笑つた。



「檀那……其の方が餘程意氣だぜ。」

「流儀は呪はれるぞ！——立つな。ふ、不埒だ。汚らはしい。」

と、立つて送らうとする里吉を、居たけだかに睨み据ゑて、階子段の鳴るのが格子戸まで遠雷の如く轟いて、十内は黒雲を捲いて出た。

「姉さん、」

「はい、——申譯もござんせん。」

「いや、此の馬鹿野郎を、和女は茶人だ。——却つて私からお詫を申す——旦那が怒つては面倒だ。お商賣に觸るだらう。あの大金持のやうな世話は出来ない。……が此の馬鹿野郎と離れないおつもりなら、拙宅へ引取つて、一飯をお分け申さう。寒いと、ひもじい思ひだけは、私がさせない。何うだね。」

と差覗いて、

「どうだね、眞個に惚れて居て、離れられないと言ふのかね。」

里吉は洒落れた簪で髪を搔いて、うつむいて、

「い、え、……米櫃はまた出来ます。——若旦那とは、あの……ほんの浮氣から。……」

「あ、浮氣か、薩張して、至極い。然うだらう。馬鹿は此奴だ。……顔を出せ、顔を出しな

よ。」

張子のやうに、膝の蔭へ、うろくと目ばかり出すのを、熟と視て、

「死んだへ！……何だ、それは。……俺の甥の面か、他人の尻か分らねえ。」

と布目を漉すやうな、掠聲で噴出したが、

「あ、しかし俺に優しく美しかった、唯一人の姉に似て居る。」

と言つて、ほろりとした。

鼻をすゝつて、

「あの弟子より、舞臺に取つては、子獅子が大切だ。姉さん、お前さんも藝人だ、何と思ふ？……

……いや、浮氣の方——もう一杯。……」



女

波



海水浴で盛場の濱邊も、日が暮れて九時は、人の出の引潮で、十時には最う寂寞する。……月の渚は、さらりと人間の塵芥を洗つて、紫陽花の青い蔭に、行水を仕済した濡色の清い膚に、浪の浴衣をすらくと絡つて、山岬の緑なす黒髪を、巖が根の枕に解く。……

分けて今夜は、宵に被した暈が霞んで、朧々の薄曇りで、渚は薄化粧の媚かしさ。いろ／＼の貝は、櫻も、撫子も、阿古屋、菖蒲も、月に輝くとよりは、ほんのりと光を包んだ艶を燻した珠である。襟飾、髪飾、腕の飾、腕の装して、白々とした膚を、のび／＼と——磯馴松の濃き、青田の淺翠なす——大福の蚊帳の彼方に、人間をごろ／＼させ、沖には鮫、鯨を泳がせながら、安かに、平かに、夜露にしつとりと憩つた状態は、宛然妖婦の面影である。

彼の女の呼吸は、静な浪の音して、玉を走らした血が通ふ。……女性の海の、分けて内浦は美しい。が、左右なくは人を寄せつけぬ。——近づいて此の姿を眺め得らるゝのは、戀を囁くものか、

星に憧憬るゝものか、覺めながら、夢路を辿るものか、然らざれば身投げをするものでなければ成らぬ。

人は、影もない、誰も来ないだらう。渚の妖婦は村里に對する備を弛め、寝返りを打つて、沖の毒魚に乳を庇つた。月代移る山蔭に、波の形が打變る、時は、一時に近いのである。

時に、村へ往來の白砂の道一條の——晝は富士山が見えて其の影さへ映る——松原の中なる池のほとりに、キヤ／＼と牙えた女の高聲、笑聲、少し含んだ話聲。五六人と思ふのが、蟲の音は亂さずながら、路傍の青薄の露を散し、松葉を揺るか、と蓮葉に聞えりと、間に橋が一つ架つたのに、其の聲音もせず、風の通るやうに渡つたらしい。……唯、早や朦朧として、揃つて、濱に淡い影を見せた。

數へて五人である、女ばかり。

おなじやうな浴衣を被たが、結綿、島田、樂屋銀杏、束ね髪、思ひ／＼。で、一人も帯を占めて居ない。伊達巻も、扱帯も、納戸、朱鷺色、一結びやら、ぐる／＼巻、中には手拭を胸に提げて、解廣げの褌を搔取つたのさへ居て交つた。

女 顔は夕顔、月見草。昆蟲か何ぞ飛ぶやうな、ちら／＼賢しげな黒い目を、齊しく波に向けて、  
波 言合せたごとく一様に海を視た。



「可懐しいわねえ。」

「眞個に。……五年ぶりよ。」

「ほんとうに可懐しいよ。」

「久しぶりなんですもの。」

「嘘ぞ逢ひたかつたでせうね。」

「中にも一人、若い聲。」

「生意氣言つてゐるよ。」

と中年増の寝めたらしい聲がして、其の櫛卷のが眞先に、すらりと、一盞の雪になると、揃つて、はらく、すらくと脱いで、五個は、砂に映る影も胡粉に成つた。

「お誂へだね。」

と一人が先立つて、誰かの建てた解衣場の葭簀へ入つた。……太脛に薄の葉の影。背筋が蔭つて、半身は月の隈と成る。

即ち中年増で、

「此だから、浮世は嬉しいんだよ。」

と、おくれ毛を拂ひながら、兩腕をすらりと上げて、前髪に結んだのは、それまで一寸口に銜

へて居た眞青な稻の葉であつた。

「姉さん、何、それは。」

と手拭を頬に當てたのは、結締の娘である。

「途中で引抜いて来たんだあね、新薬氣取さ。——海月の禁厭、ほ、ほ、ほ。」

二

「眞個、姉さん。」

「嘘でせう。」

「申戲なものかね、このくらゐな心掛がなくつて、大海で、お前、行水が出来るものかね。」

と年増が心得た様子をする。

「私にも。」

「一寸、私にも。」

女 「そんなに、お前さんたち、有りやしないよ。一葉づゝぐらゐなら、さあ残つたのを……此處に  
波 置いといた。」



と葭簀の中の腰掛を教へて、緊つた小股で、すつと出て行く。  
「薄よ。」

「あら、薄だわ。」

白い膚が二三枚、だまされた其の青薄に、穂が出たやうな手を靡かした。

「尤もお前さんたちの、其れはね。……」

年増の姉さんは、脇を抱いて振向いて、

「蜻を招くお禁厭。」

「可厭。」

「きやッ。」

と大袈裟な金切聲する。

姉さんは、おもしろづくに、手拭で印を結んで、

「そら、こちよ〜こちよ、こちよ〜、こちよ。」

「あれ。」

「ひい、御免。」

と、肩と肩と重り合ひ、伸び縮みして、浮いたと思ふと、はら〜と手足がほぐれ、翻つて鷗

の飛ぶやうに、咽喉、脇腹を影にして、乳も明白に、我勝に、渚へ五瓣の白い花。薄曇の月に怪しくも咲いた、と見ると、ざぶり〜と、音を立てて、散り込んだ〜あ、結綿のが泳いで行く。

「まあ、涼しい〜あ! ……冷たいぢやないか。」

と言つたのは姉さんで。誰かが、そつと背後から潮を刎掛けたのであつた。

「よくも人を〜さあ、影を御覧。手と足合せて八本の蜻。」

遁げるのを追つ掛ける、背後から、脊中を押へる、迂る、と泳ぐ。繁吹を立て、泡を捲いて、

月に腕の跳ねる影、輝く魚に異ならず。乳房に雪の雲を湧かせ、胸から霞を吐くかと思つて、東

海姫氏國の濱、一處、白粉の淵と成んぬ。

やがて大空が、上から壓へたらしく、一息、ひつそりと静まつたと思ふと、水を颯と裳に曳き、

雫を裾捌きでひた〜と浪を出た。其の櫛巻の姉さんが、膝を搦んで、手枕に、片腕白く、鬢の

緑を壓へつつ、渚に伸々と横に寝ながら、手まさぐりに貝を拾つて、掌で撓めて、衝と海面へ投

げたのが、巧に水を切つて、きら〜と青く飛んだ。

輝いて星が流る、やうである。

波女  
この光が、花の四瓣の一枚々々を、つら〜と照して、其處に簪の珠と成り、彼處に、胸の襟飾と成つて消えた。肩まで浸つたのが見え、乳を露したのが映り、結綿で踞つたのが映り、むか



う向なる背も見えた。

貝を取つて、又投げた。おなじく光つて海を切つた。

四枚の肉は、其の趣と、其の位置とが皆變つた。

も一度、貝を取つて投げた時、其の四つの膚は、花瓣のつぼまる如く、一所にひたと合つて、半ば浮き、半ば沈みつつ、恰も軽く寄する女波に送られて、ふら／＼と海を離れて出た。

櫛卷のがスツと立つと、月に着すむ波の影、岬がくれに消えさうに、肩腰を寄せ合せる。疲れたのであらう。……揃つて、波のやうに、十個の足の爪さきが濡れた砂を含んで、さら／＼と、あの、葎簀の小屋へ立返る。

眞先に薄りと、雪の膚が緞子を張つて、簀の間を透して見たのが、

「あッ。」

と言つた。

口々に、

「衣服がない。」

「あら、帯が。」

「紐も。」

三

取亂したのは女たちで、葎簀の蔭に立惑ふのもあれば、砂に縮まるのもある。——すたくくとあせるやうに歩行くのは、見る目に足もふらついて、背後から鐵棒で追立てらるゝ状がある。血の池、劍の山、白い犬、白い豚、狐、あられもなく、うろついて、さまよつて、畜生道のあはれが見えた。

自暴に手拭をたゝきつけた女さへあつた。

果は一團に成つたではないか。

五人の中に、稲の葉を唯一むすびただけで、顔の五面ある白い手足が、胴を一體にしてすくむと、薄月の波の影が、寂しい刺青を彼等に描く。……遠音の蟲も、聲に絲を引いて、はた織りつつ、膚に透る。……皆たゞ萎々と成つたのである。

「やあ、役者。」

「別嬪揃ひ。」

あたりに引上げた船の舷の蔭だの、大きな鮫番の背後から、三人ばかり村方の悪若い衆が、む



くむくと顯れた。

——扱は女たちは、停車場前の座に興行中の、旅藝人の一座であつた。

「いけどりだぞ。」

「選取り、つかみ取りよ。わは、は。」

「きものさ、あとで相談づくだえ。」

深夜の風が、大輪なる肉の五瓣の花片に颯と戦いだと思ふと、あの貝を投げた手をはじめ、ハツと飛ばす砂が黄色に散つた。また、くまに、透間あらせず手に手に投げた。

目潰しをくつた若い衆は、獸のやうに叫びながら、たゞ狂ひまはるばかりである。

「構ふものかね。宿まで八町足らずだよ——さあ、おいで。」

砂路を眞すぐに行く状は、霞に成り、千鳥に成り、鷺に成つた。——松原に、橋に、蘆に、垣根に、其の姿に、月がこの時光を浴びせて淡く白砂の亂る、色は、町もさながら、何處までも渚であつた。

波さへ青白く送るやうに、……逗子の濱の夜更である。

## 雨 ば け



あちこちに、然るべき門は見えるが、それも場末で、古土堀、やぶれ垣の、入曲つて長く續く屋敷町を、雨もよひの陰氣な暮方、その縣の令に事ふる相應の支那の官人が一人、従者を従へて通り懸つた。知音の法筵に列するためであつた。

……來かゝる途中に、大川が一筋流れる……其の下流のひよろ／＼とした——馬輿のもう通じない——細橋を渡り果てる頃、暮六つの鐘がゴーンと鳴つた。遠山の形が夕靄とともに近づいて、麓の影に暗く住む伏家の數々、小商する店には、早や佗しい灯が點れたが、此の小路にかゝると、樹立に深く、壁に潛んで、一燈の影も漏れずに寂しい。

前途を朦朧として過るものが見える。青牛に乗つて行く。……

小形の牛と言ふから、近頃青島から渡來して荷車を曳いて働くの、山の手でよく見掛ける、あの若僧ぐらゐるのだと思へば可い。……荷鞍にどろんとした桶の、一抱ほどのをつけて居る。……大なる雨笠を、すぼりとした合羽着た肩の、兩方かくれるばかり深く被つて、後向きにしよんぼりと濡れたやうに目前を行く。……とき／＼、

「とう、とう、とう／＼。」

と、間を置いては、低く口の裡で呟くが如くに呼んで行く。

私は此を讀んで、いきなり唐土の豆腐屋だと早合點をした。……處が然うでない。

「とう、とう、とう／＼。」

呼聲から、風體、恰好、紛れもない油屋で、あの揚ものの油を賣るのださうである。

「とう、とう、とう／＼。」

穴から泡を吹くやうな聲が、却つて、裏田圃へ抜けて變に響いた。

「こらく、片寄せ。え、退け／＼。」

威張る事にかけては、これが本場の支那の官人である。従者が式の如く叱り退けた。

「とう、とう、とう／＼。」

「やい、これ。——殿様のお通りだぞ。……」

笠さへ振向けもしなければ、青牛がまたうら枯草を踏む音も立てないで、のそりと歩む。

「とう、とう、とう／＼。」

こんな事は前例が嘗てない。勃然としていきり立つた従者が、つか／＼石垣を横に擦つて、脇

鞍に踏張つて、

「不埒ものめ。下郎。」



と怒鳴つて、仰ぎつきに張弦でドンと突いた。突いたが、鞍の上を及腰だから、力が足りない。荒く觸つたと言ふばかりで、その身体が揺れたとも見えないのに、ほんと、笠ぐるみ油賣の首が落ちて、落葉の上へ、ばさりと仰向けに轉げたのである。

「やあ」とは言つたが、無禮討御免のお國柄、それに何、たかが油賣の首なんぞ、ものの數ともしないのであつた。が、主従ともに一驚を吃したのは、其の首のない胴軀が、一煽り鞍に煽ると齊しく、青牛の脚が疾く成つて颯と駈出した事である。

ころげた首の、笠と一所に、ばた／＼と開く口より、眼球をくる／＼と廻して見据ゑて居た官人が、此の状を睨み据ゑて、

「奇怪ぢや、くせもの、それ、見届ける。」

と前に立つて追掛けると、もの一町とは隔たらない、石垣も土堀も、葎に路の曲角。突當りに大きな邸があつた。……其の門内へつツと入ると、真正面の玄關の右傍に、庭園に赴く木戸際に、古槐の大木が棟を蔽うて茂つて居た。枝の下を、首のない軀と牛は、ふと又歩を緩く、東海道松並木を行く状をしたが、間の宿の灯も見えず、ぼツと煙の如く消えたのであつた。

官人は少時茫然として門前の靄にゐんだ。

「角助。」

「はッ。」

「當家は、これ、齋藤道三の子孫でもあるかな。」

「はッ。」

「いやさ、入道道三の一族でもあらうかと言ふ事ぢや。」

「はッ、へ、い。」

「む、いや、分らずば可し。……一應檢べる。——とに角いそいで案内をせい。」

しかし故らに主人が立會ふほどの事ではない。その邸の三太夫が、やがて鉄を提げた爺やを従へて出て、一同槐の根を立圍んだ。地の少し窪みのあるあたりを掘るのに、一鉄、二鉄、三鉄までもなく、がばと崩れて五六尺、下に空洞が開いたと思へ。

べとりと一面青苔に成つて、缺釣瓶が一具、さゝくれ立つた朽目に、大きく生えて、鼠に黄を帯びた、手に餘るばかりの茸が一本。其の笠既に落ちたり、とあつて、傍にもこのそあれと説ふ。——こゝまで読んで、私は又慌てた。化けて角の生えた蛭蟪だと思つたが、然うでない。大なる蝦蟇が居た。……其の疣一つづ、堂門の釘かくしの如しと言ふので、巨さのほども思はれる。

蝦蟇即牛矣、菌即其人也。古釣瓶には、その槐の枝葉をしたゝり、幹を絞り、根に灌いで、大樹の津液が、木づたふ雨の如く、片濁りしつづ半ば澄んで、ひた／＼と湛へて居た。油即此



であつた。

呆れた人々の、目鼻の、眉とともに動くに似ず、けろりとした蝦蟆が、口で、鷹揚に宙に弧を描いて、

「とう。とう。とう。とう。とう。」

と鳴くにつれて、葺の軸が、ぶる／＼と動く、ぽんと言ふやうに釣瓶の籠が噓をした。同時に霧がむら／＼と立つて、空洞を塞ぎ、根を包み、幹を騰り、枝に靡いた、その霧が、忽ち梢から雫となり、門内に降りそ、いで、やがて小路一面の雨と成つたのである。

官人の、眞前に飛退いたのは、敢て怯えたのであるまい……衣帯の濡れるのを慎んだためであらう。

さて、三太夫が更めて禮して、送りつつ、木の葉落葉につままれた、門際の古井戸を覗かせた。覗くと、……

「御覽じまし、殿様。……あの輩が仕りまする悪戯と申しては——つい先日、雑水に此なる井戸を汲ませまするに水は底に深く映りまして、……釣瓶はくる／＼とその、まはりまするのに、如何にしても上らうといたしませぬ。希有ぢやと申して、邸内多人數が立出でまして、力を合せて、曳聲でぐいと曳きますとな……殿様。ほかんと上つて、二三人に、はずみで尻餅を搗かせな

がらに、アハ、と笑うた化ものがござりまする。笑ひ落ちに、すぐに井戸の中へ入り込みまする處を、おのれと、奴めの頭を掴みましたが、帽子だけ抜けて残りまして、其を、さらしものにしたしまする氣で生垣に引掛けて置きました。その帽子が、此の頃の雨つゞきに、何と御覽じまするやうに、恁の通り。……

と言つて指して見せたのが、雨に澤を帯びた、猪口葺に似た、ぶくりとした葺であつた。

やがて、此が知れると、月餘、里、小路に油を買つた、其の油好して、而して價の賤を怪んだ人々が、いや、驚くまい事か、鹽よ、楊枝よと大騒動。

然も、生命を傷つけたるものある事なし、と記してある。

私は此の話がすきである。

何うも嘘らしい。……

が、雨である。雨だ。雨が降る……寂しい川の流とともに、山家の里にびしょ／＼と降る、たそがれのしよぼ／＼雨、雨だ。しぐれが目にかぶ。……



傘



こゝを——廣坂通り、縣廳前と言つて、目貫の場所だけれど、颯と木がらしに落來る木の葉は、今ごろ東京に散りしきる、柳、すゞかけの葉のやうな町らしいものではない。すぐ界限は昔の家中、邸小路で、庭はおのゝ廣し、例の公園に近いから、其處に年經る密樹鬱林を吹拂つて、深山路の冬の風情を其のまゝに、舞ひかゝつて、ばらゝゝ亂れる。

風一條渡るごとに、此の大路を往來する人の數よりも繁く、空にも地にも吹散つて、空蟬のやうな檜、そめたる柞の葉が、はらゝゝと、灰色の軒を渡るかと思へば、吃驚するやうな朴の葉の大きなのが、小猪のやうに、がさゝがさと濡地を這つて行く。

櫨、漆の小さな紅が、夢の紅梅のやうに、ちらゝとまじるばかりで、今年はおみぢには些と早い。初霜もまだ置かなさうである。——で、此の風も、妙に生暖くて、そして、時々思ひ出すやうに時雨が來た。

——朝飯の後、少時して、私は傘を借りて旅宿を出た。其の時は、門の柳にも、松にも、前の小川の水の流とともに、音がして降つて居た。「旦那さん重たいでせうね。」と女中が言つたが、姿が優なためと、お買被り下すつては恥入る。さし手が小男で、春の低い處へ番傘の太い大いのに、

女中が同情をしたのである。成程大い。唯、柞を抱いたほどある。開けたり窄めたり、次手に化けたりもしさうな、煤色の此の古傘の、しかし轆轤のまはりに、輪にして藤の花を繞らしたが、墨描の葉も、藍色の枝も、はや冬ざれたのを、婆娑と翳して、件の流の板橋の破目を渡りかけた、外套を被た男は、栗鼠が葡萄棚を傳ふに似て居る。送出す女中を、ちよろりと見返つて、「地震よけに成るね、瓦が落ちてでも大丈夫だ。」と、情なや、うっかり臆病を顯すと、「あら、旦那さん、雪の用心に丈夫にしてあるのですよ。」と言つた。

まつたく、雪を凌ぐための嚴乗さである。私は忘れたのではない、敢て番傘には限らない、土地の女たちが半ば伊達に持つ蛇目傘さへ、骨の太さは皆同じである。

馴れないと、一廉荷に成る。半分は珍しく、面白さに、此を眞直に翳して、其處等の裏町、細小路をあつちこつち、格子戸に竹の子傘の雫を切つて、此頃とれさかる小鯛を賣る魚屋の、値が出來たか、以前に變らず紺前垂の眞田の紐から矢立を抜いて、起身で帳面をつける處だの、破門の片扉に半身で、御新造が鯛を買ふと、此方に、南瓜被りで菅笠のまゝ、大股に蹲み込んで、「しよッくしよッ、と銀色に青光る小鯛を數ふる状態のを、視めながら、歩行くうち、大粒な雨かと思へば、落葉で、もう小雨に成つて、大通りへ出たのであつたが。——

傘  
擦違ふほどでもなく、また寂しいほどでもない。三々五々に往かふ人たちに、ふと何心なく氣



が着くと、一人々々、傘の持ち方が……ハテナ不思議と言つて可い。

こゝに、露を厭ふとも見えない女房の、裾短に、紺の鯉口を着たのが、手を恠う横に突出して、傘の蜻蛉の糸を指に掛けて、ぶらりと宙に釣つて行くのが来た。その横を行く、勤人らしい洋服は、小脇から胸へ掛けて、傘の胴中を引挟んでてくと通る。轆轤を腰骨に押當て、柄を長く横すおかひに突出して行く職人がある。其の又蜻蛉と柄を両手に、胸前へ高く斜違に握つて、來やがれと、捻ぢて顛卷にしさうな若衆。皿まはしのやうに掌に立てた小僧が来る。引擔いだのは三人五人、言ふまでもない。……希有なのは肩にとんぼをつけて、柄を斜に矢大臣の如く突立てたのがある、此がいゝ年をさつしやつた親仁さんで。……雨はもとより、ふはくくと生ぬるい風に浮いて、傘はさしても翳さないでも可かつたのであるが、内端らしい娘さへ尋常に、柄をすぼめて膝につけて持つのではない。袖を開いて大道へ横さまに突つ張るのである。然うかと思ふと、制帽の學生の二人、肩と肩で並んだのは、一人が洋傘を疊んで、するくくと引摺つて、一方の持つた傘一つに相々傘で行くのがある。あとへ續いたおなじ學生たちは、「猿が鐵砲かついだやれ擔いだ。」と揃つて行く。在所から連立つて、ぞろくく出た婆さんの、お、辛度と、両手を腰へ、傘の両端を取つて、真中でとんく屈腰をたゝくのくに、連立つて、按摩の川渡りと云ふみえで、頸窪に横に背負つて、杖をついた爺どのは、元氣だと(木)の字に見えよう、とぼくくとして案山子の

形がある。恰もこれが一叢深き樹立の梢に、空に眞白な十字を掲げた天主教の會堂の前を迎るのを見たのも妙である。

申すまでもないが、一人として人間の横に這ふのもなければ、空に飛跳ねるものもない。傘ばかりは縦横無盡で、雲の中を怪しく落來る木の葉の中に入亂れて、異類異形の體がある。

この土地で、昔から魔所だと傳へる、鞍ヶ嶽、黒壁谷の巖頭に天狗が居て、傘の印を結んで、市中を搔擾すが如き趣があつた。

「あゝ、傘の大地震だ。」

私は柿の實のあかくと色づいた、岐路へ避けて入つて、うつかり呟いて、そしてひとりで苦笑した。

思ふまい……地方はのん氣なのである。

以前、私は東京へ來たてに、言つたやうな傘の持方をして、三代住んだ神田の叔父さんに引叱られた。

「江戸ぢやあ、そんな傘の持ちやうをしちやあ不可え、往來の邪魔に成る。」

いかにも以てお説の通り。そんなのは往來のさまたげにも成れば、電車の中でも宙ぶらりんにぶら下げて、揺れる度に振廻して、乗客の胸もつゝけば、頬も叩き、目を搔拂ふ、厄介な連中に



相違ない。

都會人は、傘の持かたに於て、一定の規律があつて、自然に謙遜の徳を備へて居る。然らざるものが不作法に大手を振る。——と言ふのだ。が、神田の叔父き、少し無理だ。此は傘が幅ツたくて、土性骨の太いために、もちおもつて扱ひかねるためである。

雪國だ。

焼原の住人が見ても、且つ同情すべきである。

なぞと言ふうちに、私も人を見ると、梢の柿を狙つて居さうな持ちやうをして居て、また一人で笑つた。

けれども、其の餘りに目について、荒れに荒れたる傘の状は、天狗のなせる業ではなくとも、少くとも黒雲のふるまひだつた事が後に分つた。

もう其のうちに、大分風が出て、悪くなま暖いのがどツツと吹く。鬼川と言ふ、稱は凄じいけれども、旅店の前の流のつゞきで、もと其の川べりを學校へ通つた可憐い思ひ出のある、一方土堀きりで寂しい小川の處へかゝると、此方も、持もりのした傘なりに、横ぶきに流の方へ吹つけられて、ぶら／＼歩行きには些と骨が折れ過ぎた。

さすがは城下だ。石段に、襟白粉のこまかに伸びた、島田髻の葱を洗ふ姿が見えるほどだから、

風に吹落されもしまいとは思つたが、すぐ宿の方へ引返した。

「お早いお戻り、……お歸りやす。」

「一寸、わすれものをしましたよ。」

半日、ぶらつきさうな様子で出たのが、ものの三十分と経たないから、少々極が悪いため、なぞと言つて、「返すよ」と傘を女中に渡して、玄關の、繪が雲に龍、彫が波に兎といふ衝立の裏へ入つて廊下を渡つた。

家内は植込の松の硝子にうつる、明障子に、姿見に向つて、一寸容子のい、圓髻に結つた髮結が鬢を撫でつけて居た處だつた。(註、容子のい、のは髮結で。)

餘計な事だが、しかし此も道中記の挿畫の一枚である。但し自畫だから、ひどく拙い。

いや、そんな事は何うでもいゝ。やがて、ごろんと寝轉んだ。足を揃へて思ふ状伸した處は、さながら傘を倒した形だ。これに搔卷が掛つた。贅澤な傘だ。

目の覺めた頃、電話が掛つたのを、家内が取次いで、好な御馴走をしますから晩においでなさいつて、と言ふ、私の従姉の家からである。

「雄ちゃんが電話に出ました。」

「あゝ、お婿さんか。——五音の調子は何うだい。」



これは従姉の惣領が、四五日のうちに、ある良家の娘と結婚する。——式もあらうと言ふので。……逗留の日取を延して、是非その披露目の席へ連るやうにと、相談を受けて居た處だから。「いま時の若い方に、誰が女に、お嫁さんごときに、胸をどきつかせる人があるもんですか。——お前さんぢやアあるまいし。」

「これは御挨拶だ。」

とゆひたての銀杏返に、背中を向けて寝返りを打つて、

「五音の調子は亂れないでも、陽気は些と狂つてるよ。それに大分風立つから、お光さん（従姉の名）はふさいで居るぜ。あの元氣な人だが、風吹と言ふと一も二もない、奥の佛間へ引込んで、夜具を引被つて寝るんだから可笑い。」

「然う、私たちの雷様の時のやうね。」

「不可いよ。船中——いや、道中にて、左様な事は申さぬものさ。」

しかし、悪いことを言當てた。

其の従妹の家へ行くのに、連立つて……雨は歇んで居たが、雲が暗いから、用心に件の藤の繪の番傘を一本だけ持つて出た。——裏町の魚屋のたききに、さうめん鮓と言ふ此の土地の白魚が霜の如くちよぼく溢れて、桶に、湯の鮓が押重つて雲の泡を吹く處は、朝夕、日中の時雨も、

もうやがて霞の時節で、雪に近い。

その癖、變にまた生暖く、黒雲は犀川の空に満ちた。白山はもとより、おなじみの醫王山、寶達ヶ峰、御前ヶ嶽、鞍ヶ嶽の尾も隠れ、片笠も見えないで、不氣味に、灰汁で墨を和へたやうなのが、鯨の如く累つて動いたが、いま時分、まさか（鳴る）なぞとは思はなかつた。

大通りへ出て、太神宮様へお参りした。——御手洗に預け申した、その番傘を小わきに、そこに軒を並べた飲食店をうそくと差覗いて、

「途中でも方々で見掛けたぜ。——到る處が天麩羅だ。——此の頃此地ぢやあ、ひどくすきに成つたものと見えるね。以前はなかつた事です……擧つて天麩羅を嗜む、これ何の兆ぞや。」

と皆まで言はせず、家内が袂を引いて、

「太神宮様で、説教は可笑いね。」

一言もない。元來天麩羅を驕るでもなし、何處と言つて案内をするでもないから、せめて、先刻見た往來の人の傘の奇觀さを、實地に説明をしようなどと思つたが、目立つほど傘を持つたものは、今はない。續々通るお勤人は、皆洋傘で、いづれも、ひけ時のお歴々だから失禮だと思つて黙つた。

いや果せる哉。従姉は、私たちが茶の間に入つたのを見ると、奥の佛間の襖を開けて、引かぶ



つたばさく髪で、頸脚のいゝ人が、肩を押すくめて憤つたやうに出て来た。

「やあ果せる哉……」

と、くすくす行くと、従姉は、眉も口も一所にしかめて、睨むやうに顔を見て、

「勝手にお笑ひなさい。」

それ切、串戯も言はず、七輪を茶の間の隅へ持出して、大鐵鍋を掛けながら、

「何うも、臺所を引くり返して亂暴ですけど、火の用心が可恐うござんしてね。……風の吹きま

す朝は、子供たちに辨當も持たせません、皆麵麩なんですの。」

と家内に話し、話し、板昆布を一枚、鳶の羽のやうに投込んだ。ふツツと煮立つ處へ、一升

饅から、たぶくと灌ぐ。

「酒しほだね、……あゝ、惜いなあ。」

「誰も飲せないとは申しません。——後でいくらでも差上げますから。」

と又邪慳に叱つて、

「何故でせうねえ、何處のでも、のみ手と言ふと、酒汐を惜しがりますのね。」

「意地が汚うございますこと。」

へッ、高慢な顔で煙草を吹かす。

薬味の葱の香が立つと、め笹に水を切つて置いた、雪のやうな魚の切身を煮た。——これが、

お約束の御馳走の、鱈であつた。

「姉さんのは焼いた方。——あなたのは、煮なくつては不可いから、その煮た方。……」

「鯛の尾頭つきだね。——御芳志千萬、忝く、……」

と反つた魚を睨みながら、フツと湯氣を吹いて鱈の汁を頂戴した。——藏の前の地袋をうしろ

に控へて、食卓臺で、熱燗で、いゝ男の雄ちゃんも加はつた。

「兄さん、兄さん、兄さん。」

俄然、お光さんが茶の間から、けたましく、地踏鞆を踏んで来て、

「はい、お熱いの。」

と、身体から揉出すやうに、うつくしく、忙しく、花火のやうな笑を溢して、

「あゝ、嬉しい。」

「何うしたの。」

と眞顔に成つて愕然とすると、雄ちゃんも、きよとんとした。

「風が止みましたよ、……」

と顔で掬ふやうに、私の顔を覗込んで、



「その、かアはアらしい——」

と、あゝ、氣味の悪い。前髪を暗く、おばけの眞似……

「……ごろ／＼様が鳴つて来たわよう。」

「え、」

「敵が取れた。——あゝ、嬉しい。」

ざざつと鉢前にそゞ雨の中に、土藏の奥の方で、ぐわうと吼る。

「海の、方からア、来ましたよ。」

鱈も、銚子もソレ背負つて行け、と私はぐたりとして横に倒れた。雨は一息づゝ強く成る。雷が續いて鳴つた。

雷鳴と、雨との中に、あらう事か、おほゝ、あはゝ、と従姉の笑ふ聲がすると、藏の中からどしんと投出した、——もう十一月だ、しまつてあるのは其の筈で——蚊帳の疊んだのを一つ枕にさせた。私は頭で噛りついた。

「おほゝ、ほ。」

もう一つ持出して、かゞつたまゝで脊中へ掛けた。私は引きしめた。……冷くつて、寒くつて、身ぶるひが出るが仕方がない。——までは可いが、尙ほ最う一張、これに綱をつけて、天井の釘

へ渡して、丁度倒れた奴の胸の上の見當の處へ、ざわ／＼ざわと釣上げた。

「兄さん、——御安心。」

何が安心、大な西瓜だ。いや、孤家の壓石だぞ。

「何うも……何とも、困つたお母さんだ。」

と、雄ちやんが、止むことを得ず手傳はされたのが、茶の間へ引退つて歎息をすると、中仕切りに立つて、従姉が覗き込んで、

「それで、男振さへよければ自來也なんだがね、惜い事……」

成程、三／＼りの古蚊帳は、影を蟠らせて、皆大なる蝦蟇である。……串戯どころか。私は血が冷え、膚粟立ち、地の底に領伏す氣がした。が、いつにない事、うと／＼した。一體三銚子ばかり立てつけて、既に陶然とした處だ。雷鳴もまだ遠かつた。且つは冬至を過ぎて居る。さしたる事もあるまいと思つた處へ——勇氣のほどの違い、従姉の綱手が頼もしい。惣領をはじめ兄弟たちも、女まじりに自若として居る。いくらか恐怖を薄めたらう。

傘

うと／＼しつ、東京で、地震の二日前の、あの可恐い中に、凄く艶だつた雷雨を思つた。——客が来て居た。客は話しながら、いつか蒲團を摺つて、身もだえをするやうに、薄羽織と一



所に袂を兩方、かはるゝ絞つて、腕を上げたり下げたり、帷子の膝を引張つたり、たくし上げたり、胸を開けて脇の下を煽いだり、手で額を拭いたり、見て居ても辛さうだ。いや、見られる方も苦しいほど蒸暑かつた。その人の辭して歸つた、午後二時半と言ふのに、入道雲のまだ白いうちから鳴出した。甚だ身勝手だが、その熱くて辛い客さへ歸すのではなかつたと思つた。底意地の悪い、執拗い、長い雷で、一雲辛うじてごろゝとや、空を過ぎたと思ふと、むくゝと湧出るやうに、ぐわらゝと又鳴出す。夜の十一時まで鳴り續いた。時には一息吐く間もあつたが、十分とは間を措かず轟き渡つた。その長い時の中、飯も食はず、茶も飲まず、煙草も吸へない。——お恥かしい話だけれど、家内とともに蚊帳ばかりを頼りにして、繼ぎかへ、さしたす線香の煙の濛々と黒い中に、搔卷を被つて手足を縮めて、へとゝに成つて、ぐつたりした。……夜の九時半頃がその絶頂で。——またこんな夕立に限つて、蒸すばかり、鳴るばかり、光るばかりで、いきつく露に草の濡るゝ、ほども降らなかつた雨が、忽ちどつと加つて、雷はためき、電光は蚊帳を刺通す。突伏して居る身體が、つかみ立てらるゝやうにわなゝいた。

格子戸が颯と開いた。

観音來り給ふと、夜具の襟に目を開いて蚊帳越しに透かす、とパツと光る。あと思ふ電の影に——電燈は用心のためスイッチを消して置く——光の浅葱に影を照して、眞黄色な女郎花の花が

土間の暗中に浮いた。その莖が、靡くやうに櫃の板に据ると、並んで、撓つたやうに、白地の浴衣のうしろむきに掛けた腰が見える。模様も帯も分らなかつた。——が藤紫の切が明く映つて、雫の滴りさうな黒髪を、てんじんに結つて居る。瓜核顔の、夕顔の花の傾く状にほのめいたのが、瞬く間を、又射返した電光に、蒼いばかり、横顔も頸も色が白い。おくれ毛も數へられた。

續けて五たびばかり、はたゝがみした。

「お上んなさい、お上んなさい、お入り下さい。」

と息を切つて、然も、その、よくもわからぬ女性にさへ、救を求めて呼んだのは、雨も、雷も、一度にひつそりとした後だつたのである。

蚊帳の外に、——女中が水の流るゝやうに、女郎花の濡枝を、一束もつて膝をついた。

「……お客様がおつしやいます——深川のものですが、大層不沙汰をいたしました。今日は、玉川へ誘はれましたから、道草に、咲きましたのを、お土産に、あのお目に掛けます。……少々遠方へ参らねばなりませんし、お暇乞にお目にかゝりたいのですけれど、吃驚して、不行儀に駈込みましたやうな、こんな夕立ですし……またひどく降りさうですから。……それに、ともだちがつれが、あの、大勢、辻に待つて居りますから、すぐに失禮をいたします。あの……くれぐれも——とおつしやつて。……」



女中は偉い、豪氣だ。……ちやんと大雷の中で取次いで、氣丈に口上をつたへた——私たちは、その間、人の歸るのも夢中で居た。

「お前さん。」

「うむ。」

と言つたばかりである。深川には、もう亡くなつたものの墓のほか、……さそくに然うした心當りの婦人はなかつたのである。

女郎花ばかり、色に出たが、うちはな吾木香も三本ばかり。——五草、六草……水引草の微な紅が、爪紅のやうに添つて居た。

わざと根やきをしないで活けた。そして白衣の觀世音の畫像を掛けた。

その翌々日、前日の雷が、一團、一塊に成つて、むらがり重なつたかと思ふ入道雲が、白に、薄鼠に、錆びた色のへりを取つて、可恐しく、霸王樹の如く辰巳の一天に聳えた。——地震であつた。

女郎花は、崩れた壁とともに枯れたのを、そのまゝにしてあつた。——此の土地へ來るにつけて、思ひついて、桐油紙に包んで提げた。菩提寺の土にするつもりであつた。

住職に手を借りてと、訪れたが、それは留守で、ハイカラに結つたのが、赤い蹴出しで、會釋

に出たから、何も言はずに卵塔の土を被せた。

それは、しかも昨日の午。

と、うとくして居た。

ぱち／＼ぱち／＼と凄い雨まじりの霰の音。うつゝが返つて目を開くとタンに、藏の網戸が青く映つた。

思はず、蚊帳を翳し、蚊帳を楯に、蚊帳を抱いて、ハツと起きる、と雷鳴とともに潛戸がカリリと開いた——商屋だが、店の土間に、颯と、女郎花が五本咲いた。……その莖から、枝から、葉から、黒髪の亂るゝやうに、美しい色の雨が流れた。

「おい、途方もない降だ。」

と、その真中に、駈込み状の傘を、ひろげたなりで突立つたのは、三男の十三の十坊である。藏の屋根に、飛上つたやうな雷は、臺所の屋根をぐわら／＼ぐわら／＼と暴れて行く。しかし、そのあとは、ひつたりと靜に成つた。

「……雷は絶え間なく轟き渡り、雨は車軸を流すのであります。兇漢は此の機に乗じて、貴婦人を奪はんといたします。しばらく畫面の御清觀を仰ぐであります。……タツタララ、タツタラ



ララ。」

と、膝まで、たくしあげた洋服の脛を、ちん／＼もが／＼と踊りながら、夜學がへりの、その十坊は雑巾で拭いて居る。

助かつた。茶の間も更めて陽氣に成つた。

私は熱い茶をのみながら、東京の……その雷雨の時の話をした。

信心家の従姉が、息を詰めたのは言ふまでもない。

「そんな事は、ありますまいがね。……今度の地震で、深川でなくなつた人が、何うかしたわけ  
で、此地へ歸りたくつて、まへじらせを、自分で悟つて、お頼みなすつたかも知れせんわね！  
—それとも、墓に居る人が、焼けることを知つて、草葉の蔭でも、遁げたのかも知れせんよ。」

「これ即ち、科學を超越したる不思議であります。……タツタラララ、タツタラララ。」

と蟹の脚のやうな突張つた大胡坐で、片手づかみに、金鏢と、木のパイプを、ちやんぽんに煙  
草を吹かせる。工業學校の三年生は、兄弟中の豪傑である。

「なま意氣な口を利いて……お前、未成年だからつてんぢやあないか。——巡查さんに、其の吸  
口を咎められたら、何と言ふんだ。……兄さん、呆れるぢやありませんか。——急にひどい雨に  
成つたつて、臆面のなさつたら、交番へ飛込んで、巡查さんに傘の世話をして貰つて來たんです

とつて。」

「それ、警官の職たるやだね……われ／＼人民を保護するのが。……」

「お黙り。そのパイプを叱られたら何うするんです。」

十坊は、胸を押し、頤を張つて、蛸の嘯くが如く、顔を皺だらけに眞仰向けに煙を吹した。

「衛生保健のため、此の器具を用ゐてですな。……深呼吸をするのであります、と、答ふるであ  
ります。第一巻の終り、……タツタラララ。——東京の小父さん。」

と、けろりとして、

「僕のいま借りて來た傘に、女郎花が描いてありますよ。」

と、澄して言つて、又けろりとした。

座は顔を見合せた。

「お巡查さんの曰くです——今此の派出所に、保護中の一婦人の所持した傘が爰にある。交番へ  
來て傘をかせと言つたのは、君がはじめてだから、試に、本職の一存を以て貸して遣ッ。が、今  
夜でなうても、明早朝は必ず返さんと不可んど。あゝん！と、そこで、……町、處、姓名、身分、  
學校をき、／＼、話したんですがね。かくの如き暗夜をですな、傘をすぼめて持つたま、どし  
や降りにか、はらず、それをさ、ないで、髪から裾まで雫を流し、うろ／＼と派出所の前を通る



……女郎花の花が、宙を傳ふやうに、ハツキリ見えた。美人で盛装して居るんぢや。裾模様かと思つたら傘の繪だ。と言つてね。さすがに常識を以てせざるを得ざる所の警官も、一種の奇蹟に打たれたらしく、獨り思ふにあきたらずしてか、僕に話しました。——狂女である。……話のうち、カーテンの奥で美人のすゝり泣く聲がしました。寢て居るのか、倒れて居るのか、足ばかりが板へ出て、紅い切れが血のやうに搦んで、眞白で、跣足でした。映畫は細い。悲歎に腦を打つて苦むやうに、つまさきが震ふであります。……」

「十坊、十坊、その傘を見せないか。」

と、お婿さんが沈んで言つた。

「ようし、きた。」

「あ、お待ち。——氣味が悪い。」

「私も凄、可憐いんですもの。」

と家内も落すやうに煙管を置く。

十坊は、てれたやうに、堅くなつて、ごし／＼頸窪を搔いて居た。

わづか一日の事である。——披露の席には、罷出る約束して——歸りしなに、私がさきへ取つて、番傘の藤の花を開いた。

よつて、他の女郎花の模様を確かめようとしたのである。

雨は歇んで居たが、空合だから、家内は別に借りて出た。

雄ちやんと、十三が電車まで送つて來た。豪傑の方は、空次第で、すぐにも遠走りに傘をかへ

すつもりで、借りたのを持つて先に立つたのである。

武藏ヶ辻と言ふので、夜更けた電車を待つた。

待つうちに、雨は、一しきり再び車軸を流した。

こゝに待合す人たちの、十二三人が一齊に、角の大問屋の、既に鎖した軒下に、雨を凌いだ、その傘の形は、澁も、油も、色こそかはれ、皆確と柄を両手に、廂さがりの俯向けに取つて、敵に向ふ楯の如く、槍ぶすまに似てそゞ雨に、張をば合せ、柄を揃ふる。……その中に、藤が搦んで、三つおいて、女郎花の蛇目傘が立つた。

颯と、生ぬるい風が強吹添ふと、電車のまだ來ないうちに、雨は小歇をした。

が、大粒なのが、ばら／＼とかかる。

「十坊、……その傘を一寸お見せよ。」

傘  
何故か、一人、傘をさしませず、杖にして、軒に立つたお婿さんが、仰々しいほど更つた聲を掛けて、線路へ出て、十坊のと持ちかへると、街燈に透しながら、恚うさし開いたが、次第に、



その轆轤深く顔を入れた。

私は衝と寄つた。たしかに女郎花の繪を見たらば、一寸、家内には憚つたが、十坊をすゝめても、狂女を見舞はうと思つたのである。

其時であつた。

「玉とかいて、あッ(玉)とかいてある。」

言が、女郎花に、雲をもれた星の色を青く添へると、パツと風が、旋風のやうなのが、空へ颯と巻取つた。青いとんぼが、ひら／＼と屋根を行く。

「やあ、馬鹿兄、何をする。」

驚いたのは十坊で、球のりの宙乗の如く飛上る拍子に、傘は地にバサツと落ちて、名にしおふ武藏ヶ辻の、辻をかなたへ、くる／＼と地を摺つて舞つて飛ぶ。

「嫁で夢中だ。しつかりしろい。」

と高足駄を踏みならしながら、

「タツタララララ。」

と素飛んで追つて行く。

待合せた人々は、や、や、と聲を掛けながら、いづれも、思はず傘の柄を丁と取つた。

「小父さん。」

と継るやうに、お婿さんが、悲痛な聲で、

「結婚はやめます、小父さん、僕は、玉と言ふくるとと、祕密に約束して居たんです。東京へ連れてつて下さい。小母さん——玉川へ身を投げます。」

もの狂はしい状であつた。……赤燈の電車が、黒雲に乗るやうに來た。——私は雄ちゃんを連れて乗つた。

駈戻つて、女郎花ばかり一束にかついだ状の、十坊の、泥田に篋鷺の立つたやうな形を見ながら、……赤電車と言ふがこゝらの景色にはそぐはない、燈の桃色の電車にたよつて、薄い電光の、次第に幽に成る影を、傘の藤を袖にして、旅宿に歸る。……

わたしの友だちが——此を話した。



駒  
の  
話



横町だけれど、私の家の裏庭とは、板塀一重、むかつて生垣で、中に細い露地一つだけだから、下屋の屋根は二間とは隔らない。其の横町の、二階家は——今はあき家に成つた——門も羽目も黒く塗つた處へ……御同様だが、より以上の古家で、窓も瓦も、恠う黒いほどだから、通稱を黒邸と言ふのの二階の窓、階下の濡縁、おなじく煤ぼつて黒い湯殿口に勝手次第、氣の向いたま、に、白い猫が、すつと顯れる。

野良猫のやうに、のそくと出たり、泥坊猫のやうに、ごそくと引込んだりするのぢやあない。女猫で、容子よく、すつと其の、顯れる。

眞白ではないが、茶の雑毛が殆ど目立たない處へ、事あつて身構へると、颯と靡いて、其の斑さへ隠れたのである。けれども、白とも、青とも言はないで、稱は駒であつた。——近所の女たちは、「駒ちゃん」と呼んだものである。

私の母は、島田鬚の若娘の時分には、大層猫がすきで、膝に抱いたり、襟を押つたりしたと言ふ。が、それと聞いてさへ嫉ましくらるで、くやしい。……もの心覺えてからは、内に飼猫は居なかつたし、小兒は犬と中が、で、馴染のない處へ、善惡譚だの、猫又七變化などと

言ふ草双紙で脅かされて、猫は繪の如く、お妾を噛つたり、婆に化けたり、人に祟るものと思つたのが、ならひと成つて、嫌よりは不氣味であつた。——猫ざらひが、品評をするのは當らないし、第一、世間で言ふ、人間の見る目と、あの連中の見る目とは、面の妍醜の標準が違ふさうであるが、女たちは、駒ちゃんは別品だ、別品だと言つた。猫の目と言ふ目も、いつも細りして、裂けた口も何處となくニヤリ……いや、何うも此では少し氣味が悪い、決して然うした意味ではない。——とに角色白の別品だ。

はじめ見た時分は、内の物干に、丸くなつて日南ぼつこをするのも、ぬつと伸びて塀の上を傳ふのも、實は、大禁物の蛇が、とぐろを巻いたり、蛭を打つたりするほどでない迄も、餘りいゝ氣持はしなかつた。——叱！畜生。長刀を廻すやうな手つきで、ぎやうさんに遠くから追立てると、「裏の家へ聞えますよ」と女たちに、たしなめられたものである。

そのうち、一年、夏のはじめ頃から可厭な病がはじまつて、大分流行の兆があつた。市内の其處此處に、病氣のぼやのやうな黒煙がパツと上つた。鼠が毒を銜へて放火をする。この火は水では消えない。皆肝を冷した。

金杉の屑屋の部落の中に燃えはじめた時——折から下根岸に住居のあつた、なき蕉園さんから音信のはしに——「近所に可厭な鼠が居ます。お近づきなさいませぬやうに。」——今でも其の言



葉の優しさを覚えて居る。……病氣の性質も、大抵これでお分りの事と思ふ……

其の時の、駒ちゃんの功績と言つたら。町内家並五軒七軒、鼠を驅ること麻の如しで、梁へ逃れるのを、衝と獵つて、引伏せて、ふツと咽喉を搔く状は、姿優なる巴女が、馬上に豪の敵と引組んで、ばらりと鎧の袖を揺る……とともに、敵手の體の、もんどり打つて、地に落ちる趣きがあつた。

其のたのもしさを想はれよ。

次手だから言はう。……蕉園さんの話だが、そのお祖母さんは、たしか京都の人で、猫すきであつた。春雨のころ、もう塞がうかといふ炬燵に、長閑にあたつて居ると、ふつくりと櫓に寝た京から連れて来た、年久しき飼猫が、ふと欠伸をして、退屈さうに（お、しんど）と人語をなしたと言ふのである。猫好きだから敢て妖とせず、また何の異状もなかつた。成程、猫が言ひさうに思はれる。

と成つて、其の都度ぐつたりと俯向いた。

それでも一度、そのうち女中が黒邸へ行つて、縁の下から、駒を抱いて来た事がある。

うちでは雀をかはいがつて、いつも餌をやる、と言ふほどでもないが、毎朝のやうに洗流しを撒いて遣る——ある時、チュ、チュと言ふ嬉しい聲も聞えないし、羽影が見えないのに、五十羽、

百羽、一齊にあさるやうに、立處に餌の消えることが屢々続いた。まきかへても直ぐに無く成る。一同氣をつけて見ると、鼠がかゝつたのである。臆病ものの雀は、ために恐をなして寄りつかないで、樋竹の中から、うらめしさうに覗いたり、電信の針線につらりと留つてかなしげに鳴いて居る。あちこち、飯粒の置場所をかへて見たが、雀の来る處へは、申すまでもない、鼠が出没自在なのである。

餌を運ぶ女中が憤つて、黒邸の駒を抱いて来た。……爾時は、二階の物干のわきの藁に米を置いた。

「番をして頂戴——お婆さん。」

あ、止ぬる哉——巴は尼になつてもう七十餘だ。番太郎の手がはりと成つた。それにしても、鼠を捕れと言ふ事か、案山子で番を頼むと言ふ……私は惻然とした。

餌は、そのまゝ、白く乾いた。さすがに鼠は出なかつた。が、雀の可恐がる事は、それ以上で、何にも成らない。……氣がついて苦笑をせざるものなし——駒は嚙ぞ人間を笑つたらう。いやもう笑ふ元氣もなかつたらう。——抱いて返す時にも干の上にした、か尾籠をして居たから。恥ぢてか、あはれにも、禮心で皿にもつた小魚は、面を背け、尾を垂れて食はなかつた。

黒邸には、大なる塚の如く、末路の猫籠れりと、昔の功績に何となく、人は爾く知りつつも、



しかも誰も、殆ど其の存在を忘れたのであつた。  
 冬の日早く暮れかゝり、雲暗く、しぐれ來らんとして、しばらく明るかつた。せはしく、しづかに、さみしかつた時、私は行きかゝつた奥の座敷で、一驚を吃して不意に膝をついた。どしん、みりくづしん、ぐわらくぐわら。キヤーわツと言ふ、女まじりの人聲で、合壁が、露地へ、上の空で飛出した。  
 駒の、仔猫が、埃箱の傍で、こぼれた萩の、蝶々に、からかつて居る處へ、可恐い獵犬が襲つて來たのである。これは、横町の某邸に飼はれた焦茶色の洋犬で、渾名を鬼鹿毛と言つた——つらも、大きさも殆ど耳を垂らした小づくりな馬に齊しい。——その頃、私の内に居た脊の高い、書生さんの顔を、いきなり舐め違つて、頭の上へ顔をのせた。……筆筒とすれくぐらるな横露地向の小窓を、だしぬけに覗くと、ぬいと女中部屋へ額に似て面が掛つた——大犬の、その慄悍なのが、まつしぐらに、地を摺つて、飛んで、仔猫を獵つたのださうである。  
 何處にて守つたか、誰も知らない。——瞬時に我が兒を口に銜へた老猫は、雲から駆け下つたやうに見えた。ト横に退いて、かはすトタンに、後脚で湯どのの戸を蹴つた、その力、其のはすみで、地から宙を二丈三尺、黒邸の下屋の屋根の真中へ颯と飛んだ。總の毛は一團、吹雪が空に翻るやうに見えた。

その中空の煽動に捲いて、故とか知らず、棒に渡した六七本——雨もよひで干ものはもう何家でも取込んであつたが——もの干棹を、ばらばらと播落すと、振亂れて前後に、いきつく間もなく落ちかゝる、數の棹を、下の鬼鹿毛は、刎ねくゞり、飛び抜けるのに、あたりかまはず、戸にも木戸にも、荒れ狂ふ如くぶつかつた。ぶつかりながら、尙ほ空に躍つて狙つたのである。兩方のその響きで、内も隣家も、向合つた平屋の格子戸も、戸は外れる、木戸は刎ねる、臺所の棚のものは、何家の皿小鉢もばた／＼と皆落ちころげた。

駒の威力ばかりでない。借家の微力も加はつて、串戯ではない、實際その震動は凄じかつた。私が見た時、獵犬は芥箱に、顔をついて喘いで、駒は臺に、仔猫をかばつて、スツクと爪を立てて居た。しぐれの雲に乗つたやうに、面は光つて凄かつた。  
 が、恐怖に腰の立たない仔猫を、かひぬしの家人の、屋根へ出て抱いた時、駒は霜の消えるやうに見えたのであつた。

しかも誰も、殆ど其の存在を忘れたのであつた。  
 冬の日早く暮れかゝり、雲暗く、しぐれ來らんとして、しばらく明るかつた。せはしく、しづかに、さみしかつた時、私は行きかゝつた奥の座敷で、一驚を吃して不意に膝をついた。どしん、みりくづしん、ぐわらくぐわら。キヤーわツと言ふ、女まじりの人聲で、合壁が、露地へ、上の空で飛出した。  
 駒の、仔猫が、埃箱の傍で、こぼれた萩の、蝶々に、からかつて居る處へ、可恐い獵犬が襲つて來たのである。これは、横町の某邸に飼はれた焦茶色の洋犬で、渾名を鬼鹿毛と言つた——つらも、大きさも殆ど耳を垂らした小づくりな馬に齊しい。——その頃、私の内に居た脊の高い、書生さんの顔を、いきなり舐め違つて、頭の上へ顔をのせた。……筆筒とすれくぐらるな横露地向の小窓を、だしぬけに覗くと、ぬいと女中部屋へ額に似て面が掛つた——大犬の、その慄悍なのが、まつしぐらに、地を摺つて、飛んで、仔猫を獵つたのださうである。  
 何處にて守つたか、誰も知らない。——瞬時に我が兒を口に銜へた老猫は、雲から駆け下つたやうに見えた。ト横に退いて、かはすトタンに、後脚で湯どのの戸を蹴つた、その力、其のはすみで、地から宙を二丈三尺、黒邸の下屋の屋根の真中へ颯と飛んだ。總の毛は一團、吹雪が空に翻るやうに見えた。



小春の狐



朝——此の湖の名ぶつと聞く、蜆の汁で。……爛をさせるのも面倒だから、バスケットの中へ持参のウイスキーを一口。蜆汁にウイスキーでは、些と取合せが妙だが、それも旅らしい。……い、天気で、暖かかつたけれども、北國の事だから、厚い外套にくるまつて、そして温泉宿を出た。

戸外の廣場の一廓、總湯の前には、火の見の階子が、高く初冬の空を抽いて、そこに、うら枯れつつも、大樹の柳の、しつとりと靜に枝垂れたのは、「火事なんかありません。」と言ひさうである。

横路地から、すぐに見渡さるゝ、汀の蘆の中に舳が見え、艦が隠れて、葉越葉末に、船頭の形が穂を戦がして、其の船の胴に動いて居る。が、あの鐵鏈の音を聞け。印半纏の威勢のいゝのでなく、田船を漕ぐお百姓らしい、もつさりとした布子のなりだけれども、船大工かも知れない、カーン／＼と打つ鎚が、一面の湖の北の天なる、雪の山の頂に響いて、その間々に、

「これは三保の松原に、伯良と申す漁夫にて候。萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて晴れたり……」

と謠ふのが、遠いが手に取るやうに聞えた。——船大工が謠を唄ふ——一寸餘所にはない氣色だ。……剩へ、地震の都から、とぼんとして落ちて來たものの目には、まるで別なる乾坤である。脊の伸びたのが枯交り、疎に成つて、蘆が續く……傍の木納屋、苦屋の袖には、しをらしく嫁菜の花が咲残る。……あの戸口には、羽衣を奪はれた素裸の天女が、手鍋を提げて、其の男のために苦勞しさうにさへ思はれた。

「これなる松にうつくしき衣掛れり、寄りて見れば色香妙にして……」  
と謠つて居る。木納屋の傍は茶畑で、眞中に朱を輝かした柿の樹がのどかに立つ。枝に渡して、ほした大根のかけ紐に青貝ほどの小朝顔が縋つて咲いて、つるの下に朝霜の焚火の残つたやうな鶏頭が幽に燃えて居る。其の陽だまりは、山靈に心あつて、一封のもみぢの音信を投げた、玉章のやうに見えた。

狐の春小

里はもみぢにまた早い。  
露地が、遠目鏡を覗く狀に扇形に展けて視められる。湖と、船大工と、幻の天女と、描ける玉章を搔亂すやうで、近く歩を入るゝには惜いほどだつたから……



私は――

(これは城崎關彌と言ふ、筆者の友だちが話したのである。)

――道をかへて、たとへば、宿の座敷から湖の向うにほんのりと、薄霧に包まれた、白砂の小松山の方に向つたのである。

小店の障子に貼紙して、

(今日より昆布まきあり候)

……のんびりとしたものだ。口上が嬉しかつたが、これから漫歩と言ふのに、こぶ巻は困る。張出しの駄菓子に並んで、箆に柿が並べてある。これなら袂にも入らう。「あり候」に挨拶の心得で、

「おかみさん、此の柿は……」

天井裏の蕃椒は眞赤だが、薄暗い納戸から、いぼ尻まきの顔を出して、

「其の柿かね。へい、食べられましない。」

「はあ？」

「まだ澁が抜けねえだでね。」

「はあ、ではいつ頃食べられます。」

きく奴も、聞く奴だが、

「早うて、……來月の今頃だあねえ。」

「成程。」

まつたく山家はのん氣だ。つい目と鼻のさきには、化粧煉瓦で、露臺と言ふのが建つて居る。別館、或は新築と稱して、湯宿一軒に西洋づくりの一部は、なくては成らないやうにして居る盛場でありながら。

「お邪魔をしました。」

「よう、おいで。」

また、をかした事がある。……くどいと不可い。道具だてはしないが、硝子戸を引きめぐらした、い、かげんハイカラな雜貨店が、細道にかゝる取着の角にあつた。私は靴だ。宿の貸下駄で出て來たが、あを桐の二本齒で緒が弛んで、がたくり、がたくりと歩行きにくい。此店で草履を見つけたから入つたが、小兒のうち覺えた、こんな店で賣つて居る竹の皮、藁の草履などは一足もない。極く雜なのでも裏つきで、鼻緒が流行のいちまつと洒落れて居る。いや何うも……柿の澁は一月半おくれでも、草履は駄足で時流に追着く。

「これを貰ひますよ。」



店には、丁度適齡前の次男坊と言つた若いのが、もこくの羽織を着て、のつそりと立つて居た。

「貰つて穿きますよ。」

と断つて……早速ながら穿替へた、——誰も、背負つて行く奴もないものだが、手一つ出すでもなし、口を利くでもなし、唯にやくと笑つて見て居るから、勢ひ念を入れなければならなかつたので……

「お幾干。」

「分りませんなあ。」

「誰かに聞いてくれませんか。」

若いのは、依然としてにやくと、

「誰も今居らんでね……」

「ぢやあ歸途に上げませう。ぢき其處の宿に泊つたものです。」

「へい、大きに——」

まつたく何うものんびりとしたものだ。私は何かの道中記の挿繪に、土手の薄に野茨の實がこぼれた中に、折敷に栗を鹽尻に積んで三つばかり。細竹に筒をさして、四もんと、四つ、錢の形

を描き入れて、傍に草鞋まで並べた、山路の景色を思出した。

二

「此の葦は何と言ひます。」

山沿の根笹に小流が走る。一方は、日當の背戸を横手に取つて、次第疎に藁屋がある、中に半農——此の湯に漁つて活計とするものは、三百人を越すと聞くから、或は半漁師——少しばかり商ひもする——藁屋草履は、ふかし芋と此の店に並べてあつた——村はづれの軒を道へ出て、そけ髪で、紺の筒袖を上被にした古女房が立つて、小さな箆に、眞黄色な葦を装つたのを、恠う覗いて居る。と箆を手にして、服装は見すばらしく、顔も襷れ、髪は銀杏返が亂れて居るが、毛の艶は濡れたやうな、姿のやさしい、色の白い二十あまりの女がイむ。

葦は軸を上にして、うつむけに、ちよぼくと並べてあつた。

實は——前年一度この温泉に宿つた時、矢張り朝のうち、……其の時は町の方を歩行いて、通りの煮染屋の戸口に、手拭を頸に菅笠を被つた……此のあたり濱から出る女の魚賣が、天秤を下した處に行きかゝつて、鮮しい雑魚に添へて、つまと云つた形で、おなじ此の葦を箆に装つたの



を見た事があつたのである。

銀杏の葉ばかりの鰈が、黒い尾でびち／＼と跳ねる。車蝦の小蝦は、餛飩に重つて萌葱の脚をびんと跳ねる。魴鱒の鱗は虹を刻み、飯鮎の紫は五つばかり、断れた雲のやうにふら／＼する……こち、めばる、青、鼠、樺色の其の小魚の色に照映えて、黄なる葦は美しかった。

山國に育つたから、學問の上の知識はないが——葦の名の十やら十五は知つて居る。が、それはまだ見た事がなかつた。……それに、私は妙に葦が好きである。……覗込んで何と言ひますかと聞くと「霜こしや」と言つた。「は、あ、霜こし。」——十一月初旬で——松葦はもとより、しめぢの類にも時節は些と寒過ぎる。……そこへ出盛る葦らしいから、霜を越すと意味か、それとも此の葦が生えると霜が降る……霜を起すと言ふのかと、其の時、考ふる隙もあらせず、「旦那さん何うですね。」とその魚賣が策をひよいと突きつけると、煮染屋の女房が、づんぐり横肥りに肥つた癖に、口の軽い剽軽もので、

「買うて遣らさい。旦那さん、酒の肴に……は、は、は、そりやおいしい、猪の味や。」と大口を開けて笑つた。——紳士淑女の方々に高い聲では申兼ねるが、猪は此のあたりの方言で、……お察しに任せたい。唄で覺えた。

薬師山から湯宿を見れば、し、が髪結て身をやつす。

否……と言つたばかりで、外に見當は付かない。……私は其の時は前夜着いた電車の停車場の方へ遁足に急いだつけが——笑ふものは笑へ。——そよぐ風よりも、湖の蒼い水が、蘆の葉こしにすら／＼と渡つて、おろした荷の、その小魚にも、葦にも颯とかゝる、霜こしの黄茸の風情が忘れられない。皆とは言はぬが、再び此の温泉に遊んだのも、半ば此の葦に興じたのであつた。——ほゞ心得た名だけけれど、したいものに近づくと、あらためて、いま聞いたのである。

「此の葦は何と言ひます。」

何が何でも、一方は人の内室である、他は淑女たるに間違ひない。——其の眞中へ顔を入れたのは、考へると無作法千萬で、都會だと、これ交番で叱られる。

「霜こしやがね。」と買手の古女房が言つた。

「綺麗だね。」

と思はず言つた。近優りする若い女の容色に打たれて、私は知らず目を外した。

「此方は、」

と、片隅に三つばかり。此の方は笠を上にした茶褐色で、霜こしの黄なるに對して、女郎花の



根にこぼれた、茨の枯葉のやうなのを、——爰に二人たつた渠等女たちに、フト思ひ較べながら指すと、

「かつば。」

と語音の調子もある……口から吹飛ばすやうに、ぶつきらぼうに古女房が答へた。

「あゝ、かつば。」

「ほゝゝ。」

かつばとかつばが顔合せをしたから、若い女は、うすよごれたが姉さんかぶり、茶摘、桑摘む繪の風情の、手拭の口に笑をこぼして、

「あの、川に居ります可憐いものではありませんの、雨の降る時にな、これから着ますな、あの色に似て居りますから。」

「そんで幾干やな。」

古女房は委細構はず、箆の縁に指を掛けた。

「然うですな、此でな、十銭下さいまし。」

「どえらい事や。」

と、しよぼくした目を睜つた。睨むやうに顔を視めながら、

「高いがな——三銭や、えつと氣張つて。……三銭が相當や。」

「まあ、」

「三銭にさつせえよ。——お前もな、青草ものの商賣や。お客から祝儀とか貰ふやうには行かんぞな。」

「でも、」

と葦が映す影はないのに、女の臉はほんのりする。

安値いものだ。……私は、その言ひ値に買はうと思つて、聲を掛けようとしたが、隙がない。

女が手を離すのと、箆を引手繰るのと一所で、古女房はすたくと土間へ入つて行く。

私は腕組をして其處を離れた。

以前、私たちが、草鞋に手鎌、腰兵糧と言ふものゝ結末で、朝くらいうちから出掛けて、山々谷々を狩つても、見た數ほどの葦を狩り得た驗は餘りない。

たつた三銭——氣の毒らしい。

「御免なして。」

と背後から、跫音を立てず靜に來て、早や一方は窪地の蘆の、片路の山の根を摺違ひ、慎ましやかに前へ通る、すり切草履に踵の霜。



「あゝ、姉さん。」  
私はうつかりと聲を掛けた。

三

「——旦那さん、その蟲は構うた事には叶ひませんわ。——煩うてな……」

もの言もや、打解けて、おくれ毛を撫でながら、

「ほつとお通りなさいますと、ひとりでに離れます。」

「随分居るね、……此は何と言ふ蟲なんだね。」

「東京には居りませんの。」

「いや、雨上りの日當りには、鉢前などに出はするがね。こんなに居やしないやうだ。よくも氣

をつけはしないけれど、……(しやうく)より最と小さくつて煙のやうだね。……また此處にも

一團に成つて居る。何と言ふ蟲だらう。」

「太郎蟲と言ひますか、米搗蟲と言ふんですか、どつちかでございます。小さな兒が、此の蟲

を見ますとな、旦那さん……」

と、言が途絶えた。

「小さな兒が、此の蟲を見ると……」

「あの……」

「何うするんです。」

「唄をうたうて囃しますの。」

「何と言つて……其の唄は？」

「極が悪うございますわ……(太郎は米搗き、次郎は夕な、夕な)……薄暮合には、よけい澤山

飛びますの。」

……思出した。故郷の町は寂しく、時雨の晴間に、私たちも矢張り唄つた。

「仲よくしませう、さからはないで。」

私はちよつかいを出すやうに、面を拂ひ、耳を拂ひ、頭を拂ひ、袖を拂つた。茶番の最明寺と

ののやうな形を、更めて靜に歩行いた。——眞一文字の日あたりで、暖かさ過ぎるので、脱いだ

外套は、其の女が持つてくれた。——歩行きながら、

「……私は蟲と同じ名だから。」

しかし、此は、蟲にくらべて謙遜した意味ではない。實は太郎を、浦島の子に擬へて、潛に思

ひ上つた沙汰なのであつた。



湖を遙に、一廓、彩色した龍の鱗の如き、湯宿々々の、壁、柱、蔓を中に隔てて、いまは鐵鎚の音、諺の聲も聞えないが、出崎の洲の端に、ぼつりと、烏帽子の轉がつた形に成つて、あの船も、船大工も見える。木納屋の苫屋は、さながらその素袍の袖である。

——今しがた、此の女が、細道をすれ違つた時、草に敷いた葉を残した箒を片手に、行く姿に、ふとその手鍋提げた下界の天女の佛を認めたのである。そらろに聲掛けて、「あの、茸を、……三錢に賣つたのか。」とはじめ聞いた。えんぶだごんの價値でも説く事か、天女に對して、三錢也を口にする。……さもしいやうだが、對手が私だから仕方がない。「え、」と言ふのに押被せて、「馬鹿々々しく安いではないか。」と義憤を起すと、せめて言ひねの半分には買つて貰ひたかつたのだけれど、「旦那さんが見てであつたしな。……」と何か、私に對して、値の押問答をするのが極が悪くもあつたらしい口振で。……「失禮だが、世帯の足に成りますか。」ときくと、そのつもりではあつたけれど、まるで足りない。煩つて居なされる母さんの本復を祈つて願掛けする、「お稻荷様のお賽錢に。」と、少しあれたが、しなやかな白い指を、縞目の崩れた晝夜帯へ挟んだのに、さみしい財布がうこん色に、撥袋とも見えす挾つて、腰帯ばかりが紅であつた。「姉さんの言ひ値ほどは、お手間を上げます。あの松原は松露があると、宿で聞いて、……客はたて込む、女中は

忙しいし、……一人で出て来たが覺束ない。次手に、いまの(霜こし)のありさうな處へ案内して、一つでも二つでも取らして下さい、……私は茸狩が大好き。——」と言つて、言ふうちに我ながら思入つて、感激した。

はかない戀の思出がある。

もう疾に、餘所の歴きとした奥方だが、その私より年上の娘さんの頃、秋の山遊びをかねた茸狩に連立つた。男、女たちも大勢だつた。茸狩に綺羅は要らないが、山深く分入るのではない。重箱を持參で莫産に毛氈を敷くのだから、いづれも身ぎれいに装つた。中に、襟垢のついた見すほらしい、母のない兒の手を、娘さん——そのひとは、厭はしげもなく、親しく曳いて坂を上つたのである。衣の香に包まれて、藤紫の雲の裡に、何も見えぬ。冷いが、時めくばかり、優しさか頬に觸れる袖の上に、月影のやうな青地の帯の輝くのをみつつ、心も空に山路を辿つた。やがて皆、谷々、峰々に散つて茸を求めた。かよわい其の人の、一人、毛氈に端坐して、城の見ゆる町を遙に、開いた丘に、少しのぼせて、羽織を脱いで、蒔繪の重に片袖を掛けて、ほつと憩らつたのを見て、少年は谷に下りた。が、何を祕さう。その人のいま居る背後に、一本の松は、我がなき母の塚であつた。



向つた丘に、もみぢの中に、晝の月、虚空に澄んで、月天の御堂があつた。——幼い私は、人界の茸を忘れて、草がくれに、偏に世にも美しい人の姿を仰いで居た。

辨當に集つた。吸筒の酒も開かれた。「關ちゃん——關ちゃん——」私の名を、——誰も呼ぶもののないのに、その人が優しく呼んだ。刺すよと知りつつも、引つかんで聲を堪へた、茨の枝に胸のうづくばかりなのを尙ほ忍んだ——これをほかにしては、最うきこえまい……母の呼ぶと思ふ、なつかしい聲を、いま一度、もう一度、くりかへして聞きたかつたからであつた。「打棄つて置け、もう、食ひに出て来る。」私は傍の男たちの、しか言ふのさへ聞える近まにかくれたのである。草を嚙んだ。草には露、目には涙、絶る土にもしとくと、もみぢを映す絲のやうな紅の清水が流れた。「關ちゃん——關ちゃんや——」澄み透つた空もや、翳る……もの案じに聲も曇るよ、と思ふと、その人は、たけだちよく、高尚に、すらりと立つた。——此の時、日月を外にして、其丘に、氣高く立つたのは、其人唯一人であつた。草に絶つて泣いた蟲が、いまは堪らず蟋蟀のやうに飛出すと、するくと絹の音、颯と留南奇の香で、もの靜なる人なれば、せき心にも亂れずに、衝と白足袋で靴を這つて肩を抱いて、「まあ、可かつた、怪我をなさりはしないかと姉さんは心配しました。」少年はあつい涙を知つた。

やがて、世の状とて、絶えて其の人の影を見る事の出來ずなつてから、心も魂もたゞ憧憬に、

家さへ、町さへ、霧の中を、夢のやうに徜徉つた。——故郷の大通りの辻に、老舗の書店の軒に、土地の新聞を、日毎に額面に挿んで掲げた。表三の面上段に、繪入の續きもののあるのを、ぼんやりと目で見ると、さきの運びは分らないが、丁と思合つた若い男女が、山に茸狩をする場面である。私は一目見て顔がほてり、胸が躍つた。——題も忘つた、いまは臆氣であるから何も言ふまい。……その戀人同士の、人目のあるため、左右の谷へ、わかれ々に狩入つたのが、ものに隔てられ、巖に遮られ、樹に包まれ、兇漢に襲はれ、獸に脅かされ、魔に誘はれなどして、日は暗し、……次第に路を隔てつつ、恚くて兩方でのちの限り名を呼び合ふのである。一句、一句、會話に、聲に——がある……がある……が重なる。——私は夜も寝られないまで、翌日の日を待ちあぐみ、日毎に其の新聞の前に立つて讀み耽つた。が、三日、五日、六日、七日に成つても、まだその二人は谷と谷を隔てて居る。……も、——も、邪魔なやうで焦つたい。が、しかしその一つ一つが、岬々たる巖、森とした樹立に見えた。さへ深く刻んだ谷に見えた。……赤新聞と言ふのは唯今でも何處かにある……土地の、その新聞は紙が青かつた。それが澄渡つた秋深き空のやうで、文字は一つ、もみぢであつた。作中の娘は、わが戀人で、そして、とぼんと立つて讀むものは小さな茸のやうに思はれた。——石に成つた戀がある。少年は茸に成つた。「關彌。」あ、勿體ない。……餘りの様子を、案じ案じ捜しに出た父に、どんと背中を敲かれて、



ハツと思つた私は、新聞の中から、天狗の翼をこぼれたやうにぼかんと落ちて、世に返つて、往來の人を見、車を見、且つ屋根越に遠く我が家の町を見た。——  
なつかしき茸狩よ。

二十年あまり、恚くてその後、茸狩らしい真似をさへする機会がなかつたのであつた。

「……おともしますわ。でも、大勢で取りますから、茸があればいゝんですけど……」

湯の町の女は、先に立つて導いた。……

湖のなぐれに道を廻ると、松山へ續く峻らしいのは、ほかくと土が白い。草のみぢを、嫁菜のおくれ咲が彩つて、枯蘆に陽が透通る。……その中を、飛交ふのは、琅玕のやうな蟲であつた。

一つ、別に、此の暇を挟んで、大なる瀉が湧いたやうに、刈田を沈め、鳩を浮かせたのは一昨日の夜の暴風雨の餘殘と聞いた。蘆の穂に、橋がかゝると渡つたのは、横に流るゝ川筋を、一つらに渺々と汐が満ちたのである。水は光る。

橋の袂にも、蘆の上にも、隨所に、米つき蟲は陽炎の如くに舞つて、むら／＼むらと下へ巻き下つては、トンと上つて、むら／＼と又舞ひさがる。

一筋の道は、湖の只中を霞の渡るやうに思はれた。

汽車に乗つて、がた／＼来て、一泊幾千の浦島に取つて見よ、此の姫君さへ僧越である。

「眞個に太郎と言ひます、太郎ですよ。——姉さんの名は？……」

「……………」

「姉さんの名は？……」

女は幾度も口籠りながら、手拭の端を俯目にくはへて、

「浪路。……………」

と言つた。

——と言ふのである。……讀者諸君、女の名は浪路ださうです。

#### 四

あれに、翁が一人見える。

白砂の小山の畦道に、菜畑の菜よりも暖かさうな、おのが影法師を、われと慰むやうに、太い杖に片手づきしては、腰を休め／＼近づいたのを見、見ると、大黒頭巾に似た、饅頭形の黄なる帽子を頂き、袖なしの羽織を、ほかりと着込んで、腰に毛巾着を覗かせた……片手に網のついた番を下げ、ちん／＼端折の古足袋に、藁草履を穿いて居る。



「少々、ものを伺ひます。」

ゆるい、はけ水の小流の、一段ちよろ／＼と落口を差覗いて、その翁の、又一息憩らうた杖に寄つて、私は言つた。

翁は、頭なりに黄帽子を仰向け、髯のない圓顔の、鼻の皺深く、すぐにむく／＼と、日向に白い唇を動かして、

「此の、私がいま来た、此の縦筋を真直ぐに、づい／＼と行かつしやると、松原について畑を横に曲る處があるでの。……其を何處までも行かせると、沼があつての。その、すぼんだ處に、土橋が一つ架つて居るわい。——それ／＼、此の見當ぢや。」

と、引立てるやうに、片手で杖を上げて、釣竿を撓めるが如く松の梢をさした。

「ぢやがの。」

と頭を緩く横に掉つて、

「それをば渡つては成りませぬぞ。(と強く言つて)……渡らずと、橋の詰をの、些と後へ戻るやうなれど、左へ取つて、小高い處を上らつしやれ。其處が尋ねる實盛塚ぢやわい。」

と杖を直す。

安宅の關の古蹟とともに、實盛塚は名所と聞く。……が、私は今それをたづねるのではなかつ

た。道すがら、既に路傍の松山を二處ばかり探したが、浪路がいぢらしいほど氣を揉むばかりで、茸も松露も、似た形さへなかつたので、獲ものを人に問ふもをかしいが、且は所在なさに、連をさし置いて、いきなり聲を掛けたのであつたが。

「いゝえ、實盛塚へは——行かうか何うしようかと思つて居るので、……實はおたづね申しましたのは。」

「ほん、ほん、それでは、此ぢやらうの。」

と片手の番を動かすと、ひた／＼と音がして、ひらりと腹を翻した魚の金色の鱗が光つた。

「見事な鯉ですね。」

「いや／＼、此は鮒ぢやわい。さて鮒ぢやがの……姉さんと連立たつせえた、こなたの様子で見ればや。」

と鼻の下を伸して、にやりとした。

思はず、其の言に連れて振り返ると、つれの浪路は、尾花で姿を隠すやうに、私の外套で顔を横に蔽ひながら、髪をうつむけに成つて居た。湖の小波が誘ふやうに、雪なす足の指の、ぶる／＼と震へるのが見えて、肩も袖も、其の尾花に靡く。……手につまさぐるのは、真紅の茨の實で、その連る紅玉が、手首に珊瑚の珠數に見えた。



「ほん、ほん。こなたは、これ。(や、爺い……其の鮒をば俺に譲れ。)と、姉さんと二人して、湯に放いて、放生會をさつしやりたさうな人相ぢやがいの、ほん、ほん。おは、おは。」  
と笑ひながら、ちよろ／＼瀧に、番をぼちやんとつけると、背を黒く鮒が躍つて、水音とともに鱈が鳴つた。

「憂慮をさつしやるな。割いて爺の口に啖はうではない。——此は稻荷殿へお供物に獻するぢや。お目に掛けましての上は、水に放すわい。いと。」  
と寄せた杖が肩を抽いて、背を圓く流を覗いた。

「此の魚は強いぞ。……心配をさつしやるな。」

「お爺さん、失禮ですが、水と山と違ひました。」

私も笑つた。

「茸だの、松露だのを些とばかり取りたいのですが、霜こしなんぞは、何の邊にあるでせう。御存じはありませんか。」

「ほん、ほん。」

と黄饅頭を、點頭のまゝに動かして、

「茸——松露——それなら探さねば爺にかて分らぬがいやい。おは、姉さんは土地の人ぢや。」

若いばつちりとした目は、爺などより明かぢや。よう探して貰はつしやい。」

「これはお隙づひえ、失禮しました。」

「いや、何の嵩高な……」

「御免。」

「静にござれい。——よう遊べ。」

「何うかしたか、——姉さん、何うした。」

「あ、可恐い。……勿體ないやうで、ありがたいやうで、あ、可恐うございましたわ。」

「……………」

「いまのは、山のお稻荷様か、湯の龍神様でおいでなさいませう。風の無い、うら／＼かな、こんな時にはな、よく此の邊をおあるきなさいますさうですから。」

いま番を引上げた、水の音はまだ響くの、翁は、太郎蟲、米搗蟲の霧のあなたに、影に成つて、のびあがると、日南の背も、もう見えぬ。

「しかし、様子は、霜こしの黄茸が化けて出たやうだつたぜ。」

「あれ、もつたいない。……旦那さん、あなた……」



「わ、何ぢやい、これは。」

「霜こし、黄い茸。……あは、こんなば、茸を、何の事ぢやい。」

「何が松露や。ほれ、こりや、破ると、中が眞黒けで、うじやくと蛆のやうな筋のある（狐の茸丸）ぢやがいの。」

「旦那、眉毛に唾なとつけつしやれい。」

「えらう、女狐に魅まれたなあ。」

「これ、此の合羽占地茸はな、野郎の鼻毛が伸びたのぢやぞいな。」

「戻道。」

橋で、ぐるりと私たちを取巻いたのは、あまのじやくを訛つたか、「じゃあま。」と言ひ、

「おんじや。」と稱へ、「阿婆。」と呼べる、濱方屈竟の阿婆摺媽々。町を一なめにする魚賣の阿婆

徒で。朝商賣の歸りがけ、荷も天秤棒も、腰とともに大跨に振つて來た三人づれが、蘆の横川に

か、つたその橋で、私の提げた策に集つて、口々に喚いて囃した。その或ものは霜こしを指でつ

ついた。或ものは松露をへし破つて、チエツと言つて水に棄てた。

「ほれ、眞個の霜こしを見さつしやい。此ぢやがいの。」

と尻とともに天秤棒を引傾げて、私の目の前に揺り出した。成程違ふ。

「松露とは、一寸、こんなものぢや。」

と上荷の策を、一人が敲いて、

「ぼんとして、ふんと、それ、香しかる。」

成程違ふ。

「私の方には、ほりたての芋が残つた。旦那が見たら蛸ぢやるね。」

「背中を一つ、ぶん撲つて進じようか。」

「ば、茸持つて、お、穢や。」

「それを食べたたら、肥料桶が、早桶に成つて即死ぢやぞの、ペツペツペツ。」

私に茫然とした。

浪路は、と見ると、悄然と身をすぼめて首垂る。

「あ、きみたち、阿媽、しばらく……」

如何にも、唯今申さる、通り、較べては、玉と石で、まるで違ふ。が、似て非なるにせよ、毒

にせよ。此をさへ手に狩るまでの、こゝに連れだつ、此の優しい女の心づかひを知つてるか。

——あれから菜畑を縫ひながら、更に松山の松の中へ入つたが、山に山を重ね、砂に砂、窪地



の谷を渡つても、餘りきれいで……たまく落ちこぼれた松葉のほかには、散敷いた木の葉もなかつた。

此の浪路が、氣をつかひ、心を盡した事は言ふまでもなからう。

阿媽、此を知つてるか。

忽ち、口紅のこぼれたやうに、小さな紅茸を、私が見つけて、それさへ嬉しくつて取らうとするのを、遮つて留めながら、浪路が松の根に氣も萎えた、袖褌をついて坐つた時、あせつた頬は汗ばんで、その頸脚のみ、たゞさしのべて、討たるやうに白かつた。

阿媽、其を知つてるか。

薄色の桃色の、その一つの紅茸を、燈の如く膝の前に据ゑながら、袖を合せて合掌して、「小松山さん、山の神さん、何うぞ茸を頂戴な。下さいな。」と、やさしく、あどけない聲して言つた。

「小松山さん、山の神さん、

何うぞ、茸を頂戴な。

下さいな。——」

眞の心は、其のまゝに唄である。

私もつり込まれて、低聲で唄つた。

「あゝ、ありました。」

「おゝ、あつた。あつた。」

ふと見つけたのは、唯一本、スツと生えた、侏儒が澁蛇自傘を半びらきにしたやうな、洒落ものの茸であつた。

「旦那さん、早く、あなた、こゝへ、こゝへ。」

「や、先刻見た、かつばだね。かつば占地茸……」

「一つですから、一本占地茸とも言ひますの。」

先づ、枯松葉を笊に敷いて、根をソツと抜いて据ゑたのである。

續いて、霜こしの黄茸を見つけた——その時の歡喜を思へ。——眞打だ。本望だ。

「山の神さんが下さいました。」

浪路はふたゝび手を合した。

「嬉しく頂戴をいたします。」

私も山に一禮した。

さて一つ見つかると、あとは女郎花の枝ながらに、根をつらねて黄色に敷く、泡のやうなの、針のさきほどのも交つた。松の小枝を拾つて掘つた。尖はとがらないでも、砂地だからよく抜け



る。

「松露よ、松露よ、——旦那さん。」

「素晴らしいぞ。」

むくりと砂を吹く、飯鮪の乾びた天窓ほどなのを搔くと、砂を被つて、ふらくくと足のやうなものがついて取れる。頭をたいて、

「飯鮪より、これは、海月に似て居る、山の海月だね。」

「ほんになあ。」

じゃあま、あばあ、阿媽が、いま、(狐の鞆丸)ぞと呷つたのはそれである。

が、待て——葦狩、松露取は閑の興に入つた。

浪路は、あちこち枝を潜つた。松を飛んだ、白鷺の首か、脛も見え、山鳥の翼の袖も舞つた。

小鳥のやうに聲を立てた。

砂山の波が重り重つて、餘りに二人のほかには人がない。——私はなぜかゾツとした。あの、翼、

あの、帯が、ふと怒る時、色鳥とあやまられて、鐵砲で撃たれはしまいか。——今朝も潜水夫の如きした、かな扮装して、宿を出た銃獵家を四五人も見たものを。

遠くに、黒い島の浮いたやうに、脱ぎすてた外套を、葉越に、枝越に透して見つけて、「浪路さ

ん——姉さん——」唯、昔の戀に、聲がくもつた。——姿を見失つたその人を、呼んで、やがて、

莞爾した顔を見た時は、戀人にめぐり逢つた、世にも嬉しさを知つたのである。

阿婆、これを知つてるか。

無理に外套に掛けさせて、私も憩つた。

着崩れた二子織の胸は、血を包んで、羽二重よりも滑である。

湖の色は、あを空と、松山の翠の中に朗に沁み通つた。

故のやうに、就中遙に離れた汀について行く船は、二艘、前後に帆を掛けて行ったが、其の帆

は、紫に見え、紅く見えて、そして浪路の襟に映り、肌を染めた。渡鳥がチ、と囀つた。

「あれ、小松山の神さんが。」

や、や、如何に阿媽たち、——此の趣を知つてるか。——

「旦那、眉毛を濡らさんかねえ。」

「此の狐。」

と一人が、浪路の帯を突きさまに行き抜けると、

「濱でも何人抜かれたやら。」一人がついて顔で掬つた。



袖でかくすを、  
「いや、前髪をよくお見せ。——一寸手を觸つて、當てて御覽、大したものだ。」  
「え、」  
ソツと抜くと、掌に軽くのる。私の名に、もし松があらば、げに其のまゝの刺青である。  
「素晴らしい簪ぢやあないか。前髪にさゝつて、その、容子のいゝ事と言つたら。」  
涙が、その松葉に玉を添へて、  
「旦那さん——堪忍して……あの道々、あなたが幼い時のお話もうかゞひます。——眞のあなたのお頼みですのに、何うぞしてと思つても、一つだつて見つかりません……嘘と知つて居て、そんな茸をあげました。餘り欲しうございましたので、私にも、私にかつて眞個の茸に見えたんですもの。……お恥かしい身體ですが、お言のまゝ、あの、お宿までもお供して……もし其の茸をめしあがるんなら、屹とお毒味を先へして、血を吐くつもりで居りました。生命がけでだましました。……堪忍して下さいまし。」  
「何を言ふんだ、飛んでもない。——さ、一寸、自分の手で其の松葉をさして御覽。……それは容子が何とも言へない、よく似合ふ。よ。頼むから。」  
と、かさに掛つて、勢よくは言ひながら、胸が迫つて聲が途切れた。

「また出て、魅しくさるづらえ。」  
「眞書間だけでも遠慮せいでや。」  
「女の狐の癖にして、鞆丸をつかませたは可笑なや、あはゝゝ。」  
「そこが化けたのや。」  
「おゝ、可恐やの。」  
「やあ、旦那、松露など、黄茸など、眞個ものを賣つてやるかね。」  
「たかい錢で買はつせえ。」  
行過ぎたのが、茶畑越に、纏れるやうに、一齊に顔を重ねて振返つた。三面六臂の夜叉に似て、中におはぐるの口を張つたのがある。手足を振つて、眞黒に喚いて行く。  
消入りさうなを、背を抱いて引留めないばかりに、ひしと寄つた。我が肩するゝ婦の髪に、櫛もさゝない前髪に、上手がさして飾つたやうに、松葉が一葉、青々と然も婀娜に斜にさゝつて、(前こぞう)とか言ふ簪の風情そのまゝなのを、不思議に見た。茸を狩るうち、松山の松がこぼれて、奇蹟の如く、おのづから挿さつたのである。  
「あゝ、嬉しい事がある。姉さん、茸が違つても何でも構はない。今日中のいゝものが手に入つたよ——顔をお見せ。」



「後生だから。」

「はい、……あの、かうでございますか。」

「上手だ。自分でも髪を結へるね。あ、よく似合ふ。さあ、見て御覽。何だ、袖に映したつて、映るものかね。此處は引汐か、水が動く。——此方が可い。あの松影の澄んだ處か。」

「あ、御免なさい。堪忍して……映すと狐になりますから。」

「私が請合ふ、大丈夫だ。」

「まあ。」

「ね、そのまゝの細い翡翠ぢやあないか。琅玕の珠だよ。——小松山の神さんか、龍神が、姉さんへのたまものなんだよ。」

「こゝにも飛交ふ蝨の翠に。——」

「いや、松葉が光る、白金に相違ない。」

「え、旦那さんのお情は、翡翠です、白金です……でも、私はだんくんに……あれ、口が裂けて。」

「え、。」

「目が釣上つて……」

「馬鹿な事を。——葦で嘘を吐いたのが狐なら、松葉でだました私は狸だ。——狸だ。……」

と言つて、眞白な手を取つた。

湖つゞき蘆中の静な川を、ぬしのない小船が流れた。



胡

桃



旅人が言った。

雪國の、緋葉の頃である。大通りに道普請に敷いた、一面の小砂利に、人のつけた路も、積つた雪を踏分ける一條路も、おのづから同じ形だと思ひつつ、故郷の町を歩行いて居た。小ぎれいな菓子屋がある。

彼は、その店へ入つた。

「胡桃の砂糖にくるんだのはありますか。」

旅人は土産を買ふつもりであつた。

「はい、ございます。」

と答へたのは、桃色の手絡で、艶々しい圓鬘に結つた、綺麗な婦人であつた。背のすらりとしたのが、やゝ大柄に見えたのは、一つは其の着つけの所爲であらう。……上下大島の緋を着て居た。羽織の紐を細くあはせたので、肉づきのい、胸も優しい。……襟も清らかで、肌着の緋が幽に覗く、八ツ口のきちんと正しく、内端に人形の衣裳に似て合つたのに、めりんすだと思ふ……

真新しさうな友染も花やかだが、藤紫の襟が深い、肩のあたりの、何となく、さみしいとよりは陰氣なのは、雪にうまれた女たちの例である。

「……唯今。」

然う言つたのは、先客があつたからで。……年紀は二十、二ツ三つ越したらうか。まだ初々しい、嫁さんらしい其の女は、小さな折を上包みの紙につゝみかけて居た處であつた。

何か臺の上で、うしろ向きの羽織の肱の柔かく動くのか、緋の袖なぞへにほめいた。あれが、縞だと、透通る。……

向直つて、衣ずれの音をすつくと、前袂が捌かれると、店の正面へ出て、少し斜かひになつて——其處に、髪を赤縮れた丸顔の女中の立つたのを、親しみのある態度で見ながら莞爾した。

「紅屋さんの女中さん、……あの……」

「へい。」

と、寒さうな聲を出す、兩の手首を筒袖へ引込めて、肩をすくめて居た。

「一寸、其處の砂糖の空箱の上に、先刻お客様にお貸し申したまゝで、小皿に糊の入つたのがあるんですよ。……後生して、一寸取つて下さいましな。」

桃 胡

「へい。」



「おつかひ立て申して済みませんこと。……お心安だてに……ほ、ほ、ほ。」  
と微笑む。——瓜核顔の鼻筋の通つた、目の清しいのが……微笑むと、……白い齒の、上の齒  
莖が漏れた。桃の熟した色がある。惜い、が、此が人間だ。然うでないと、品が好すぎて神々し  
からうと思つた。

「へいへい。」

「ね、何うぞ。」

と言ひかけて、在所を、目で知らせて、恚う氣組みに、袂の端を片手に取つた。

糊の皿は、ふと見ると、丁ど旅人の立つたうしろの荒けつりの箱の端にある。成程、明箱だ。

折から時雨の晴間だつたが、まだ霽する番傘が一本立掛けてあつた。

旅人は借りた傘を縦について佇んだのであるが、店はぐるりと高く取つて、細い臺のやうに仕  
切つてある、土間に置いた瀬戸の火鉢も、傘の脊ほどに突立つ。いま其の氣組んだなりで、ひよ  
いと棲さを、もろに上げて、のしか、つて乗出して、腕をすつと伸ばせば此のうつくしい嫁さ  
んの手は皿に届く。

女中を頼んだのは、旅人を憚つて控へたのである。……と氣がついて、

「此ですか。」

「あれ、まあ、……難有う存じます。」

と不意に打たれて口籠つたのを、すぐ、しとやかに言つた。が、やゝ急ぐやうに、爪先を浮か  
して疊を切つた。

上包みを糊で封じて、其の紅さを拭布で反して、清めながら、またいまのやうに、袂を袂紗  
に折つて、紅梅色の裏仄に、しとやかに八口へ挟んで、白やかな手を宙に伸した。天井に棹の車  
で、浅葱のテップが巻いてある。

肩も腰も大島もやゝ伸びたが、もう些とで指のさが届かない。——前に、短く戻し過したか  
らである。

「よ……。」

と小さく言つた。

頭もともに髪が揺れて、うしろ状に背を反す。其の高く縫らうとする指さきは、天井の雲の青  
空に、紅い千代紙の袖口から、眞白な折鶴の舞ふ風情である。

旅人が恍惚する時、あさぎの紐は折鶴を巻いてすらりと下つた。

此の舉動に、するりと落ちた、袂を、口に銜へながら軽い吐息をして結んだ。

「お待遠のま……。」



女中の、折と傘を引抱へて、前屈みに成つて、紺足袋で歸つたあとで言った。  
「折を一つ見せて下さい。」

「はい。」

二つ並べて、小さな方を此方へ寄せる。……賣る人が内端なため、旅人はその大い方を眺めた。  
店の正面の硝子戸棚の、上の段に、カステラと、西洋菓子の花のやうなのが並んで、胡桃は下の長箱に入つて居た。嫁さんは横顔で、伏目に膝をついたが、襟の色も紫に映つて、温室の戸を開けたやうで、旅人の手さきを翳した火鉢の灰も、此の時は温い。

はらくと、静かな音を立てて、白い胡桃は、撓ふ指とともに、折に並ぶと、見るうちに、一類笑つたやうに、いや拗ねたやうに、あらず、からかつたやうに、ひよいと手を差つて、ころんと疊に轉がつた。

此が、奇怪な、世の中の賽であつた。

頤で斜に視つつ、撮んで拾つて、しづかに折に入れようとするのを視た。

「あゝ。」

旅人は聲を掛けた。

「不可い……東京へ歸つて、遣ひものにするんですから。」

嫁御寮はハツと色を染めた。恥ぢて、ハタとついた膝で、且はずむやうに衝と立つて、素直に店から戸外へ投げようとした。

また袖口に、天女の弄ぶ、白い筑羽根のやうな肱が見えた時である。

「勿體ない——勿體ないぞ——」

中仕切の、もの蔭から、人とも獸ともつかず、たとへば九官鳥の呌くが如き聲を發した。……がらり／＼がらり、ざら／＼、……その蔭に、金平糖を搔くらしい音がする。

あはれ、御寮は、胸を打たれたが、あわたしげに、もとの箱へ戻さうとしつつ、また旅人を見て猶豫つた。

袂に入れようとしてたゆたつた。

時に、兩手を、雙の掌を、拜むやうに合せて、薄手なその甲に、圓鬚の傾くばかり、頬を押あてながら、立つて旅人を視て言った。

「……何うませう、私、何うしたら可いでせう。」

「半分づゝ、食べませう。あなたと……」

旅人は決然として言った。

「……手で破つては不可ません。……私は此の國のものです。胡桃を知つて居ます——破ると碎



けて了ひます。あなたの口で……あとを半分。」

「え、。」  
睜いた瞳に、うまれて以来の、あらゆる影、過世の幻、未来の地獄さへ宿しつつ、口の蕾が爽に開いた。あゝ、その齒莖もきれいだ。且つ血が上つて、たゞれたかと思つる中に旅人はおのが舌の先が、白い魂になつて轉ぶよ、と其の胡桃を視た。

大な猿の山猿は、雪を溢れた實のやうに、半分嫁さんの掌から頬張つて、さつとかゝる片時雨の暗い軒を、傘もささず逃出した。

町に久しい金看板の老舗の薬店の、金雲圓の門深き中庭に、千とせ年経る老松の、道をさしのぞいた梢に、ハタと目を打たれて、突當るやうに思つて振り返ると、振上げ振廻す金平糖の掛鏝が火のやうに見えた。……片腕で掴み伏せた夫の下に、襦を染葉に、手を散して、肌を亂して、鬚を水々と倒れて居た。

旅人は、瞬間、お伽話の魔神の犠牲の姫君を思つた。

が、あの肉體、手足は半分に裂く事は出来まい。……胡桃でないから。

それにしても、甘い肝のやうに、いま咽喉を通つた胡桃の、此の一顆は、山深くあつた時、山の神様が不思議なお禁厭をして置きなすつたのであらう。

松の梢にその山の影がさす。――

旅人は……然う思つた。……なほ、いつさんに逃げながら。

と旅人が言つた。



火のいたづら



「姐さん——水を一杯。」

「はい。」

「井戸から汲みたてを、……何うぞ。」

「あちらのお客様がお水とおつしやいますわ。……さ、放して。さ、何うぞ……ね阿闍梨様。」

——此の酒屋の若い妻か、一寸年増の娘か、よくはまだ分らない。癖のない、艶のい、髪を櫛巻に結つて居る。睨に張を持つほど、ぐつと引詰めて居るから、年紀も二十二三か、尙二つ三つはふけて見えよう。撫肩で姿のい、のが、緋の羽織に、おなじやうな着ものの襟を深く慎ましく、青がちの腹合の帯も、格子縞の前垂も所帯染みて、何となく襲れたが、下ぶくれで色の白いのに、浅葱の半襟に人からの柔順な優しさ。客商賣ゆる襦袢の袖は垢のつかない小清淨したのを嗜んで、唐縮緬だらうけれど、水紅色地に、櫻の花片のちらくくと白く亂れたのが、手くびにこぼれて、薄紅梅に雪の散りかゝる風情に見える、雪國の美しい女である。——「放して……」と此の女が言

ふ、手首を取つて、しなだれて、殆ど不精髯の頬摺りをしさうな、硬ばつた胡麻鹽の禿總髪、大面の鉢割額で、小鼻の皺が深く、頬邊がでつぷりとして、ふやけた鼻柱の真中に、むかごほどの疣が一つぶら下つた、皺だらけだが、頬骨の張つた、六十あまりの親仁を、「阿闍梨様。」——妙な呼び方をすると思ふと……そまつな卓子に乗せて置く弓張提灯に、九耀の星を黒く、片面、一方に、世に言ふ天狗の羽團扇が朱で描いてある。見たまゝに受取ると、これは天狗宗の阿闍梨どの——勿論、蠟燭は消して居る。

薄汚れた被布づくりの鼠色の半合羽、白襟のきはづいて垢だらけなのを三つも襲ねて、矢張り鼠色の無地の布子に、又おなじ色のまちな袴を裾長に穿いて居る。だけで、總身に疣があるでもないが、女に吸着いて離れない。

あとで知れた——玄性院といふ、掘ると蟻の出さうな崖下の日蔭の小社の堂守で、狗賓信仰の土地がら、山の魔神のもりをする……卜筮、禁厭などを業として、人によると、飯綱を使ふなどと恐をなす、岩膜と稱する半俗だが、行者とも道人とも言ふべきを、「阿闍梨様と呼んで貰はうの。」のぞみなんださうである。



時に——「水を一杯……」特に「井戸から」と言つて、一方の椅子から聲を掛けた若い男は、大島だか擬だか、かすりをかさねて莫産を着て菅笠を被つて居た——此の形は、いまこそ見えな  
いが、十年ばかりも前までは、農家、漁村の人の、雨に雪に城下へ出る時ばかりでなく、町の學  
生が好んで使つたものである。——勿論、脱いで居る、が、笠には、まだ雪が残つた。

この男が、酒店へ入つたのは、阿闍梨親仁よりは少時先だつたのである。が、早く雪を消すほ  
どの暖を取る設備もなし、酒もまだ寒さを凌ぐほどには廻らない。

戸外は、さつ／＼、さつ／＼と雪が降りしきる、そして節分の夜なのである。

——處で、場末ではないが、一棟、神社のある裏町に、電燈も餘り明るくない、この酒店は、  
小體にしる、何にしる、當節のバーでもなし、例の居酒屋で一せんめし、あり合お肴と言ふ趣が  
あるのでもなかつた。筆者は、實地はもとより、道中の繪で見ても、話で聞いても、軒に鮭の脚  
の一まきまいて掛かつた景色はすきである。酔にしてキユツと嚙みながら一升熱い處……と來る  
と場が引立つ。——この話をお取次するのにも、はじめ聞いて、寒い國の雪の中の酒屋だと言ふ  
から、湯氣の立つ紫の疣々へちら／＼と雪のかゝる處か、……中へ出る人物が中毒らうと中毒る  
まいと、そんな事は構はない……河豚鍋を掛けさせよう。せめて鮫鱈鍋でもと意氣組んだが、然  
う言ふお誂へには行かないのである。

雑と言へば、酒の取次をする荒物屋で、近頃ほんの出來心で、土間の板敷を拂つて、眞似ごと  
同様に、一二脚、腰掛椅子を置いたばかりであるから。——「入らつしやい。」——などと言ふ景  
氣も更がない。別嬪の姐さんが居て、酒屋の癖に何うも陰氣で。……

第一菅笠の男が門口へ立つた時は、まだ宵の口だと言ふのに、——新屋とかいた二枚の腰障子  
も、ぴつたりと閉つて居た。……午すぎからちら／＼降り出したので、白いものはまだ然まで激  
しくもなかつたが、門なみに戸の閉つて居た事は言ふまでもない。

三尺ばかり間を置いて、つくねんと笠を傾けて立つたまゝ、破目はあるのに、うそ／＼と覗き  
もしないのは行儀が可かつた。其の癖、おなじ處に立ちながら、後さきを、特に今來た一方に、  
——横に鳥居が見えて神社へ入る——四辻の邊を氣にしては見返つた状は、あとを追はるゝにし  
ては静過ぎる。……人目を忍ぶらしい様子があつた。……と言へば色戀の床しさがある。が、實  
はさうでない。——菅笠が、こゝへ、其の辻を來かゝると、足許から鳥が立つと言ふ諺はこの事  
で、薄く敷いた雪の上を、ばさ／＼と風に鳴つて、一歩ひく裾へ搦まるばかりに躍つたのは、何  
處の物置から掃出したか、掃溜を犬が銜へ出したかと思ふ、筋骨立つた、すた／＼の澁團扇で、  
諺がもう一つあれば、貧乏神に魔が魅したやうであつた。

追はれるやうに、躲すやうに、恚う爪立つやうに、二三度、うろ／＼と成つて、すつと出ると、



風の加減か、裾へはつかず、おなじ處を、くるくると舞つて、骨がばさくくと鳴つて居た。新屋の燈は、もう其處までは届かないが、妙に、其の澁團扇の影を氣にしたのである。

で、何うも、澁團扇を氣にするやうでは、大概人品の度合も知れたと、先づこゝで言つて置く。處で、腰障子ががたくと開くと、頭から眞黒で、眉の上へ嘴のやうに廂の突出た坊主合羽といふ奴に、すぼりと包まつた少年が一人、「……行つて來ます。」と威勢よく飛出すと……「氣をつけてね。」と、恚う帳場らしい處から、片袂おろしながら送出したのが……櫛卷の美しい其の婦で。早いこと、少年はもう四辻の處に居て、「やあ、こん畜生。」といふのを、姉か、其の婦が、「惡戯をしては不可ませんよ。」と一寸寒さうに袖口を折込むのに、薄紅がちりりとして、戸口から其方を覗いた。

犬も、猫も、何にも居ない——少年は、捨團扇の化けさうなのにからかつたものと見える。

片暗へ身を引いて居た若い男が、其處へ、さゝと雪の音、斑に白い菅笠を、沈めて出した。「旅のものです、一杯頂けますか。」變な風體を、別に怪しむ様子もなかつた。或はこんなのが此の店には相應はしいのかも知れない。「はい、さあ何うぞ、お入り遊ばして。」で、帳場からすぐに二階の階子段の見える土間の一方の椅子に掛けた。婦が丁寧にお辭宜をして——小賣に酒を取次ぐかたはら、ほんの一升、硝子杯幾つと、お間に合せをして居ました、店でさしあげますやうに心

掛けましたのは、つい近頃の事で、まだ何にも間に合ひませぬ。お盆でお給仕をしますほどの支度もありませんけれども——結構です、結構です。——餘りお寒うございますからお燗だけはいたしませう。それでごふしよ遊ばすか。——結構です。結構です。——やがて、ほつくと杯を呑むやうに、白い息の中へ熱燗を立てつけて、さてお肴は？……鰯をむしりますほかに、水菜と鮎の煮ましたの。……いま、あの少年にご飯を食べさして出しました。私どものお茶がござ

います……お厭でなくば。——至極結構です。が、旦那の分がなくなりはしませんか——あれ、お人の悪い……と、ぼつと臉を紅くして、——そんなものは存じませんと一寸姿を曲つた處は、恚うは見えても酒を賣る姐さんらしい。が、深切に、一度鍋に掛けて、暖めなほして盆で出した小鮎と其の水菜の煮つけ。

土間を鉤の手に廻ると、階子段の裏あたりで、やがて、ちやぶくと水づかひ、チヨキ／＼チヨキ／＼組でものを刻む音がするのを、菅笠の男は、椅子から遠まはしに差覗くやうにしたが、其處は暗い。店の燈をほのかに借りた、馴れた水仕事と思ふにつけても、あの露出した二の腕の色が白さが惚ばれる。

目を天井へ外した、が、熱と瞳が寄つて眉が迫ると、推伏せられたやうに俯いて、彼は何故か、ほろりとした。



「可厭です。阿闍梨様。」  
 「まあ、可えがな、可えがいな。」  
 「可厭ですね、不可ませんわ。」  
 「何、」  
 と、聲に尻角を立てて、  
 「入つては不可んと言ふかい、飲んで不可んと言ふかい、飲ませんと言ふかい。」  
 と言ひ、既にづしりと腰を掛けた、これは店口正面の一脚であつた。  
 「そんな、あなた、……お酒の事ではないのです、その團扇なんですのよ。」  
 「お、うちはが何うしたかい。」  
 と忽ち生ぬるい聲をする。

「火の用心、火の用心——火の用心——」  
 あゝ、珍しい。……今夜は節分、おん厄はらひませうな厄落し、厄拂のかほりに、雪の町に火の用心を觸れるかと思ふ聲が、三つ續けに聞えると、お辻——やがて名も知れて居た——お辻はぞつとしたやうに、胸を伏せた。  
 ——火の用心、火の用心——  
 のぶとい皺枯聲が、すぐ戸口で。いきなり腰障子を開けると、毫碌頭巾に、網代笠を頂いたのが、雪の中から小鼻と大疣をぬいと覗かす。同時に消えたか、消して来たか、灯のない件の提灯

婦は襷がけのまゝ、大根の浅漬を——こんな、ぶしつけなものを、お氣味が悪うございませんでしたらめし食つて——これは何より結構です。と箸をつけると、此の邊の仕來りで、分厚に切つた薄皮を一寸残して、縦横に浅く庖丁目を入れたのが、菱形に目を持つて、箸に掛つて、渚に干した網のやうにさらりと上る、うつくしい人の袖口の影に、白魚がこぼれさうである。  
 切るのも惜い。——お手際ですねと、箸を置いて、失禮ですが、一つお酌は願はれますまいか。え、こんなもので。……飛んでもない。不調法ですけどと、襷をはづして銚子を取つた。——  
 お店は新しいやうですが、いつ頃から。はい、あの。……



「あの、今夜は節分ですし、……厄落としにと思つて、それを先刻うつちやつたのですのさ……」  
 「はあ……いかに、厄落し。——中にも、火の厄、火難を落さうとしたのぢやらうがな。」  
 「え、此間から、あなたが幾度もお話しなさいます、もと、この家は、節分の晩には、いつも火に祟るとおつしやるのが氣に掛つて成りませんのですものね。」  
 餘所見をして居た若い男は、お辻の此の言葉に、衝とみひらいた目を注いだ。  
 「姉ま——この家は、——その、この家はぢや、……人によつては、ほつかりと爛をして飲ませると見えるぢやな。」  
 と、注いで出した硝子杯の冷酒を、敏手で撓めてじろりと視る。  
 「でも……いつでも、あなたは。」  
 「いや、可い。……神棚、佛壇に爛をした酒は供へぬ。尋常のものとは違ふぞよ。へ、ん。」  
 と若い客を流眊に掛けつつ、  
 「お神酒は冷くて大事ない。ぢやが、此の節分は大事ぢやぞ。お身は此の店で三代に成るが、はじめの家では、三年續けて節分の夜と言ふと火沙汰があつた。なれどもな、一家信心が深かつたに因つて、懸命に守り通して、何うやら自火は出さず、焚けずに済んで。——四年目が、あの大火事ぢや。その時、貫火で焚けたわい。とに角火の難はよう免れなんだぞ。何うぢや可恐しかる。」  
 ——四五年空地に成つて居つて、いまのこの家をやうく建てたが、其の初代の主人は立春を待たずに亡くなつた。……一家は他國へ離散した。——澤山の家族でもなかつたなれど、さて、行方は分らぬ。二代目はこゝに二年住んだ。その間、一度節分に別條があつたか、ないか、それは、ありやうは私も知らぬ。ぢやがの、落着いて住みおほせぬ處を見ると、餘り安泰ではなかつたぢやろぞよ。あとが此方ぢや——はじめての節分ぢや。——また丁度旅を掛けて、この節分のあとさきに、こゝに男手のないと言ふも氣掛りぢや。——なあ、姉ま。」  
 と、肩に陰氣な蔭のさす、お辻の不安らしい顔を視て、酒を吸ひざまに、唇をべろりとやり、「真に一期の大事ぢやぞ。手過失があつてはな、わが家を焚いただけでは済まぬが。……火元は七代まで祟られると言つてな、……煙草火一つ……吸殻に風ばうく。」  
 若い客は、思はず喫みさした巻煙草の火を隠して、下へ伏せた。  
 お辻は見るともなしに、氣の毒らしい、遺瀨のない顔をする。  
 阿闍梨親仁は、肩で押かゝる如く、嵩に乗つて、  
 「……または蠟燭一挺の怪我から、家も町も一砥めに灰にすると、可いか。——今は此の火あぶりのお仕置もなければ、世の難儀、人の迷惑、人の怨恨で。……此の邊では火元と言へば、その主人は先づ焼死んで言譯をするのが掟のやうぢや。あ、あ、可恐い事ぢやな、火の用心が肝心

「あの、今夜は節分ですし、……厄落としにと思つて、それを先刻うつちやつたのですのさ……」  
 「はあ……いかに、厄落し。——中にも、火の厄、火難を落さうとしたのぢやらうがな。」  
 「え、此間から、あなたが幾度もお話しなさいます、もと、この家は、節分の晩には、いつも火に祟るとおつしやるのが氣に掛つて成りませんのですものね。」  
 餘所見をして居た若い男は、お辻の此の言葉に、衝とみひらいた目を注いだ。  
 「姉ま——この家は、——その、この家はぢや、……人によつては、ほつかりと爛をして飲ませると見えるぢやな。」  
 と、注いで出した硝子杯の冷酒を、敏手で撓めてじろりと視る。  
 「でも……いつでも、あなたは。」  
 「いや、可い。……神棚、佛壇に爛をした酒は供へぬ。尋常のものとは違ふぞよ。へ、ん。」  
 と若い客を流眊に掛けつつ、  
 「お神酒は冷くて大事ない。ぢやが、此の節分は大事ぢやぞ。お身は此の店で三代に成るが、はじめの家では、三年續けて節分の夜と言ふと火沙汰があつた。なれどもな、一家信心が深かつたに因つて、懸命に守り通して、何うやら自火は出さず、焚けずに済んで。——四年目が、あの大火事ぢや。その時、貫火で焚けたわい。とに角火の難はよう免れなんだぞ。何うぢや可恐しかる。」  
 ——四五年空地に成つて居つて、いまのこの家をやうく建てたが、其の初代の主人は立春を待たずに亡くなつた。……一家は他國へ離散した。——澤山の家族でもなかつたなれど、さて、行方は分らぬ。二代目はこゝに二年住んだ。その間、一度節分に別條があつたか、ないか、それは、ありやうは私も知らぬ。ぢやがの、落着いて住みおほせぬ處を見ると、餘り安泰ではなかつたぢやろぞよ。あとが此方ぢや——はじめての節分ぢや。——また丁度旅を掛けて、この節分のあとさきに、こゝに男手のないと言ふも氣掛りぢや。——なあ、姉ま。」  
 と、肩に陰氣な蔭のさす、お辻の不安らしい顔を視て、酒を吸ひざまに、唇をべろりとやり、「真に一期の大事ぢやぞ。手過失があつてはな、わが家を焚いただけでは済まぬが。……火元は七代まで祟られると言つてな、……煙草火一つ……吸殻に風ばうく。」  
 若い客は、思はず喫みさした巻煙草の火を隠して、下へ伏せた。  
 お辻は見るともなしに、氣の毒らしい、遺瀨のない顔をする。  
 阿闍梨親仁は、肩で押かゝる如く、嵩に乗つて、  
 「……または蠟燭一挺の怪我から、家も町も一砥めに灰にすると、可いか。——今は此の火あぶりのお仕置もなければ、世の難儀、人の迷惑、人の怨恨で。……此の邊では火元と言へば、その主人は先づ焼死んで言譯をするのが掟のやうぢや。あ、あ、可恐い事ぢやな、火の用心が肝心



「あな、え、それですから阿闍梨様。……些との事でも氣に成りますから、……」

お辻はわく／＼して、四邊を視ながら、

「その團扇を棄てたんですの。」

「ふーむ。」

「あなた、昨夜も入らしつた時。……猫の怨のお話をなさいましたでせう。——あの、大きなお邸で、氣の荒いお殿様が、盜賊猫の堀の上へ遁げる處を、槍玉とかにおあげなさると、串刺のやうに成つて、ぐる／＼と尾と耳で廻つたんだつて、まあ、酷い。……三年目の猫の目には、屹とお邸が焼けるツて、未來も見徹しの豪い法印さんが心着けなすつたのでしたつてね。」

「私がお堂の先々代ぢや。髭は長し、鼻は隆し、眼は光つて、活きながらの天狗、魔ものと呼ばれたお山伏ぢや。」

「お邸にも、氣になる事が續いた處だつたんださうでございますものですから。」

若い客の徒然を慰め顔に、こんな中にも氣あつかひの口を分けて、何を微笑むともなしに莞爾した、眞珠のやうな皓齒である。

「あの、其の日は、空家のやうに諸道具を片づけて、朝のうちから、火の氣といつては、附木も

置きませんで、あの、お佛壇の燈心さへ片づけて、番人のお侍ばかり、邸中を水にして冷く成つて居ましたのに——眞夜中でございますツてね……何十疊とかの、あの書院の眞中に居たお侍が、何うしても我慢が出来ませんで、内證の内證で、ソツと火打石で火をきつて、それを火奴に移したと思ふと、——高い、廣い、暗い天井の眞中から、元結ほどの、白い、細い、紙のやうなものが、スーツと下つて来て、チラリとほくちの火をうつして、あれ／＼、それが天井へ上つたと思ひますと、一時に板の合せめから火を噴いて、それが猫又火事と言ふ、大火事に成つたつて——お話しなすつたんでございますもの。」

「其の通りぢや……」

阿闍梨は小卓をハタと敲いた。

「もう私……煤が落ちてもびく／＼して居ますのに——今日お午過ぎころ、こゝの屋根の上で、猫の鳴聲がしますから、ハツと思ふと、あの。」

袖口がちらりとして、

「破風の窓に、何うして挟つたんですか、内ぢや見馴れませんか……その漉團扇が挟まつて居たんですもの。——可厭でございますわねえ。——お邸の書院では元結ですけど、こんな家ですから破れ團扇なんですもの。——夜だつたら何うしませう。——晝間で、それに少年でも、あの子が



居たもんですから、……畜生々々……猫が悪戯に銜へて来たんだと思ひますから……然う言つて、追ひますうちに、雪風が、ざあと向うの山の方から通りますと、空が暗くなりましてね、山から落ちるやうに、破風をくゞつて、井戸のついわきへ落ちたんですのよ。——この上、貧乏にしましても、火事にしましても、可厭で、忌はしうございますから、人顔の見えなく成るのを待つて、あの四角へ、厄落しに捨てましたのに……阿闍梨様、あなた、また拾つてお持ちに成るんですもの。……何うしませうね、氣に成りますわ。」

「たはけた事を。これ、私を誰ぢやと思ふ。玄性院の岩膜ぢや。女子などの料簡で察度をせまい、——これ、假にもな、その火の氣掛りのあるものを、町の辻へ投出して可いものか。——火を出すわ……な、それ、内から火を出す……事になるわい。」

「え。」

「うむ、何うぢや。……あの四辻の雪あかりに此の漣團扇のめらくくと動く體は、炎を噴くも同然ぢや。通りがかりに見たればこそ、私が掌の内にちやと納めて来た。——これとてもぢや、凡人が虚氣に握れば、立處に火傷もしかねぬ。火を出すと、納めるとは、大海と蜆貝の相違に成るぞよ。——心あるものはな、煙草の火でも、……火を出すといふによつてな。……」

若い客は舌打して、巻簾を火皿に伏せた。

「いやさ、火をつけたまゝで、それ門を跨いでは出ぬものぢや——さあ、もう一杯——私なればこそ、此の魔の魅した破團扇を、干鱈同然に扱ふが。……」

と、がぶりと飲みさした硝子杯を、その漣團扇の上のせた——その時までは、椅子なる膝頭に突立てて居たのである。

「はや、此でさへ爛をしたほどに、ふん、酒さへも暖もるぞ。團扇の火氣が擧るわい——それで何かな、猫が鳴いて、この團扇が覗いたか、破風をな。」

と白眼に、隙間だらけの天井裏をどろりと睨んで、

「破風を團扇が覗いたか。……びら／＼と落ちたぢやな。——あ、それが、同じくば井戸の中へ落込むと可かつたになあ。さてこそぢや、火の用心、今夜が大事ぢや。やれ、又雪を誘うて、ざつ／＼と凄まじう雪が降るわ。」

町内前後を、人らしいものの通る氣勢もない。

「心細うございますこと——氣味の悪い……何うしたら可いでせう。こんなでしたら、あの子でも、出さないで置けば可うございましたのにねえ、私……節分の豆に、お菓子も蜜柑も交るし、あとで、お年越の歌留多をするつて、賑かなうちへ呼ばれたんですもの。……可哀相に、さみしがつて居ますから。……私だけで、心細いのを堪へたんですけれど……遠方ですから、遅くなつ



たら泊らなければ可うござんす……雪もだん／＼積りますし。……」

と半ば呟いた線言も、伏目の眉に消えて行く。

「姉ま、姉ま。」

「はい、はい。」

遠道の雪一條、黒く點々と辿る坊主合羽の少年を、心で追つた魂を、忽ち呼返されたやうに返事をした。

「いや、さながら、かよわい女、お身一人で——孤家の籠城をする體ぢや。雪は白いが、魔の火も人間の目には白いぞ。千萬の火矢を射かけて降るなあ。——姉ま、尋常ごとではないぞよ。此は。」

「阿闍梨様。」

お辻は、崩折れるやうに、黒疣に向合つた一脚の椅子に身を落した。

「何うしたらいい、でせう。」

「早急な手段はな、私の、恠う見る前で、帯を解いて、しめた紐まで除つて見せるのぢや。な、凡俗にさへ恥かしいものを、此の阿闍梨の眼に曝す……此が速に、悪業の一端を滅して、幾らか火難を逃る、方法ぢやよ。うむ、何うぢや、その腰のきれを。」

「可厭、あなた。」

颯とあかくなつて、引肩に身をくねるのを、手首を握つて、ぐいと留めて、

「なあ姉ま、家を焚けばとて、身を火あぶりになればとて、それが出来ぬか。——若い女ぢや。」

……あゝ、不便な。うむ、……待て待て、さし迫つた手相を見て進せよう、——お、これは。」

「阿闍梨様放して、よ。」

「いや、不束な易者は、人間の皮を見る。眞の手相はな、確と肉を徹して血を見るのぢやよ——

……これは、じわり／＼と、沈んで亂れた脈を打つ——お辻姉、お辻姉。……お身が膚は清らか

であつて、それで、はや、つる／＼と膏があるなう。汗か、雪のやうな汗ぢや、お、これが乳

か、いや觸りはせぬわい。が、急所ぢやぞよ。女人の相はこゝにある。この血の脈の打ちやう一

つで、火と水が分るゝのぢや。——あゝ、やれ／＼、氣の毒ぢやが、何うもこれは危いぞよ。」

襟が青く頬に映つて、血のやうな襦袢の胸。

「阿闍梨様、——堪忍して。」

「いや、私は知らぬ。——魔がなす悪火ぢや。——火を防ぐは火と言つてな、又一つ……節分の今夜、五間、間敷あればその數五つ、七間に七つ、廁の中にまで、土器に燈火を點じて、火を防ぐ法もある——燈心、油の類はあるか。」



「え、あきなひますから、少しづつはありますけれど、一つだつて可憐いんですもの、人の居ません、二階へなんか、こんな氣味の悪い晩に、何うして裸火が置かれませう。」

「言ふほどもない事ぢや。——この初代は、九つの間があつた——その間ごとの火を、九つ、たつた三人で、それ、節分の夜と言ふと火沙汰のある可憐い夜中に守つたとな。それでこそ、せめて火元は免れた。ぢやが、其の心苦しさを思へ。——いま此處では、私が居て守つて進ぜる。可えか、こゝへ泊つてな、私が泊れば火は防げるぞ。可えか、うむ、可えか、可えな。」

「あれ。」

「それ、こゝに打つ、しとりくと水のしたゝるやうな、此が、此が却つて火の脈ぢやぞよ。火難の兆ぢや。」

「姐さん、水を一杯。」

——此の時であつた、若い客がきつぱりと聲を掛けた。——

## 三

迷へる信仰に、弱き女の、身自ら落つるとは言へ、囨にかゝつて鳥鷲に翼を掙いたお辻の、ハ

ツと似而非阿闍梨を離れたのは、ツと其の鬚を切つて、小鳥が土間を飛んだやうに見えたのである。

——井戸からすぐに、茶碗で——と誂へた。

車井戸で。

凄じい吹雪の夜に、キリ／＼キリ、ギイと手繰らるゝ釣瓶の音は、手とともに白き魂の、水を傳ふばかり、階子段の裏の暗がりに高く響いた。

熟と聞き澄して、肱を垂れつつ、指で音譜を弾くが如く、釣瓶の音に和した若い男の手は、井戸の深さと水に届く緒の距離を、獨り測りつつあるものの如くに見えた。

「あゝ、結構——此方へ。……いや、飲むのではありません。先刻から、聞くともなしに何となく聞きました。今夜の火沙汰を此の水で占つて上げようと思ふんです。」

「まあ、」

「あゝ、汲みたての水は、何にしろ潔い。」

と、カタリと静に椅子を寄せた。外に降り亂るゝ雪を、影に曳くやうに見えて、若き其の風采も、清らかに爽かに、卓子の茶碗に、一掬の冷水に對したのである。

岩膜阿闍梨は、臺つきの硝子杯を握りながら、中腰に浮いて覗いた、威容を整ふるがためか、



片手に澁團扇を忘れない。

「姐さん、いや、お嬢さん。」

「あの、旦那様、」

と、口籠りながら、また臉を染めたが、

「私は、あの、旅をして居ります留守の人の、なんなのでございますわ。」と肩で悄れる。

若い男の屹とした態度は、客ゆるに繕ふ娘らしい色を許さなくなつたのである。

「井戸は浅く成りましたね。——水は殖えましたね、それが可いのです。それがために、底を汲んでも暖かくありません。——水の冷いのは火のためにはい、事です。——火事の憂はありません。」

「まあ、貴方。」

と、ほつと吐いた息が、胸を乳の下まで通つて、卓子の端に柔に手をつくると、お辻は嬉しさにほろりとして、そのまゝ、袖口を目に當てた。雪を籠めた燈に、櫻が薄く咲いた風情である。

突いて覗いて、かいた鼻を、仰向けに椅子に引いて、被布の腹で反つたる阿闍梨が、

「は、ん、お身は、水の八卦置か。」

「いや、易者でも何でもありません。が、清い心で、澄んだ水を見れば、過去も未来もよく分る

のです。」

「はん、未来も過去も映すと言ふかい。」

「火の消えた處はあつても、水のない世界はありません。火を見るよりも明だと言ふのは、水に映る影なんです。」

「申すものぢやな、……言ふものぢやなあ。……後の事は先づおけい。——祟る火を三年免れて、四年目に此家の焚けた、どだい、その業の火のいはれだけでも分るかな。——それが分らないでは、今夜の大事、無事などと口幅たく饒舌れまいぞ。——分るまい。——姉ま、ぢやによつて言はぬ事ではないのぢや。その可恐い火はな、可えか、——これ、此の澁團扇で煽ぎ出でたものぢやぞよ。」

と腕を張つて、——若い人にすり寄つたお辻の帯のあたりを、ばさりと煽いだ。可厭な風である。

「……其の團扇が、何と、然も今日、猫の聲の前じらせて、破風口から飛込んだわ。可恐しい。——これ私に縫らいで、心に背くと、たゞでは濟まんぞよ。年越の今夜は過ごせんぞ。」

と、ぶはくと又煽いだ。

お辻はその毎に、ぞつくと、なよやかな身をすくめる。



「大丈夫——そんなものは氣にしないで、この茶碗の水をよく御覽なさい。」  
彼は端正と膝を直した。

「こゝに……小さく、澁團扇が一つ水の中に見えませう。見えますね。爺さんが一人居て、それが、團扇を手にとって居るでせう。白髪の爺さんは、青い蜘蛛のやうな顔をして、その白髪が逆さに立つて一方を睨んで居ませう。そして踏臺に、しやつきりと腰を掛けて居るでせう、——見えますか。……見えますね。——居まはりに、山のやうに、燃草、鉤屑が積んであります。」

阿闍梨は顛割額の鼻の根に、うすい眉毛をびくびくと顰めて寄せた。

「——この爺さんは、獨身ものの、指物屋です。狭い町の眞向うに、一軒八百屋があつて、不火をするやうに快からぬ中で居ながら、止むを得ない事情から、家を抵當に、其の八百屋に借金をしたのです。——金の始末がつかないで、いよく家を取られて、住居を追出されると言ふ前の晩、——それが除夜でした……今夜です。夜中、一時頃に、我が家へ火をつけて、背戸へ出て、炎の中で、賣りものの踏臺を床几にして、破れた澁團扇で眞向うの、その八百屋に向つて、煽ぎたてくつつ焚死んだんです。が、御覽なさい、灰汁のやうな煙を巻いて、血の炎の流れる中に、胡麻のやうに、バラバラと黒く轉がるものがあります。八百屋の亭主と、女房と、婆さんの三人が、煽ぐ火の爺よりはさきへ煙にまかれて死んだんです。——茶碗の眞白な處は今夜のやうな

矢張り雪だつたんです。こゝに坂があります。下を小川が流れて、榎の大木があつて、空と離れて高い處に塔のやうなもの見えるのは——今はありませんが、此のお店の三軒さきにあつた三階の屋根です。榎が動いて居ますね、——炎を嫌つて、梢を振つて。——この樹は焼けないで、こゝへ飛んで、三階の棟へ思ひも掛けず飛火がして、其の時此の家が焚けたんです——それ、團扇が見えますね。」

むすくと、二人の中へ割込みさうに近寄つた、阿闍梨の手を見ながら言つた。

「爺さんは煽いで居ますね。——あなた、しかし御安心をなさい、——この澁團扇は、斷じてあなたの身に觸るのではありません。」

「顔を、顔を。」

と、岩膜阿闍梨は、喘いで、忙いて、

「顔を見せてくれい。」

「あ、見たまへ。」

「うむ、生ま白い。……怨念の爺の話は、わづかばかりの人のほか、誰も知らぬ筈と思つたが。

——うむ、幼顔に覺えがある。……お身は、此家の先代、焼出されの、表具屋の悴やな。」

「何うしました、羅苧屋さん。——然う言ふ此方も障子張りだがね。」